

第五章 傳説

一、菊の池

古深川村に廣大なる池あり、其形花様をなし池邊一帶菊池花亂開して紅白爛漫たり。菊池則隆師ち名けて菊の池と稱せり。且此池は水漫々として湛へ早魃の際、河水乾涸するも池水は尙涸るゝ事なく、以て卻中の田を濕せりといふ。其の遺跡は菊池村深川の里道に沿へる竹林中に在り。菊之池の三字を刻める石碑あり。今は雜草徒に繁茂するも周圍より竹根の侵入せざるは一奇なり。

二、米原長者

舊昔或公卿の女に容色艶麗なるものあり、常に泊瀬の觀音を信じ參詣怠らず、彼女年既に二八の比父母婚嫁を求む、女子答て自ら多年大悲尊を信じ求むること必ず感應あり。希くは一七日を限り佛意に任すべしと云へば父母赦さず、子荐りに乞ひ參籠して祈るに、觀音夢中に示して曰く、汝が夫婿は都に無し、白縫の竹斯肥後國菊池郡の賤夫孫三郎と云ふ者なり、速に尋下るべしとなり、女夢覺て過世の拙さを悲み、家に歸て父母に語る、父母怪みながら兎も角も汝が心に任せよと赦しければ、婢女十餘名を具して花洛を出て、遼遠海陸を経て當郡に來り、出田村の邊に籃を造て世を渡る賤男孫三郎に尋逢て夫妻の約をなし、米原村に移り富有の身となり、米原長者と號せしとなん。

又一説に花洛に女あり、常に清水寺の觀世音を信ず、齡二八に及んで父母婚家をすゝむ、然れども此の女觀音の佛意に任せんとて、清水寺に通夜せしに、觀音夢中に現はれ汝が夫婿は外に非ず、九州肥後國菊池郡四丁分と云へる在所にて、薦編小三郎と云ふものなり、必ず之れに嫁せば福壽意に任すべしとて夢覺めぬ。女有り難く思い父母に告て、洛を出て遼遠なる海陸を経て、四丁分に到り小三郎を尋るに僅の草蘆に一人の貧民あり、女之に逢てしかじかの事を語りて、吾夫婿なり、縁を結び給へと云へば、小三郎肝を潰し、某曾て貧窮にして飢寒に堪へず、薦を編て隈府の市に鬻ぎ、朝夕の飢を助け、今日は早今日の糧を求めて食す、今編める所の薦は明朝の糧に充つと云ふ、女懷中より金二兩を出し、是にて吾今夕の糧を求め給はれと懇む、小三郎肯ひ立出てしが、頓て立歸る女如何にと問へば、此下の谷迄行きしに川に鷺の居るを取て參らせんとて、今の金を投ぜしに、二つともに打迦し、手を空くすと云ふ、女は驚き如何すべしと云へば、小三郎此こそ我屋敷に多き磯よと云ふ、女怪みて又問ければ、早黄昏に及びて、松明を燃し鐵を以て屋後の土を掘れば、實に黄金夥く出たり。是より夫婦となり、家富榮へ、即其の迹今の四丁分村の長者屋敷なり。其の後岩本村に移りて居住せし地を屋敷の谷と云ふ。又其の後に米原村に移り、今河原にある車石と云へる石は、長者の財寶を車に積んで、岩本に移るとき、路傍の石に車を挽掛け、軸の折たる所なりと云へり。

又里老の説に 用明帝の時に至て富饒の者あり。禁裡に奏して長者號を賜はり、米原長者と號す。奴婢牛馬千に餘れり。菊池谷より、山鹿郡賀茂の浦迄、田底三千町を耕作所とし、年毎に唯一日に稻田を植るを譽とす。然るに或年之を植るに漸く半にして、日西山に春く長者金の扇を以て招く、日輪竿長に返れり、然れども苗植終らず、長者愁て油漕三千を出し、山鹿郡日の岡山に瀧き火を付て此光にて苗を植終れり、日輪を招き返したる天罰にて、其の夜火輪出て居宅倉庫悉く灰燼と成て亡たり。是より日の岡山焦土となり、山石黒く萬木繁茂せず、其の時晝飯にせし團粉燒土となり、藏に蓄し米穀燒て砂の如きもの今に残れり。且耕作の道を踏切と云ふ切通なり。晝飯を持運びたる婢女十餘人の像、この踏切の崖に残れり。又曰く長者曾て山本郡駄の原長者と財寶を較べんとして、米原より賀茂浦坂口迄、田底三里に黄金の踏石を並べて出づ、駄の原長者は男子二十四人ありしを相具して金銀を出さず、坂口にて出會す。米原長者は一人の男子無し、是程敷きたる金銀は屑ならず、男子多きこそ浦山しと言ひしより其所を浦山口と唱ふと云ふ。

三、雷井

城北村大字龍德彰孝寺の廢迹に在り。何れの頃にや彰孝寺 高德なる住僧あり。一日庭前に落雷せしを捕ふ。雷化して童形と化し給仕すること久し、或時師に暇を乞ふ。師之に告げて曰く汝歸んと欲せば井を穿つべしと、忽ち一片の黒雲童子を掩ひ、雷聲轟々として須臾に大地に墜つると見る間に

雲晴れたるが、其所に大なる井生じ居れり。之を雷井と云ふ。

四、合志の七水

往昔、阿蘇大明神村々を巡視し給ふ時、或茅屋に立寄り水を乞ひ給ふに、主の入道は菴を織り姥は洗物を爲し居たりしが、餘り馳せ走りて、過つて糊の米を落せり。明神其の志を御感あり、此所に田を植うべしとて笻を立て給ふに、忽ち水湧き出づ、柳水村の糊田是なり、「主の入道が心も水も潔く快けれ」と賞美し給ひしより、入道水と云ふ。今一つと仰せらるゝにより、水汲に參りし後に疾く去り給ふを追ひ懸け御衣を扣へて水を奉る。此所を引の水と唱ふ。明神瀬田の里を通り給ふ時岩下の水口に御洗足ありて此所に休み給ふ。此の水を破子の水と云ふ。又平川を通り給ふ時水を汲む下女あり、其の水一つと乞ひ給ふに叶はざる由申しければ、明神怒つて今後思ひ知るべしとて、笻を川中に立て給ふ。忽ち水透き通りて遙か下より涌き出づ、此邊を透水と號す。今の杉水是なり。又阿蘇下野の狩の時鹿自然と下り來るとかや、其鹿の飲みたる水を鹿の水と云ふ。又大堀木に長者が水あり、鷲の水と云ふ。以上の入道水、柳水、引の水、破子の水、杉水、鹿の水、鷲の水を合志の七水と云ふ。

五、百騎歸

昔、肥前國河上に隣國に隠れなき美人あり。阿蘇より忍の者を遣はし盜み出して此地まで逃げ延

びしに、彼女心中に淀姫を祈り『我を捨て給はずば再び故郷へ返し給へ』と祈りけるに、物具したる人百騎許り、聲々に遁さじと追ひ掛る。件の者共取つて返し追ひ返しつゝ挑み戦ひ、終に取り返し歸る所に親類追來る、女右の次第を語るに右の武士共行方知れずなりけり。是氏神淀姫の御助力なりとて、即ち淀姫宮を建てしもの今の平眞城村大字平川淀姫神社にて武者の失せたる所を百騎歸りと云ふ。後に女は都に上り大和國長谷にて世を去れり。源氏物語の玉葛といへるもの即ち是なりと云ふ。

六、榎鶴

陣内村字榎鶴にあり、昔日、阿蘇大明神巡視の時榎の枝を此地に挿し給ひしが、枝葉繁茂せし故に名くと云ひ、今神木として阿蘇明神を齋る。又食を求め給ふに此地は米穀の無き由を歎きければ穀無^{イクナシ}と宣ひしより地名に稱すといふ。

七、珠數の原

珠數の原は合志村にあり。龍生院窪とも云ふ。昔、龍生院といふ眞言僧あり。定家卿の短冊を持てり。合志伊勢守懇望し家士大森主水なる者に命じて此所に殺さしめたり。其際彼僧珠數を引つ切りて殺されし故かく名づくといふ。

八、帆干の岬

泗水村住吉と富納との境にあり。往昔海潮通じたる故に住吉大明神を攝州より勧請し、地名を住吉といふ。帆干の岬とは萬船帆干をすの所なりと。近時は高江、鹽浸、田島など海に因める地名あり。

九、大御門小御門

西合志村鳥栖にあり。或は曰く、一時菊池氏、將軍宮を奉じ此所に御所を構へ、若宮御誕生の宮と別々に御所を唱へしものならんかといふ。

一〇、大池小池

西合志村大池にあり。今は大池は形跡を存するも小池は地名を残すのみ、聖德太子當國に五ヶ所の池を穿ち給ひし一なりといふ。

一一、里前^{ヒキビシ}

昔、久米に里前治部頭なるものあり。長さ三十間ばかり大なる柱の如き黒蛇に化し折々村邊に現はれ之に遇ひし者は病氣若くは危難に罹れりといふ。今泗水村久米城址の南に里前なる地名を存す。

第四編 偉人

僧 大智

大智は肥後宇土の人、菊池鳳儀山聖護寺、玉名紫陽山廣福寺等を開創したる高僧にして、菊池家一門の歸依厚く、菊池勤王史と密接の關係を有す、肥後沙門某の撰せる大智禪師錄を左に掲ぐ。

師肥後州人、以正應二年己丑、而產于州之宇土、郡長崎邨之農族也、幼名萬十、嬉戲愛佛、異平常兒、一日因謂父云、願某甲出家度父母、父感喜其言、問曰、汝投何寺、師云、大渡大慈寺、父即携謁寒巖禪師、而求度、巖一見察氣宇英邁嘉之甚矣、手把果卓饅頭與、師喫次問曰、汝名甚麼、師云萬十、巖曰、萬十喫時如何、蓋以語音相近戲之也、師曰、大蛇吞小蛇、巖曰、汝有小點慧、鉢盂之後宜命小智、師掉頭不對、巖曰、何謂乎、師云小智妨菩提、只願名大智、巖笑而諾、乃爲薙髮納戒時師甫七歲也、大慈前河商舟往來、巖因指舟問曰、汝在這裏停行舟得麼、師便鎖前面障子、巖曰、尙勞手脚在、師又瞑目、巖太加撫愛、正安庚子巖示寂、師十二歲也、齡垂舞勺、負笈游方、初見南浦明干相之建長、機語不契、尋扣釋運西堂、運太器重、師商確古今、頗蒙許可、然自顧脚跟未穩、便參瑩山和尚干加之大乘、山開示百丈野狐話、師日夜研究相從七年、一日在東廊而立、見僧在西廊而過、忽然有省、直上方丈、高聲叫曰、錯錯山一掌、師便禮拜、而退、正和三年甲寅、師二十五歲

跨舶入元、乃仁宗延祐元年也、始謁古林茂、尋叩雲外岫、又有中峰本于天目、無見觀于華頂、咸以大器飽參而稱焉、在元十有餘年、徧禮祖塔、廣探靈區、五湖風致飽酒智宇、諸山智識、無不勘驗、師自以爲中華雖濶、而不見一箇聳出于格外者、不如省瑩翁於海東也、便捲衣催歸矣、英宗詔差駕本國舶、師呈偈謝之、實泰定改元甲子也、既而解纜歸、程將半黑風簸船、檣傾穢摧身命殆危、瓢泊高麗、師偈乞憐於其王、王哀感其意、議舟送之、仍得歸帆著加州石川郡宮腰津也、是國朝正中元年也、徑登能之洞谷、省觀瑩山和尚、因值廻參、師出禮拜、山便問、子歸就父時如何、師云、古鏡臺前不假燈、山曰、邪有鑑照也無、師云、鑑照郎不無不見子孫邊事、山大肯之、師便呈三偈、山指師令嗣法於明峰和尚、峰因問云、大地有情同時成道意旨作麼生、師云、大方無外、峰曰、未在更道、師云、一葉落天下知秋、峰云、卻有賓主也無、師云、有、峰曰、如何是賓、師便喝、峰回、如何是主、師又喝、峰曰、賓主歷然、師便設拜、拜既承祖位、後結茅於加州河內庄、吉野鄉而休焉、其地也峰巒環匝、溪壑宏深、人煙迥絕、爲其友者、但猿狖麋鹿耳、師方欲匿跡韜光自便保護也、然麝之所迹德香難掩、參玄學侶爭先川輳、居未幾蔚爲叢社、山曰、師子、寺號祇陀、界內數里有象王峯、法界嶽、皎月井、白玉泉等、十境、元弘癸酉正月十七日、洞谷明峰和尚、以列祖傳付之法衣、添偈贈云、飲光大士保任事頂戴奉持雞足中祖室傳燈無斷絕、龍華會上續心宗、師拜受之、師住祇陀、未盈十霜、一錫瓢然復還肥後、創鳳儀山聖護寺、於州之菊池郡穴鄉斑蛇口山而居焉、大檀那菊池刺史從五位下藤原

武時入道心空寂阿居士信仰歸崇執弟子禮、師住鳳山、影不下山幾平二十年、述山居偈若干首、所謂草屋單丁二十年、未持一鉢望人煙者也、其清標高致、可以想見也、嘗東明和尚來朝、始寓肥後、德風偃衆、時有官命、乃就州之合志郡久米莊、革一教寺、而爲禪窟、名護法青原山壽勝安國禪寺、請明爲第一祖、師道誼太篤、明後應請住相之圓覺、師因寄偈曰、洞家春色與將闌、一徑苔封到者難、只有杜鵑枝上月、夜深獨自哭空山、觀應二年辛卯、菊池肥後刺史武重、於州之玉名郡石貫鄉、營建紫陽山廣福禪寺、請師爲開山、武時先寄附伽藍界、牒略云、大智上人曾正中元年從異邦歸、占開寂地、擲名利境、可傳靈山少林永平之古風、於盡未來際之志願堅固也、寂阿不堪感嘆隨喜之至、永以當山奉寄附上人者也、吾後代兒孫須遵此旨云々、菊池武士欽師之德、求爲弟子、師乃剃髮授戒、名祖寂照、師一日手寫自影、求贊於別源旨公、旨嗣東明時在久米安國寺旨把筆題、正平之際、師往肥前高來郡、卓水月庵爲終焉地、同二十一年丙午冬示微恙、至臘月十日端座、戡化於水月丈室、閱世七十有七、僧臘六十有九、閣維分骨塔于開翹之四寺、名曰大梅、出嗣子一人、曰禪古、繼席董祇陀廣福云々、

僧 別源

合志久米安國寺の僧なり、詩偈に巧なるを以て著はる、貞治三年十月八日脱化す。

大智禪師肖像贊

別 源 圓 旨

枯淡道貌、蕭洒胷中、倚曲椽床、心眼玲瓏、寂而常照、虛而普通、幽谷間雲、寒巖雪松、紗密工夫

不假修功、惡辣手段、難當機鋒、得旨於瑩山、傳衣於明峰、應大陽遠識、與洞上孤宗、破今時之弊、回古道之風、新豐曲一唱、鄒衛音忽空、獅子吼聲振群狐、迴絕蹤、開四處爐鞴、烹凡烹聖、張漫天網羅、兮打鳳打龍、異苗麟茂、南谷回陽、長庚沒影、永光生東、衲子爭奔走、檀信競歸崇、夫是之謂開山祇陀、現居興福、永平六世嫡孫、天下馳名當代宗匠智禪之尊容。

大智偈頌

送源上人

火種刀耕三十歲、勤勞須效古人風、胸中若蘊英靈氣、他日應興洞上宗。

辭源長老

月冷蒼梧鳳不栖、夜深金殿侍臣歸、可憐陽廣山前草、不見異苗繁茂時。

□僧 桂菴

僧桂菴字は玄樹、島陰と號す、本貫周防山口の人、應永三十四年を以て生る、文明八年菊池重朝に聘せられて菊池に來り聖學を講ず、永正五年六月十五日鹿兒島東歸菴に卒す、享年八十二。

桂菴禪師碑銘

室町氏之季、文學掃地、搢紳博士遞世衰替、而浮屠氏專秉文柄、是以遺明之使、率在五山僧徒、且時當博士家嚴守漢註、不許濫用新說、則世欲講程朱之學者、必遜入緇流、髡其顛而儒其學者、往々而有之、在昔薩摩國有一禪師、曰桂菴字玄樹號島陰、本貫周防山口郡人、不詳俗族、童艸往洛龍山、從雙桂和尚、受內外學、嘉吉二年師齡十六削髮登戒壇、儒書則篤信宋說、又能文詩、應仁紀元師中選使明國、入見憲宗、宴賓以渥居凡七年、遊歷山川親從鉅儒以朱子經學、尤逐魯蔡氏傳、其於詩章則與彼土之文士、相頡頏、每一詞出藝林傳誦、稱其有盛唐之風、文明五年歸報使事、當是時、京都兵燹騷擾、不能譚學、於是暫避跡石州、亡幾又赴西州、是時、東肥菊府新寔靈館崇儒學師往而客之、既而薩摩國龍雲王洞禪師、監其國老數輩薦、師於國主公、公乃厚聘請師遂來、薩摩始謁公市來、公一見服其雅量特加禮敬、乃、命剎、一寺於鹿府住師於此因號其寺曰島陰院曰桂樹、師又與國老伊地知周防守重貞善因皆議始刊大學章句、實、皇國印行新註之嚆矢也、長亨二年遷寺於城西、爲今城北射圃坂地、初寺瀕海岸、善爲風潮所墮、至此史地稱呼如故、十月焉、命適日州飯肥、董安國席、先是明商貢船舶餼肥、公遣族人忠康鎮其土、使師兼掌簡牘、自後數往數還、至明應九年欽奉鈞帖主建仁寺、尋轉南禪寺、居週期辭、歸於薩、著一書、辨經註漢宋之同異、又以國字、解朱註例、定國讀式、既乃築方丈於伊敷郡、名曰東歸菴、薦弟子雪便之代董安國席而自老於庵、以永正五年六月之望、溘然示寂於東歸庵、壽八十二、掩骸於菴地曩者薩藩士伊地、知小十郎季安、遠寄其所著禪師

傳、且謂桂菴浮屠、而於吾藩則爲儒學之宗矣、星霜已久人莫能知其由、因與同志者相謀將戮力樹一碑以傳其跡碑記之筆、敢以爲請不容峻拒乃漫撮其一二經緯之、余嘗爲禪師像贊今復書之於此以代銘曰、

吾道一貫、無隱乎再、身披禪衣、心服闕里、洛派東漸、寔自師始、心月千古、柱影遠叙

天保十三年歲次壬寅七月下澣 昌平學教官佐藤坦撰文

隈部忠直

隈部ト總介忠直は隈部朝豐の子なり。菊池持朝、爲邦、重朝の三代に歷仕し、誠忠なる武將たりしのみならず、當時稀に見るの學者なり。彼の菊池重朝が教育行政の良輔たりしは實に忠直なりしなり。希世和尙は忠直を評して『忠直は菊池公の賢佐なり、最も武略を以て稱せられ、兼て文雅あり』と云ひ、天隱龍澤は『肥の國たるや、文あり武あり、民は禮節を知る、實に邦君仁化の及ぶ所なり、隈部公習武の暇、尤も雅を嗜む』と云ひ、民間には『忠直公は八幡太郎の再誕なり』『高山重忠の再生なり』などと噂したりと云ふ。

忠直は頗る忠孝の念厚く、菊池持朝の三十三回忌に、正觀寺に龍虎の屏風一双を寄進せし添狀は現今菊池神社にあり、忠直の母は十七歳にして忠直を生み、翌年正月死去せしが、忠直の生れしは應永三十三年、午歳の午日の午刻なりしを以て、忠直は毎日午刻には母の菩提を弔ひ、又自ら馬頭

觀音の像を刻みて本尊とし西迫間に光九寺なる一寺を建立せり。光九寺といふは日中の九つ時即ち午刻に因みしものなり。又母の三十三回忌には六萬餘字の法華經を一字一石宛に寫し之を光九寺に埋めて追福を營めり。其の碑銘は正觀寺の德順和尙の撰に係る。其の銘に曰く、

兵部侍郎源忠直之母

兵部侍郎源忠直之母、義雲慈孝禪定尼者、將監藤氏朝行之女也、應永十七庚寅誕質也、資容端麗、四德兼備、十四歲嫁、而配紀州刺史源氏朝豐之室、內克盡婦禮、外允親於九族、十七歲生忠直、其明年嬰微疾、遂掩粧矣、春秋十有八、葬以長殯之禮、實應永三十四年丁未正月二日酉刻也、茲長錄
□歲巳卯正月、當三十三忌辰、於是孝子忠直遂□□之日、仲追遠之誠、躬收拾拳石、漸寫蓮經六萬餘字□□之一字一石焉、迄于寬正二年辛巳七月二十五日、其功既畢矣、輒□□徙營兆域、封壇壇藏石經也、寔匪孝道之□□深厚、誰能至于此者乎、忠直告余曰、曠昔子羔爲母殫泣血三年之哭、曾參爲母極不飲七日之哀、王修爲母動輟車之誠、隱之爲母發感鄰之歎、丁生爲母存于刻木之敬、雖今昔之事或異、而子母之情乃同、我在檣櫓之中喪母、勿遂承顏□□志、此豈非於命哉、然生成鞠養之恩榮、消塵不能酬之、今也立石廟一基、□于先妣德齒、傳之後昆、以欲擬于所謂刻木感鄰不飲泣血等□□公銘請于□□□三也余三□□至願述其梗槩□□銘曰、
藤家賢女、源氏閨儀、真心有素、懿行無虧、內外和協、壺彝孔宜、住世十八、日逼崦嵫、報恩一

句、蓮經七枚、字也石也、何曾磷緇、岑然靈廟、瞻之仰之、慎奉遺體、傳以誅梓、

寬正二年辛巳夏七月二十五日

野釋德頤謹誌

□水足博泉

名は安方字斯立平之進と稱す博泉と號す父屏山の變死によりて家祿を除せられ、隈府に來り西照寺内に於て子弟を教養し享保十七年十月十四日歿す。年二十六。墓は城北黒石村にあ

り。

秋 山 玉 山

嗚呼是水足博泉氏之壙也、君諱安方、字期立、考諱安直、字仲敬、稱屏山、先生爲肥府記室、妣前原氏、君生穎悟、有神童名、靈雲公召見諸坐、令講經、及賦詩屬文莫不盡辨明敏捷矣、公大奇之、年甫十三、從屏山先生、見韓客於攝之鴻臚館、唱酬頃刻盈軸、學士申維翰稱其奇曰、一盼昧可占雲霄羽毛因爲字曰斯立、號曰博泉、後及冠也、遂行之、君之學專求諸古以經濟自負、不取俗儒拘囿說、其文滔々如黃河千里一瀉、其才之淵不竭也、蓋符甲維翰言焉、是時號先鳴巨擘者洛有東涯氏、武有徂徠氏、君皆通書言志、徂徠氏最賞嘆其海內無比云、享保十七年壬子十月十四日卒、年二十

六、葬于谷尾崎山中、屏山先生墓側、噫蒼々邪人邪、歸之千里一日廢矣、悲哉夫、所著有太平策十

二、禮樂問、大學辨、五鳳樓集等、是精靈所鍾、是足以不朽千百載矣、誌諸幽者、豈其在多、

一水足博泉、名業元、字安方、世臣熊本侯、父屏山、名斯立、爲文儒、博泉生有異稟、詩文妙敏人皆稱神童、江都物徂徠、亦每爲褒揚、正德中、韓使來聘、博泉出見之、詩文唱酬、韓使驚嘆曰此

子有老成風、必揚名於天下、乃命號曰博泉、以獎之、及長文名益高、享保十七年、有賊入其家、博泉乃拔刀、與父禦之、賊武夫也、兇猛善鬪、父竟自殺、博泉亦軀被十餘創、會鄰人來救、獲與

俱殺賊、於是肥人翕然稱、博泉父子非夫也、或謂文人軟弱不足與也、熊本因誅賊屍、而又禱博泉祿、以爲庶人、京師伊藤東涯、素愛博泉之才、聞其遭禍、乃作書贈之、略木正範亦寄書、激厲

勸去國、而博泉不果去也、既而意忽々不樂、荐積困苦遂如廁書絕命詩于其壁而自殺、續篇云、博泉之死、薄人云書者、恭傳聞之誤也博泉天資、穎異、年十六與物徂徠書、質問疑義、徂徠驚嘆、嘖賞不容口、二

十四歲擬仿隋王通、爲太平策、博泉幼時、能大書大字每客至父屏山必命書之、一日客至、博泉方

嬉戲、屏山數召之、乃徑前客前、張兩手開股而立、客歎其機驚、近世書叢

一水足博泉以夙慧聞、物徂徠見肥人、託季攀龍太華山記曰、卿歸謂博泉曰卽席句讀于此記、予則截

與雙耳、博泉聞之、立爲句讀、一無差誤、其人後又適江戶、見徂徠請得雙耳、徂徠晒曰、不神童

者不可弗與也、但於博泉、不與而可、同上

一楠公の墓題は、水戸西山公御筆にて、嗚呼忠臣楠氏之墓とあるを、水足博泉は、忠臣の字多し、中々忠臣位の事にては無し、故に、たゞ嗚呼楠氏之墓とせしならばよしと申されしと、蓋梁先生の話なり。

字號說

己亥重陽前一日、余留大阪、見水足氏童子、年十三、號出泉以刺自通曰、某名安方、好讀書哦詩行草、願奉君子半日驩、使書所爲詩、詩筆昂然、如汗血駒、膚瑩玉雪、隅坐端麗、一盼睐而可占雲霄羽毛、余爲撫頂爾三、字之立斯立、以其有立身大方之象、更其號曰博泉、寓思溥博時出之義、手書貽之、且告以無相忘、即起拜謝曰、庶幾夙夜不敢辱命、是言俱可書、朝鮮國宣務郎、秘書著作、兼直大常寺、申維翰題于大阪使館西本願寺、

與物茂卿書

藪 慎 庵

吾州教官水足仲敬子斯立、客歲會韓使過攝津、廼唱酬筆語、釐爲一卷、收諸巾笥、頃懇僕求先生有弁語之撰、即以仲敬書並詩稿、謹呈左右消暑之際或連椽筆、豈惟聲價是倍、亦彼家之青氈也哉、斯立今年十有四、才器敏慧、其詩不亦佳乎、復墨生所能知也、而父子劇於嗜書、拙於修世、方可愛者、先生不拒之幸甚、餘具前書、伏惟照亮、不宣、慎庵遺稿

答某甲疑目

藪 孤 山

承問、水足博泉、名安方、字斯立、博泉其號、七歲能詩、十三接韓使、唱和如嚮、十六與書物茂鄉、□論□□激賞、二十三著太平十二策、擬文中子、二十六沒、斯人觸目成誦、下筆成章、蓋神才也、不幸短命可惜、孤山遺稿

通刺

水 足 屏 山

僕姓水足、名安直、字仲敬、自號屏山、又號成章堂、蔽邦西藩肥後州侯源拾遺之文學也、前聞貴國修善鄰之好、星輅既向我日東、切有義封請見之志、於是跋涉水陸一百數十里之艱險、季夏先來于此、西望翹企、侍文旃贊臨有日矣、今也三大使君及諸官員、行李無恙、動止安泰、繫錦纜於河口、弭玉節於館頭、天人孚眷、野朝交歡、是兩國之慶也、萬福至祝、此子名安方、號出泉、僕所生之豚犬也、今年十有三、略誦經史、聊知文字、願一觀諸君子與馬衣冠之裝、威儀文章之美、於是遠凌海山風濤之險、自我肥後州携來耳、

與水安方書

伊 藤 東 涯

聞足下之才名十餘年矣、未見足下之文也、頃者有人傳遞角、就觀封題、則八月二十二日、足下寄僕書也、始見足下之文矣、尙未識足下之面也、伏審夙好問學、尊信語孟二書、又因人傳虛名、叨蒙傾想、見求質疑媿々百數十言而弗寔、雖未識足下之面、已神交於千里之外矣、大抵世之知爲學者、莫不取信於聖人之言、聖人之言、莫不徵之舜倫、質諸聖人之言、而不合則非教也、徵諸舜倫之間、而

不行則非道也、亦何多岐亡羊、彼是此非之爭爲、足下平昔從事於語孟二書、則既有所本矣、以如是之才、如是之志、自是以往、積以歲月、則左來右去、多々益辨、輻輳于毅、目提于綱、後來成就一大事業、乃在足下掌握之中未即承教、馳想亡窮、惟千萬爲道自愛、不宣、庚戌十月二十三日詔述文集

答博泉書

同

二月初五日、貴邑人上都、辱托寶箋、就審德履清裕、曷勝欣幸、喻擬河汾太平十二策成一書近日錄寄、尤所欲捧誦云、先王之道、禮樂陶鑄、以成人材、後世以一定之準、是非百世、爲可疑也、縷々垂諭、足見研索之工日進就、高明之見日新、不敢自是、而亦蒙下問、且感且愧、便人在門、促報、忽々、覆字、幸恕卒易、不具、

與水足博泉書

同

長胤頓首、致吊於吾友水君、聞足下遭曠世之禍、頓喪所天、繼有官命、罷官除祿、嗟不幸極矣、可勝言哉、夫足下之才、卓出千載、海內比肩、無相上下者、而足下之禍、亦千古所希有、以奇士得奇禍、亦造物者之所爲耶、然去者已不可奈何、來者猶可追、自今以往、自重千金、以全先人之業、揭諸天下、庶幾龜玉之毀、爾爲完物、是已、僕嘗竊與洛人、識、足下人中麟鳳、惜身在海隅遠藩之末、薄官微祿以羈之、莫以大顯也、而今不圖、爲肥侯廢、雖不幸極矣、亦天意所有僕竊爲天下喜焉、而足下罷官之後、未聞蓬累而行是何濡滯、蓋重去父母之國者耶、雖然、君子遲々去國者、中庸

之常也、足下身受不測之禍、逢希世之變豈可以常道處之乎哉、僕願足下急流勇退、絕迹於西藩、從淀河而遡北極、則僕雖貧分家產之半、以給足下之養、縱有老母弱妹、不至飢餓充溝壑矣、豐士人木正範來學、其人質直、可任以大事、爲僕說足下平生甚詳、聞足下之敗狀也、悲憤見乎色、繼值西光上人西歸、謹修尺素、以表寸丹、去國之計、在足下熟慮之、惟千萬亮察、不宣、七月十五日、上博泉大儒宗案下、伊藤長胤頓首再拜、
副啓、足下瘡痍未詳差否、足下不幸極矣、恐療養調護、不能如意、深爲之慮、洛醫人有甚善外治者巖子、深以足下爲惜、縷々在西光上人舌餘、不贅、

與水足博泉書

木 岐 正 範

範謹修書、以吊足下大故、僕嘗聞人之難、未聞甚於足下難、亦嘗見人之才、而未見大於足下之才、蓋天欲降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、動心忍性、益其所不能、甚哉天於足下、聞頃家有盜賊之難、足下執劔當賊身蒙瘡十有六、而不至于死、則非天哉、然父死於賊賊死於援、是以肥人饒々、不以足下父子爲天也、甚者謂、父人雖有才不足共有爲焉、於是乎、官誅賊屍、次奪足下祿、足下以文起家者、賊以武爲業者也、文臣武夫交鋒而鬪、則其成敗豈俟今日論而定耶、足下討賊也勤矣、縱以肥人饒々、於義無恨矣、足下名削於藉、恬然居非笑之中、而不疑、則僕爲足下取也、抑病而未能超耶、將道之有足以雪辱者耶、不然則朝失於君、夕蓬累而去、此大丈夫進退之分也、豈累々

如喪家狗、往歲足下與僕言、百工居肆以成其事、士修業亦然、與子弟如就學于京師、速期足下有故、不能修其言、亦離斯難、今僕在京而聞此舉、憤然怒目張膽以恨、空拳無所施、爾來每一念之、未嘗不痛憤大息、而今足下圖從居君父之地、以得憐於人、不如就有知已之居、而雪辱於世僕今困乏雖無推轂之力、幸僑居中、有餘地居足下、足下明斷不避嫌疑、來就于僕、欲遂夙志以共有為、足下幸富年興才、勿敢為縮之計、果天不辨才、則奮翼瀛池、亦當計日而埃也、豪傑士所共期、與小拘徒共論、請足下屏左右以熟圖焉、僕不勝感激、陳卑情以忘固陋、乞伏照察、不備壬子秋九月十八日、皇肥陽水先生案下、豐州木正範頓首再拜、

在江都聞水斯立家罹火災舊物無恙遙有此寄

秋 山 玉 山

聞說文章光焰開、急風吹上讀書堂、孤琴焦尾人無恙、雄劍隨身心未灰、千里何須傷馬問、一池堪笑及魚災、君家但使青氈在、吟坐應啣濁杯、

讀水斯立遺草有感

同

伊人屬長夜、垂堂誤千金、千金亮可惜、永古懷苦心、弱齡讀書滿五車、結髮立言排百家、鍊研倒卷銀河水、星辰錯落筆吐華、筆如九鼎力萬鈞、漁竭天地無遺鱗、珊瑚樹寒老龍泣、貝宮寶藏為一貧、翻然忽叨天闕去、青鳳縹緲不知處、秋老薛蘿滿慶宅、人間餘太平策、讀之涕零不能禁、谷口烟月向人白、
玉山詩集

□澁江紫陽

名は公豐字は子錫貞之丞と稱し、紫陽と號し、子弟を教導せり。寛政四年七月二十二日歿す。享年七十四。菊池郡亘村に葬る。

紫陽澁江先生墓碣銘

翁諱公豐、字子錫稱貞之丞、自號曰紫陽、姓澁江氏大臣橋諸兄之苗裔也、諸兄公之孫曰島田丸、稱德帝命營春日祠、於是祭水神於猿澤、水神威格、遂能使役其贊御、祠得以成帝說、乃命主天地元水神之祭、賜御書及笏、自是而來、橋氏世々尊崇水神云、島田丸六世孫曰好古、大納言鎮守府將軍、伐叛臣純友有功、封伊豫、好古七世孫曰某、鳥羽帝賜公一字、曰世々以公弁名、於是某更名曰公光、公光孫曰公業、嘉禎中、移封肥前杵島、公業卒、子公義嗣、公義有四男、長曰澁江公村、次曰牛島公茂、次曰中村某、次曰中橋某、公義獨命公村奉水神、他子不得與焉、公村五世孫曰公治、是時天下大亂、公治屬足利氏、足利氏屢賜書以褒其閥、其書猶存、公治五世孫曰公勢、徙居多日包城、公勢子曰公親、與後藤澄明戰不利、因龍造寺隆信、公親有二子、長曰公師、次曰公重、來寓我山鹿、處數年、舊臣來迎、於是城潮見山居焉、既而為有馬氏所陷、公重戰沒、公重在山鹿也、娶合志氏有子曰公威、父之歸杵島也、留在外家、實翁之五世祖也、公師子曰公種、先是公師有勳於大村侯、侯賜公種以大村氏、以女妻

之世爲著族、公成卜居菊池也、建天地元水神祠、其嗣曰公實、其嗣曰公春、其嗣曰公清、翁公清弟也、公清無子故翁承嗣、世不墜舊業、以祝爲食、翁幼學於水斯立、後師事鶴灘加先生、以菊池之僻遠名於文學者若干人、蓋翁覆翼之、且北鄙之士、及邑人子弟、受翁之獎勵裁抑者、不可枚舉也、寬政三年命班處士、褒之也、方今士庶之分甚嚴、翁得班士類、闔國榮之、翁多技能、若理插卷法昆侖羅悉曇之學頗極其蘊、最善書、諸體適美、稱於一時、屢遊豐後、岡侯賜銀五十枚者三、翁爲人嚴也、雖幽居獨處、必正座儼然、其接人也、溫柔能得其歡心、以寬政四年七月二十二日沒、享年七十四、翁終身不娶、其族公正爲嗣、亦好學、教導邑人命班處士、來請碑文、全乃述其世系、繫以銘、銘曰、時人好高、多卑世業、乃怠乃慢、它轍之躡、翁也勤教、奮躡之井、其事似汚、其志則峇、繼述是孝、莫愧于心、

享和三癸亥七月望

府學助教

大城煥撰

一澁江紫陽、名は公豐、字は子錫、通稱を貞之丞と云ひ紫陽と號せり。隈府町に生れ、學を水足博泉に受け、加々見鶴灘に師事せり。當時は武道盛にして、文學を輕んじ、在方にして讀書力あれば、政事に批評議論杯多しとて、讀書するものは、役人忌み嫌るゝ風ありて、一體に人の書を讀むことを嫌ひ居れり。因て紫陽先生は、晝は家居し、日の暮るゝを待て、鶴灘の居らるゝ、山鹿郡分

田村迄、往復五里餘の道を通學し、頗る困苦して刻勵し居たり。然るに時世の變遷は妙なるものにて人目を忍び學問せるものが、追々世の信仰を受け、晩年には官より教導師を命ぜられ、家塾を開き生徒を教授せらるゝに至り、就て學ぶもの前後凡そ三百餘人に及べり。(澁江晚香話西口世馨識す。)

家塾

- 一名稱 集玄亭
- 一所在地 菊池郡隈府町
- 一學科 漢學、詩、文、筆道、
- 一教科目 十三經、歴史、諸子、
- 一學習年限 制限なし
- 一束脩謝儀 寄贈に任す

秋日過光九寺

澁江紫陽

幽期促杖履、古寺入秋陰、樹々殘蟬靜、峰々落日深、但教狂醉許、遮莫暮寒侵、四顧總清景、澹然生隱心、

秋日過法壽寺

第四編 偉人

寶林秋寂寞、山鳥下前峰、時起窺潭水、暮雲結作龍、

訪菊池江翁留宿數夕翁今年六十需余壽詩賦贈 藪 孤 山

桃李不自美、蘭孫不自芳、高人忘其高、下流亦何傷、江翁傳祖業、乃在闌闔旁、塵同而光和、誰知心所鄉、六十如四十、未見片毛蒼、一心絕萬累、無寧不老方、閨閣無脂粉、長齊笑太常、養族託家政、婚嫁遂向長、揚袂入名山、翩如野鶴翔、披雲朝北極、踞巖望東滄、一嘯振林壑、遺響激清商、瀟氣溢眉宇、始如雲月光、我今携幽侶、三日宿其房、猗彼澗溪毛、采々滿筥筐、道經披夜月、瑤軫拂朝霜、僮僕敬愛客、臨別進數觴、

□澁江松石

名は公正字は子方字内と稱し松石と號す。隈府の人、子弟を教導せり。文化十一年五月六日歿す。享年七十二。菊池郡亘村に葬る。

松石澁江先生墓碣銘

嘗記、余弱冠之時、同靈雨伊山人、游菊池、探山水、山人要余曰、有紫陽澁江翁者、教授於菊池之上、請往訪焉、遂同過其廬、始見翁、談論移晷、時君爲其養子、侍側怡々如也、遂導山人及余、止菊池之墟、休觀月樓之趾、悲歎慷慨、盛談往事、遙望西南際、指點其保障許曰、某隙在斯、於是所

謂十八外城者、歷々在目、吾因知君之能諳地理、其必非尋常之士也、後聞君代翁授生徒、翁歿之後門下濟々猶翁在之日、藩府賞賜士名、又每入城府、挾書遊學館、質問者宿、吾亦屢相面、又知君之勉學、非特精地理、果異於尋常之士也、居數年著肥後鄉名考、并菊池風土記、藏於府學、是時余既與聞學政、因上之政府、乃賜櫻章羽織賞之也、及年老、門人又上薦表於府學、盛稱君之教導、老尚不已、余亦言之於政府、無幾君遭病而歿、君而在、必有厚賞、是可惜矣、時年七十二、實文化十一年、甲戌五月六日也、君元紫陽翁同族之子、諱公正、字子方、稱字内、自號松石、爲人質直退遜、其學博涉、治禮經、好詞章、傍嗜國學、和歌、習武家故實、所著有儀禮凡例考筌、洙泗正旨、古學規、詩文和歌詠草、各數卷、苦具野佐和多理一卷、君系出于橘諸兄公、世以祝爲業、苦奉祀天地元水神、君歲時有祝事、巡郊野、或踰疆、所至逸宿相留受教、鄰邦之君亦有需文賜金者云、初娶某氏、生二男二女、早卒、再娶原氏、生二男一女、皆嫁、一女尙幼、四男長曰安宅、次曰勝真、次曰次郎助、次曰素、皆敏學、嚮大祥之二月、門人與四子相謀、建墓碣、請文于余、因錄吾所以知君之始終、以授之、亦庶幾足以悉君之爲人哉、又係以銘、銘曰、

有筭斯山、有菊斯水、其人維胡、維橘維氏、祝繼父業、學繼父志、于家克孝、孰大乎是、

文化十三丙子三月

辛 島 憲 撰
石 惟 明 書

一、松石先生は、紫陽先生の同族の子にして、紫陽先生の養嗣子となり、學を紫陽先生に受け、紫陽先生に代り、生徒に授けられしが、門下濟々猶紫陽先生在りし日の如く、生徒卻て多を加へ、其數四百餘名に及び、其重なるものは、桑滿伯順、葉室直次郎、町野玄潜、町野玄肅、池邊謙助、山室宗仙の如き、皆業成りて後、本藩に用ひられたり、猶松石先生の學徳の高きことは、當時藩の中老たりし、島田嘉津次氏は、門人同様に先生を尊崇し居たり、又天下學政の宗領たる林家も、餘程敬慕の模様ありたり、而して先生は勤王の志厚く、武朝申狀は獨正觀寺にありし迄にて、若し萬一の事ありては、天下後世に傳らざらんことを恐れ、長瀬眞幸氏に謀り、當時天下の奇書珍籍を蒐集し居る、塙保己一氏の群書類從の中に收め、不朽に傳へられたり、當時の狀況は、長瀬氏の跋及松石先生の記によりて明なり。

一、當時は、徳川幕府全盛の時代にて、天下勤王の事を言ふものなく、苟も勤王の事を言ふものあれば、身首所を異にすると云ふ有様にて、水戸義公の、威望と威閥とを以てすら、尙幕府を憚り、楠公の碑を建つるには、頗る苦心し、一夜にして、立てしと云ふ位なりしに、正觀公の墳墓、寒烟荒草の裡に、埋没せられ居るを憂ひ、隈府の富豪宗英益と云ふ人に謀り、楠公の碑と同型の

ものを立てられたり。

一、塙氏武朝申狀を群書類從中に收め、其收めある巻を松石先生に寄贈せられたり、其書現に澁江氏にあり。卷にある長瀬氏の跋、

此二書、藩内傳之亦希矣、而惟澄申狀、獨存於阿蘇大宮司家、然文字有難讀者數多、但無類本、故不能是正矣、武朝申狀、則藏於菊池正觀寺、往々有傳寫、而珍之者矣、往年邑人澁江公正、恐其久而泯滅、因有鏤梓之志、而未果焉、余去歲赴於江門、聞塙翁好古之風、來往於其門、適值翁群書類從之舉、語次及茲二狀之事、翁因云、附諸其輯中、今茲歸藩語之公正、公正大悅、乃謄寫正觀不寺所藏武朝申狀、校正以一柳某本、見致於余、阿蘇大宮司惟馨亦聞之、乃寫其家所傳惟澄申狀、見投於余、々并爲一冊、校正既成、致諸塙翁、以議不朽矣、嗚呼翁好古之不可已、施及於僻遠之事、是古良將忠烈之所以不可遺、而亦竊足償吾黨好古之志云、

寛政六年十一月十五日

肥 後 藩

長 瀬 眞 幸 識

長瀬眞幸嘗語余曰、江戸塙翁者嘆天下之奇書舊典諸實錄之未鏤梓者、久而泯滅、泛求之天下、輯以著群書類從六百卷、事審於眞幸所誌武朝申狀之跋及書、上木既成、塙翁眞幸贈予此一冊、以示武朝申狀收於輯中云爾、

寛政十二年七月 日

澁江公正誌

四〇〇

一、町野鳳陽より、澁江清灘(松石の嗣子)に與へし、書東拔録、
 此二三日後、澤村(宮門)世子(林家)に初謁仕候處、澁江字内(松石)と申人存居候哉と、御尋に相
 成候、返答に、即葉室町野等も、出彼門申候と、答候由、如何様の事にて、能く被存候哉、林世
 子杯も、能々御存被成たる様子に御座候、僕去春以來、陪宴の節、風土記の事、折々御尊御座候、
 累葉徳之風、已入國子祭酒之耳、於僕大慶仕候、御序宜敷奉願候、
 一、島田嘉津次(藩中老)より、澁江松石に與へし、書牘拔録、
 嚮者、不佞始赴隈府、乃接光儀、以暢樽陶、厚蒙不棄、信宿飽徳、何事加之、恭惟足下數十年之
 後浴國家之化、傑然一方之文宗矣、受業門下者、數旬餘日、虛往實歸、深荷殊眷、頌徳無已、

家塾

- 一、名稱 星聚堂
- 一、所在地 菊池郡隈府町
- 一、學科 漢學 詩文 筆道
- 一、教科目 十三經 歴史 諸子
- 一、學習年限 制限なし

一、東脩謝儀 任意

一、生徒概數 四百餘名

著書

- 菊池風土記三冊 肥後郷名考一冊 洙泗正旨一冊 古學規二冊 儀禮凡例考筌四冊
- 苦具野佐和多理一冊

長歌行

澁江松石

挺々園中樹、燦々發華滋、華滋一何麗、光耀同往時、人生不如華、日夜零麗姿、麗姿不久全、孰有
 百歲期、及此少壯日、應須醉酒卮、今我不歡娛、老大遺傷悲、

雜詩

金鼓振四隅、輕騎獵山陵、云是公孫子、俠氣凌峻嶒、金鞭耀朝輝、駢服翩如飛、徒搏斃猛獸、腥血
 灑獲衣、相遇翠巖間、迎我欲俱歸、榮盛非所願、所願遂肥遁、隱顯各異趣、長揖復還返、

菊池

王師十萬擁西州、遺跡蒼茫池水頭、空有菊花餘舊色、芬芳不盡幾千秋、

磨扇賦

我朝之皇統、從開闢至今、神孫綿々、爪愆惟降、實皇天后土、聖祖神明之所護、孰得抗之哉、是以

自古叛者斃、謀者亡、故天下五尺童、皆知一姓傳無窮矣、宋太宗聞僧奮然之言、歎其美、不亦宜哉、然元弘之亂、英雄蜂起、從其所招、屬其所利、以無天子、獨唱勤王者、畿內有楠氏、海西有菊池氏、其忠足與日月爭光、故人々慕之、千歲之後、語及二氏、則怖慄慷慨、未嘗不歎、菊池氏所奉、征西將軍之麾扇、今猶在北宮神祠、視之則其威風餘烈、尙足使人生肅敬、因作之頌、

擇堅革之良、厚薄協宜、革質鮮麗、精製密緻、刑象於天、色則於地、柄不充尺、燦然能主指麾、夫戰之奇正、兵機皆發於此、彼將帥之受命、闔外專制之、哮囀之卒、被甲持秘、後負岨嶮、前臨水濱、張作鶴翼、萃作魚麗、或欲固守、或欲驅馳、成敗所繫、豈何容易、入決策幄中、出乃馬上麾、鼓鼙々應、無不隨響、鏑引節軍裝、騷々士風、矯逸不避、亂矢斃彼渠魁、提書速趨、寔之大事、一麾獻凱、黍庶受賜、何茲扇之要、一至於此也、若則麾彼征徒、行觴陳馘、養其餘勇、巡列撫之、仁風之所施、挾纒何及、斯亦復茲扇、職是由矣、或三軍陷死地、背水侵忌不遑、深溝不能、高壘忽勁敵襲逼謀、不知所出、則破釜頷燒廬舍、豈聞金之爲哉、勇氣咆勃、無一還志、鏖戰轉鬪、於日不已、運命在天、孰知後語、方此時也、彼將帥之神、率意匠發、奇速如脫兔、猛如奪兕、援抱復鼓、此扇一麾、勁聲氣、則彼竭我充矣、步騎交奮、摧剛塞旗、刺無虛刃、射無空矢、敵軍惟靡、轉患作喜、是良將之略、非茲扇、何以令之、伊茲扇之於戰、寔衆命之所持、憶彼元弘之亂、嗟荼毒之至、四海揚波瀾、虎狼劫天位、名分墜地、大類綱紀、惟此菊池氏、涅不緇、挺生秀發、欲排雲顯朝曦、烈々

勤王之師、非楠氏誰繼其美、能奉一人於南朝、傳世二十四孫、孫々子々、實同終始、無君而不戰、無戰而不持之、扇乎々々、俯尊其威風、仰感忠義、永藏神廟、不朽不毀、傳萬世示後規、

□僧 玄密

一名獨芳、字は丹淵、釣雪と號す、隈府廣現寺の僧なり。澁江士錫と共に加賀美鶴灘に學んで名あり。明和八年九月二十四日示寂す。年五十五。

樂洋集は細川靈威公の世に時習館教授藪孤山に命じて國中の詩を選せしめたるものなり、作者二百九人、詩一千三十首、寶曆明和の際に於ける肥人の才の美、此編に於て其の一斑を窺ふに足る、集中玄密の詩一首あり、左に録す。

僧玄密 一名獨芳、菊池西光寺僧、詩一首

松 居

灌園愜嘉遁、曳杖事躋攀、樵唱漫成曲、農談自解顏、終朝唯聽鳥、無日不看山、笑彼輕肥士、何如耒耜閑、

廣現寺玄密傳

師一名獨芳字丹淵、號釣雪、以享保六年生、第六世智曉之長子也、年甫十一、遭母岡山氏大故也

勲愷有遺訓、師慟哭多年、既而學志、漸萌、與友人澁江士錫、學加賀美鶴灘之門、時鶴灘居于志水之濱、相距三里餘、當此時、假武獨未遠、如文學、人唯記姓名、通筆札則爲足、偶有修之者則相攢而笑之、甚則有被拘禁者、二人在此間毅然不屈、乃待四鄰皆就幕而發、未哺而還、如是者多年、終爲城北學海之陳吳矣、後世之學者、負二人亦深哉、寶曆二年、藩大改革之年、第六世示寂、師乃繼法統、兀々教導不怠、於是、遠近靡然化其德風、是以一開法筵也、道俗子來雲集、貧富皆接踵、如每年祖忌、必搬法座于堂椽、備巨桶、以受群參之賽錢云、人呼謂獨芳如來、同年四月隨弟子處厚上京、時本利安居、道粹講安樂集、僧樸講群疑論、師乃列講筵而歸、同八年春、大修繕本堂、輪奐之美始具矣、秋修宗祖五百回法要、西光寺院主父子來臨焉、澁江士錫及市鄉富豪皆來助法筵、亦爲一時之盛典、明和八年九月二十四日示寂、時五十二、男女各二、長曰右京、第八世慈忍師是也、次曰左中、未壯而歿、女一適光運寺、一歸平井勘兵衛、師道行恪謹、資性好學、佛乘之外通儒典、兼善詩、書亦不拙、所謂樂泮集中之一人也、且藏書太富、和漢竺之各籍、汗牛充棟、每冊必見菊池西光寺玄密押印、弟圓乘亦有學識、就本山之學識與彼地、龍象馳驅、頗有名聲歲僅過三十而歿惜夫、

□宗 英 盈

姓は宗、諱は英盈、傳次と稱し、菊山人東籬と號す。菊池郡隈府町の人、其系宗對馬守より出づ。菊池氏に仕へ綿々絶えず以て今日に至る。宗氏素封を以て聞へ最も公共心に富む。英盈は其翹楚たり。寛政三年菊池氏の忠將義士を九原の下に慰ん爲、礫數萬を聚め、法華經一部を一石一字に彫り、之を守山城墟に瘞め、碣を其の上に建つ。寛政七年には正等妙蓮寺を建て山林宅地田畑を寄附す。安永八年には正觀公の墓寒烟荒艸の裡に埋没しあるを憂ひ、當時の儒者澁江紫陽父子と謀り豐碑を建て義聲を後昆に傳ふ。當時は徳川幕府の勢威薰灼として敢て勤王の事を言ふものなし。彼の水戸義公の如き聲望と威鬪とを以て猶幕府を憚り、楠公の碑を建つるや一夜にして之を成せしと云ふ。然るを草莽の身を以て敢てしたるものは欽仰の情自ら已む能はざるものあり。

賀宗東籬九十

葉 室 世 和

黄菊池邊秉菊人、東籬之下養天真、終年長對南山壽、大壽依然九十春、

□中 島 伊 次 郎

父は平次郎隈府町の人、其の祖先彌右衛門忠近島津公に仕へて功あり、享保十六年に生れ、文化二年五月卒す。年七十五。

伊次郎は平治郎の子にして、頗慈惠の情厚く、克く孤兒貧民を憐みたり、酒造賣藥は其の家業に

して農業をも營みしといへば、家産も當初より相應に所有し、町の別當をも勤めける程なれば相當の見識もありし人なり。氏嘗て二月初市の時町内の家主等高さ貸賃を徴する爲、外來の商人も漸次減少し初市も年々不振の狀況を來すに至りしかば、頗る之を患ひ初市前には家僕をして錢を携帯せしめ、戸毎に投與して店の貸賃を輕減せしめ、専ら町内の繁盛に努め、又暴風雨などの節は直に町内を巡察し、之が救助の法を講ずる等怠ることなかりしと、其外出する道の遠近を問はず用の繁簡を論せず、常に家人に命じて必握飯を用意せしめ、之を携帯するを例となせり。常に家人に教へて曰く農家に到りて食事に際し種々の面倒を懸け、且餘計の手間を要するは實に忍びざる所なりと、而して握飯を要せざりし時は、之を町口の乞食に（昔時は乞食の類は町内に入らしめず普通の移住者といへども居住せしめざる例なりき）施して歸れり。

當時袈裟尾村に一孤兒あり市兵衛といふ、其據る所なきを憐み養ふて之を育て、子の如く愛せしかば市兵衛も深く其恩に感じて、必其鴻恩に報いずんばあらずと、遂に一生要らず汝々として主家に奉じ、三代の主に代へ忠勤始終一日の如く一生を送りたりといふ、以て伊次郎の爲人を知るべし。又其の公益事業に於けるは彼の所謂伊次殿橋によりて其一斑を知るべし、橋は隈府より山鹿に通ずる道路野間口村の西にあり、大正四年道路改修の爲此の橋を壊せしに橋の下面より左の碑文を發見せり。抑此橋の志願者攝主の亡父平次郎多年諸人の爲助難雖碎心其望不足而去世終惟安永三年七月二十

四日亡父十七回の時而此時亡父之助志而願築此橋事不經日而其願滿矣安永四年末三月撰吉日而集石工同四月朔日此橋成就云々

于時安永四年四月朔日隈府町

此時御役人中名錄

攝主 伊次郎

御郡代林七郎左衛門殿

同庄屋 善十郎

御惣庄屋河平長左衛門殿

野間口村庄屋同平井次衛門殿

升助

石工師

樋渡村 勘平

稗方村 貞助

同上 亦七

□高宮南陽

名は篤、字は伯敬、南陽と號す。外員侍醫たり。天 十一年十二月十日歿す。享年七十。菊池郡西寺村に葬る。

南陽翁墓碑銘

高宮翁諱篤、字伯敬、號南陽、菊池西寺之人也、其先仕菊池氏、菊池氏亡後、隱在民間、世々以農爲業、至曾祖考玄順、口變業爲醫、翁生於安永元年六月十三日、歲十三喪其考、榛齋君、至十七、又喪其妣桑氏、余之叔姑也、翁慧敏而好學、家貧窶、弟妹幼弱、猶且勉勵弗倦、儒醫之學師曰岳富田先生、餘力學瘍醫術於余祖考、輒能得其要焉、寬政六年冬、命爲縣尹直觸、同年冬破産、遊學于京攝而歸、頗有所得、居無幾許入國學、爲口養生有年矣、業成歸、請治者填戶、庭無虛日、文政三年夏累命爲准縣醫、七年秋召爲觀醫、治療多於往日、日弗遑啓處、文政三年、有賞賜、櫻章服、十三年夏召擢爲外員侍醫、直於宮中、歲賜俸五口、天保八年夏、翁患排症、不得行步、然以善賦詩、誘進童蒙、授句讀習文字、爲樂也、十一年十二月十日疾大漸而殉焉、年七十、配德永氏先翁而殉、有一男三女、伯適本山氏、而亦先翁而殉、仲適高木氏、季適野中氏、叔爲大玄、不墜家聲、襲賜俸三口、翁有遺稿一卷、治驗一卷、詩數百篇、銘曰、

不朽何有、詩暨令名、幼而難苦、老而安樂、子幹父蠱、疏金滿贏、命哉窶窶、
豔哉德邇、

桑 滿 伯 順 撰
高 宮 南 陽

夜色冥々樹萬重、津頭雲雨失千峰、篝燈明滅愁眠客、知是當年旅泊備、

登金海山

層嶽三千仞、無心雲霧明、深山龍氣動、大海鳳風生、天籟晨須靜、谷神夜不驚、可知仙路近、忽使世心清、

次韻高宮伯敬見寄 葉 室 黃 華

旅館西風無客來、名山在眼仰層崖、高吟永日時々句、刮目故人七字才、

南陽略歷

一、天保四年正月二日父榛齋病死の節十二歳にて御郡並の御用相勤不申に付叔父桑滿元洵より願立元洵厄介に相成居候

一、寬政六年閏十一月九日左の道申渡さる

菊池郡御郡醫師並桑滿元洵厄介辰庫儀醫業心懸能療治方手廣致出精候に付苗字御免なされ御郡代直觸に被仰付

一、寬政九年正月十九日再春館に於て奉行衆より口達左之通

高宮春令儀醫學致出精且遠路之處再春館へ多年無怠慢致出席依之金子貳百疋被下置

一、文化三年丙寅四月三日御郡代間に於て左の通被申渡

御郡代直觸高宮春令右は家業心懸宜しく且御郡御用をも數年相勤候に付旁被對御郡醫師並被仰付

一、文化七年御郡代同道にて御奉行所に被召出左之通被申渡

高宮春令儀家業心懸能療治方熟練手廣出精いたし候に付御目見醫師被仰付

一、文政三年十二月十九日御奉行所に於て櫻御紋付袷御羽織賞賜せらる

一、文政十三年六月廿八日御花畑に於て外様御中小姓御醫師被仰付五人扶持被下置旨被仰渡

□澁江涪灘

名は公豪、字德翼、通稱忠多、家塾を開き生徒を教授し弘化丙午七月二十一日病を以て歿す。享年五十九。

澁江涪灘墓碑銘

桑 滿 順 撰

君姓澁江、諱公豪、字德翼、稱忠多、其先出自貴族橘公、實松石先生之弟三子也、幼而賦詩屬文、才噴々藉甚於都下鄉曲、性最謙恭下人、蓋正考父之倫哉、未嘗高談激論、毀詆訕謗、然嗜酒有節度、至其酣暢、則微笑應對、否則端坐眠睡、雖在稠人廣坐中、偶有加凌者、不敢相校、其寬量如此、後移居於郊外也、遠邇及隣藩、佐賀久留米、柳川島原諫早其他、醫流縉徒來學者、益衆矣、君善勸獎誘掖、弗少懈怠焉、文化甲戌、天草郡、富岡公應椽上野某、招請君、延以為師、建學舍教導、諭示郡邑諸吏以下、農商之子弟、明年乙亥辭、歸于家、以塾生亦不可使廢業也、文政辛午六月、官賜

方金一個、爲君篤學敬業教諭懇接也、文政乙酉、合志郡宰、命君每月大津縣齋、開講席、令闔鄉子弟、皆學習文藝、文政戊子官賜郡宰屬直觸爵級、爲教導大津諸子弟、且所居之地、在裨益于人故也、又今茲賜扁金三兩、善事其母、母歿後、追薦至孝也、天保辛卯郡宰余君、每月於縣齋、須攻講說文統業、君德憑不怠、天保甲午官賜一領一疋、格爵級、爲歲教導許多門人也、勵精故也、天保己亥、官賜每歲稟米十苞、此亦爲學業多稔匪懈匪怠、教誨門人、敦履純固、授于詩文、無弗普屆故也、弘化乙己四月、頓罹靡證、藥餌無驗、明年丙午七月三十一日遂易簀焉、嗚呼不病惜乎、享年五十九、葬於先塋輪足村北丘、君有三男一女、長曰平進、入繼本宗舅家、次曰次郎助、爲君嗣、又次曰德三郎、女適醫桂氏、銘曰、

識道之崇、味道之腹、規模依據、

惟酒之洙、垂着永逝、寔命也矣、

菊池懷古

澁 江 涪 灘

東大東南黃菊城、水深山聳勢崢嶸、班蛇峽拆靈風起、白虎溪洞雲霧生、上國千秋安寶鼎、西溟萬里斬長鯨、請看筭嶽層々頂、一片赤心懸若旌、

秋日登菊城

懸岸盡處見殘墟、勢振長川萬古雄、一郡秬稻分畝澮、數里松杉達崆峒、海燕巢古將軍樹、山雨秋雲

望月宮、往事悠悠經幾歲、風烟猶在畫圖中、
家塾 名稱梅花書屋

- 一、所在地 菊池郡隈府町
- 一、學科 父祖の業を繼ぐ
- 一、故科用書 十三經 歷史 諸子 詩文
- 一、生徒概數 男七百名

□澁江龍淵

名は公隆、字は孟吉、安宅と稱し、龍淵と號し、子弟を教導し、嘉永五年五月十七日歿す。
享年七十有五。

澁江龍淵先生墓碣銘

先生諱公隆、字孟吉、稱安宅、號龍淵、松石澁江先生長子也、嘉永五年正月十七日卒、享年七十有五、葬輪足山先塋之域、澁江氏世居菊池、修護園堀川二家之學、先生幼有才質、治經作文辭、確守庭訓、後執贊州學助教、然卒不屑變家學、又以水神祀爲業、先考以第二子勝眞、善解祀事、傳家勝眞使先生縱力儒學、於是、漫遊島原天艸之間、數年、所至爲父兄見請、教其子弟、及歸築書屋隈府、而居

焉、從受經及書法者頗多、官命爲郡文學指南、弟涪灘先生、亦築室教授、方是時、吾師桑滿先生、南陽高宮、教育其門人鄉子弟、以不讀書爲恥、雖不能如紫陽松石二先生之育才有人、亦鄉學一時之盛也、人或謂野人讀書減質、不知鄉俗之敗、由良家子弟失教、榜浦淫聲遨遊閩黑、吾鄉百年來、是風未長、豈鄉學之益、可見其一端者耶、先生淡雅高簡、不求悅於庸俗、澹然自足、酒酣興熟、則掀鬚露胸、笑傲磊々、有淮南士風矣、然其於子弟、諄々教誘、未嘗厭倦、官賜若干、及擬九曜紋上下服、又年賜米若干苞、晚買一妾、舉男曰周藏、以文政五年五月五日生、七歲而死、已葬、先生病革、屬族人命之、曰我死則必大爲我梓、改我兒之葬、合諸我梓中、乃從之、請余文、以表墓、乃繫以銘、銘曰、

父子合葬、於禮未求、子幼父抱、情不多尤、嗚呼先生、無後何憂、
自守其志、不達何差、爰安其藏、鄉之東邱、土厚石貞、山青水流、

州學訓導 木下業廣撰

一、日途上園木光愷に遇ふ、光愷卒然謂て曰、指汝短軀一何甚、先生聲に應じ、天然由來是安宅、
光愷其奇警に服し、又言はずして去る。(石淵八龍話、西口世馨誌)

家塾

- 一、名 稱 銀月亭

一、所在地 菊池郡隈府町

一、學科及教科目 父祖の業を繼ぐ

一、學習年限 制限なし

一、束修謝儀 任意

呈龍淵先生

藤原元武

漢時文學鄭康成、久仰東方第一名、卒爾相逢如舊識、羞吾不有服虔明、鞍岳之陽才子多、皆云秀氣鍾文華、不知教育栽培力、盡是君門桃李花、

□葉室黃華

名は世和、字は敬輿、直次郎と稱し、黃華山人、又は春塢と號す、中小姓藩の文學たり、天保二年三月二十七日歿す。享年四十一。菊池郡菊池城跡に葬る。

黃華葉室君墓碑銘

肥後故文學葉室君、諱世和、字敬輿、通稱直次郎、號黃華山人、考源次右衛門、君言源、妣奧田氏、以寛政三年辛亥九月二十五日生、君於菊池隈市、文化五年四月、入國學、七年九月擢學生、十三年命誘掖諸生詩文、以佐訓導、屢賞賜金銀及苞米、十四年進斑下士、列于師員、文化元年、賜宅壺井、

同九年六月、進班中小姓、命遊覺、赴江戶、入祭酒林公之門、佐藏大道都下宿儒也、乃從之學、君沉潜縝密、恬於勢利、好學如嗜欲、該博精緻、強記絕倫、文才奇拔、斐然可觀、余在江戶、設海鷗社文會、與君會晤、率無虛月、每會未嘗不服其志之益敦而學之益邃也、十年十一月、侍講藩公子江戸邸、公崇學重儒、君備員顧問、眷遇特篤、明年從駕歸國、爲侍講如初、天保二年、辛卯三月、復從公東朝之駕、途上病發、命歸家養病、三月二十七日、竟不起、享年四十一、娶相馬氏、生一女天、養安岡氏子源次郎、嗣其家云、君之歿也、其戚友以余善知君、圖不朽于余、義不可辭、乃叙其世系履歷如茲、又係之以銘、銘曰、

菊池活々、俊傑所生、懿矣敬輿、亦蜚英聲、儒術光家、溫恭淵粹、前途所期、卓爾其志、天道無知、幽蘭俄瘁、文社之舊、辭短情摯、

肥前佐賀祭酒

古賀 燾 撰

石井 章 書

一、葉室先生學問該博、菊池の片辭より出て、侍講となり、君寵を受けしにより、熊本の俗儒、先生の聲望を妬み、藩主に扈し、東上の途、先生を三の宮に擁し、祖宴を張り、祝意を表すと稱し、駕に後らしむ、先生事の爲すべからざるを知り、病と稱し家に歸り、屠腹して藩主に謝したりと云ふ。

書游豐日誌後

松崎謙堂

鄉藩自出玉山孤、山數君子以來、天下稱爲有文之邦、葉君敬輿之來也、亟訪余幕西窮山、留連晤寫極曠、獨怪其無以詩筆見眎者、以爲余去鄉久矣、今則得數君子之風、或無有小間乎、頃日乃出其游豐日誌、一卷求評、受而讀之、記游之筆、高華典實、朗々可賞、如登久住峰一、則尤覺有超然出塵之概、其古今體詩亦皆意圓葩流、絕無浮響、比之少時所見聞、則體製韻度、又有進焉適上者、於是拱手、以慶數君子之澤未衰、猶能強鄉人之心於三千里外者、自有在也、因書其喜於卷末、以返之、丁亥新秋、益城通客復題、

同

余想宗國、宗國邈遠、非一葦可航、則時披地圖、知某山水在某々之地耳、至其巒光水色風土人物、茫不可識也、今讀世和游豐日誌、自府城以東及封境之斗在豐中者、巒光水態、風土人物、儘知親蹈而睹之、嗟乎文之不可以已如此、明年春風揚和、世和亦將從宗公而東下、期年之間儻能自府城之北、以及南與西、以是志之例、約略鋪叙、來以見眎、則是身在三千里外、而神遊於宗國也、豈不欣然乎、

戊子仲夏

利和

壬寅暮春謁

黃華山人墓

澤村西坡

杜鵑花落雨淋漓、春盡空山人未歸、錦繡如君今幾在、菊潭風月夢他時、

朱陵書跋

葉室黃華

我藩書法推玉山朱陵二公、玉山以韻勝、朱陵以氣勝、玉山飄逸瀟灑、有御風騁鸞之氣、朱陵秀勁峭拔、有秋鷗寒松之勢、此二公之別也、朱陵此書尤其得意之筆、風格如生、墨濡猶濕、真妙品也、癸未十月葉室世和觀、

朝來山人書跋

朝來山人、書不必入格、詩不必入調、而一種風韻者、脫然於調無格之外、蓋其生平高致、有以取之也、雖然其風韻、或亦可及也、而其人則終不可及也、吁、

朝霞軒記

癸未之秋、余游豐之佐賀關、德應上人、延余于其軒、軒在高爽虛濶之地、余命之曰朝霞、命茶賦詩、盡歡而歸、歸則又請文於余、余不能辭、乃爲之記曰、佐賀關者、漢土裨官所稱、集真島之地也、蓋南豐之山、蜿蜒北出、下枕大海、關當其嘴、呼吸潮汐、南控四島、西接二筑、流膏輸液、孕日育月、非是所謂牛談地者耶、黑白之濱、美石分隊、晨輝夜光、露凝珠結、非是所謂凝露臺者耶、今倚軒而望、則數者之勝、點綴衽席之下、四時之景、無所不具、而尤與朝霞爲相宜、若夫天雞三叫、扶桑拂影也、紅旭一輪、自海底湧出、金支翠旗、髣髴擁導、滄海吐吞、氤氳海面、而朝霞之色、散爲五彩、

如錦如綺、晃耀心目、當斯之時、仰而浩歌、踞而長吟、若失若忘、洋洋乎、不復知軀幹之在人世也、比之於汨沒榮利之場、日與利害相磨憂者、何知哉、且乾笠之教、余未遑之貫習也、雖然聞之其人、曰山河大地、一艸一木、皆阿彌陀佛之大光明藏也、然則安知彼朝霞之璀璨芳郁、玲瓏輪囷者、亦非金僊光明之一支也、由是觀之、上人亦沐浴於佛光、而不自知也、是豈非一大歡喜之事耶、此余之所以名軒也、余南歸之後、鱧屈斗室、把毫於紙窓之側、曝背於茆屋之下、顧昨遊恍如隔世、乃雖欲駕瓊輶驅翠螭、賓滄海之初日、餐高軒之朝霞、不可得也、則不能不為之悵然焉、因書以贈之、文政癸亥冬月日、葉室世和記、

關驛遇松崎老人次其韻

余客歲辭江都、留別懷堂翁於羽澤山房、余今茲東行、三月二十一日偶然相遇於北勢關驛舍、把臂交杯、驪語數刻、翁有詩見贈、余次其韻、

落花時節與君逢、路出山關野店東、羽澤分襟知昨日、何圖一酌復相同、
戊子四月十七日、遊海國社諸賢於深川林莊、余歸期在近、賦此留別、

門外垂楊繫小舟、一泓池水碧於油、非烟非霧山容遠、半霽半陰林影幽、留別銜杯也佳興、以文會友總風流、人間聚散元無定、何日尋盟隨海鷗、

下九重峰

霜葉霜花秋正深、芒鞋踏遍白雲岑、歛唇携下前溪路、已見東方初月臨、

千住驛買舟下墨田川同町元輝舟中聯句

千住橋邊放小舟、世和 夕陽射浪去悠悠、元輝 竹叢芦渚交相映、世和 伊軋櫓聲下二州、元輝
蘆花如雪秋空鏡、元輝 多少漁舟竹葉浮、世和 到此始知詩本足、元輝 烟波無乃志和傳、世和
漸見人家簇々多、世和 舟中指點說鷗窠、元輝 鷗窠祭酒林公別業在櫻水上 名公風韻長欽仰、儘付功名一釣簑、

高木豐久

豐久通稱は五郎吉、寛政三年五月に生れ、深川村に居る、家世々笛曲を以て名あり。嘉永六年十月歿す。年六十三。

高木甚之助君墓碑表

高木君名豐久、通稱五郎吉、後改甚之助、其先佐々木氏、居江州高城、子孫因氏焉、城木邦讀同、永正中有仕菊池氏、好音律、恒挾笛從軍、至稱次兵衛者以軍笛八曲仕加藤後主、又學散舞笛於京師、一日在縉紳家吹笛、屋瓦忽墮、名稱於樂部、征韓之役、加藤先主截蔚山竹製笛、後主以賜次兵衛、今猶傳其家云、及

妙解公入封、仍賜俸秩、世守其業、居菊池深川村、四世孫宗安、以實政三年五月十六日生君、君謹

守祖業、居恒夙起、必吹笛數曲、至老不廢、每

公家慶事、命散樂執事、以入例賜白金、君有至性其父年老病風、君佳養備至時或負而逍遙園圃間、及殉哀毀過人、母氏信佛、君爲誦經拜佛、母氏畏雷、君夏月不輒出門、或在外是天起雲、則走歸間安、嘗適京師、母授佛像、求工補裝之、或謂曰、補欄紙不若購新像、君曰母命之矣、焉論價、其歸、懸文字錢數百于頸、人問其故、曰、我母賽佛必用此物、予貧不能常供、今行路間、購得之、將以奉母氏、母氏病、君衣不解帶者三年、是其事親之概也、君又好武技、受劍柔術於山東氏、受居合於隈部氏、皆極其秘、二家使君以杖教鄉子弟、誘接懇切、至忘寢食、受業者前後三百八十餘人、皆父事之從有篤厚之風、官褒其誼、賜擬九曜紋上下服羽織絹給及黃金二百匹、後歲賜金若干、嘉永六年十月二日歿、享年六十三、葬于村北先塋之次、娶高宮氏、生二男一女、長次三兵衛繼家、次參次養於宮崎氏、女歸于小島氏、其受教子弟、將鐫石傳後、謀表于余、余亦受提誨者、乃不辭而書之、

木下眞弘撰

城野充通書

□山隈權兵衛

安永六年に生れ安政二年卒す。年七十九。郡中の一大池沼湯船の堤は實に山隈氏の企劃經營せ

しものなり。

靖恭堤翁墓

翁氏山隈、韓惟義、稱權兵衛、姓宇治、其先出自阿蘇大宮司、按譜、三位惟國之次子曰山隈九惟春八世孫山隈太郎朝成、元龜中居合志郡竹迫、翁文化甲子爲阿蘇布田吏、是謂會所手代役、文政辛巳爲橫同役、丁亥進惣庄屋兼代官職、又遷轉宇土松山、合志大津及任阿蘇高森、總六縣事、其所居勸農桑、務阜蕃、慎蓄聚、周乏困、墾田園藝山林、築渡唐、通溝渠、功頗多鄉邑永賴焉、而垂玉及川後田之溫泉、大創百世之業、經始、定制極存方矣、所余授、大率災患凶飢民多窮乏也、初俸二十石後增十石、又假十石特命稱姓山斑獨鵠、一賜盛服、七拜時服、八受貨寶在松山日、宇土侯賞其勞、亦賜賞查算及、其嘉功偉節、皆載在命書、藏于家矣、嘉永癸丑請老致事、先是築堤防于湯船、未成官許其請、而土功監如舊、安政乙卯九月十五日歿其館舍、年七十九、釋民號田正學院、碑面所題、實官府之命諡也、翁距太郎府君九世、世相承、有陞在右職者、其後家產少不振、比翁承家、單寒極、更年十七、手筆役諸邑吏、日夜奔走、不憚煩劇、事父母孝、苦節十年、初就職司、恪勤從事、寢食顛沛、唯政務所在、晚年頃強令終始、初及大病、猶會嗣子僚屬、諄々不已、以至于死、在職五十年、死之日、無遺器財、人皆感其奉公恤下、平素心志之所鄉世子惟忠稱新左衛門、嗣其職及樹石大矢野生德欲勤其行蹟、以報獎誘之德、請余文焉、余與生交、觀其性行而有感、狀所載、故不辭不敏、口

碑在人、采狀十一、以成生之志、豈曰足以表章人傑、垂諸不朽云爾哉、

安政丁巳三月上澣

北 筑 飽 井 鐵 撰 書

□ 桑 滿 負 郭

名は伯順、字は子義、負郭と號す。菊池の人、侍醫に擢てられ、祿百石を賜ふ。安政四年八月八日歿す。享年九十一。菊池郡熊耳山下に葬る。

負郭桑滿先生墓碑銘

先生諱伯順、字子義、桑滿氏、負郭其號也、祖諱道隣、考諱元恂、居肥之菊池、世業醫、至於先生、最精於其術、旁以儒學、教鄉人、文政中、擢爲侍醫、無幾轉醫學司教、兼稽考醫業數年、辭疾退居鄉里、仍屬醫員外班、以年資賜祿百石、安政丙辰先生年九十、例賜九曜星衣、明年丁巳八月初八、逝於正觀寺之廬矣、初菊池有君子、曰松石澁江先生、繼其父紫陽先生、教授鄉閭、父子並受學鶴灘加々見氏、鶴灘者聞護園復古之說而悅之、從博泉水足氏、問難古義、而其人素尚士行、雖事博泉如師、至於踐履、則別有所持守、蓋有道之士也、故澁江氏之學、主本漢唐傳疏、而松石先生最以德行稱、先生爲其門高足弟子、恒謂人道在忠信禮讓、賢者以爲其賢、不肖者以不自失、聖人教人、大旨不外於此、是以其持己也、直而畏、接人也順而誠、事雖細微、執之必詳審謹密、業廣事先生四十餘

年、未嘗見其一事負人、一語及人短長、此其所本諸師訓、約而守之也、入葆大和、出總醫教、仕途方酣、而超然抱肥遯之志、辭官而歸、與野客村老、相揖於山水之間、吟詠自娛、其怡退之風、比諸鄉之先賢、蓋或青於藍云、先生容貌清曠、動止安徐、旣踰奇壽、聰明不衰、暇輒手卷、鈔註丹黃、爛然至無虛白、作文尙典雅、不喜李王奇僻、書法端楷、雖倉卒所作、皆存矩矱、業廣自幼遊先生之門、受孔傳諸經、旣長遊國學、讀程朱之書、先生不奪其志、寄詩勉以醇儒、嗚呼業廣未能守先生之教、又不能執几杖、山中收歛檢束、以自淑、而先生逝矣、哀哉、先生娶石淵氏、有二子曰永錫、曰廉退、皆先卒、嫡孫恒齋承家、恒齋旣葬先生於熊耳山下、命業廣、銘其墓、業廣爲銘、

旰彼好爵、人過其步、車顧馬从、僭莫覺悟、君子說輓、履以其素、其素惟光、

道古德裕、桐華之水、熊耳之樹、嗟今之人、觀於斯墓、

木 下 業 廣 撰

城 野 充 通 書

葉 室 世 和

送桑子義之崎陽序

桑君子義之先、嘗學于瀋之栗崎氏焉、栗崎氏以外科高于當世故也、自爾三世、相承以至於子義、繼踵乎其業者、自若也、子義其齡且強仕、屑々然曰、肉人骨者、居多矣、而傍好文辭、綺字燦發、英聲踴躍、嚶然尊古而卑今、可謂豪杰之士矣、今茲著誰執除之夏、將西遊于崎陽、而研精其術也、造

予廬而別、且謂曰、清生來前、吾之締金蘭於生也、不啻一朝一夕焉、今此行也魚雁之別、東西千里、母乃一言之贈于我哉、吁嗟生何辭之修、而以可於君子之贈也、予謝不敏者三、不聽、於是乎蹶然而起、獵纓而語曰、軒岐氏之學、予未之學、貫習也、何容呻吻于其際乎哉、今君虛恒孜孜于文辭、則無已乎其以此耶、夫文章之道、雖百出幻變乎、必以氣為主矣、氣猶水也、水之積也不厚、則負大舟也無力、江之出於岷山、觴爲之舟、至於洞庭之陂、雲夢之澤、則基々滔々、陰風怒激、狂波之起、大者如屋、小者人立、峩々之舟、飄風而過者、汨沒乎其際、漫漶不見蹤跡、是無他也、以其水之大也、雖文亦然、苟氣之不大、則其載言也、亦猶觴矣、苟氣之大乎、其載言也、亦猶大舟矣、故曰、文章之道、必以氣爲主矣、昔者司馬子長、負千里之逸才、冷長淮派大江、且跋涉洞庭雲夢、假其大觀、發諸文辭、則其氣之大也、猶洞庭雲夢、而其載言也亦猶乎大舟矣、千載之下誦其辭、則汪洋矣、浩蕩矣、故曰、文章之道、必以氣爲主矣、今崎陽之地、海環乎邑、一口、壺哨、北控三韓之州、而西望滿清也、洪濤之蹴天、銀碧萬里、忽焉恍焉、河伯之旋、其面目不啻洞庭雲夢之觀也、九夷八蠻之賈、射利乎其中、破長風而來者、列檣如鳥、巨舵如矢、亦不啻洞庭雲夢之舟也、加之崎陽之俗、結交乎異邦之客、則沸唇彈舌、嘶喉齒腭、其播紳君子、稱駿雄者、往々某時、君虎步于其際、假其大觀、而發諸文辭、則其氣之大也、猶滄海、而其載言也、亦猶大舟也哉、然則可謂子長之千載子雲也、嗚呼文章之道、必以氣爲主者、愈足以徵哉、予之贈于君者、止於是耳矣、若夫醫藥之道者、君之所學、而

予之所不知也、言未畢、子義嗑然而笑曰、生之言、炎々以足壯吾行色矣、廼行、

學桑子義

僕燥髮讀書、則屢請教於老臺、老臺循々善誘之恩、至今不怠於懷、而都下卜居之後、懶惰爲性、未嘗叙寒暄於左右、負心之責、固無所遁矣、老臺宏廓之度、冲夷之襟、雖不深罪僕、僕豈無慙泚之溢類哉、多罪々々、僕艸野之性、樛櫟之材、其在鄉里也、久不齒於月旦、其來都下也、抱膝蝸室以銷駒隙、加之杜康作癖、踣地多玷、頃者稍自奮勵、務就繩墨、要之、行尸走肉、其無所補也必矣、因思程伯子觀獵之喜、雖古之大賢、尙不免有毫髮之念、況如僕沈溺於酒食海中、而昏弱不振者、其謂之何、雖然僕不可因此而自廢也、亦唯仰老臺之一喝耳、聞之鄉人、老臺刀圭日興、病客麇集、旁玩圖書日課生徒、盛名之下、行當遐福耳、至祝至祝、奉憶詩一首、附令卽回、伏乞郢斤、時維濕熱、千萬自重、

寄桑子義

幽築遙臨黃菊川、從遊憶昔接才賢、玄亭問字載春酒、絳帳聞歌奏夜絃、十歲離情城市裏、三更歸夢水雲邊、知君妙技猶無恙、肘後方成世上傳、

先師墓下作

桃花流水晚來波、一片石碑立竹坡、鍊版題成怡退字、如今世上幾人多、

木 下 業 廣

石橋銘

桑 滿 順

斯澗水源有二焉、故其下流舊架土橋三、而以相往來、然若暴雨淫霖、水漲則或崩壞、或流失、衆人病涉、況於凄冷互寒之時乎、是以村正高木富教、深憂之久矣、會荒木秀龍聞此、亦爲愍焉、於是二子相議、至克結束、秀龍輒出錢若干貫、奉請于□廳、用豐戶丁壯千八百人許、以建石橋、凡閱月而事成矣、二子戮力、其績豈□□稱焉哉、今新名一者曰雌橋、一者曰雄橋、其小者名曰雛橋、

□町野鳳陽

名は世徳、字は元輝、玄肅と稱し。鳳陽及鳳來山樵と號す。稟祿二百五十石、醫學教授及侍醫となれり。慶應二年二月歿す。享年七十一。匏託郡中尾本妙寺中龍淵院に葬る。

鳳陽町野先生墓碑銘

以醫名于藩者、數十家、而世出才學、町野氏最矣、町野氏本姓三善、建國之始、有盛性君者、以立花侯戚屬來住、遂釋甲、隱于醫師、今大路氏一日唱末季之學、爾後世々講之不墜、間有不肖者、必擇才俊、養爲子、以是擢授侍醫者、凡八世、其第九世爲鳳陽先生、諱世徳、字元輝、幼稱貞吉、後更玄肅、鳳陽鳳來山樵、皆其別號、宗淨游君、諱盛富、長子、母岡山氏、以寛政八年臘月望、生於菊池郷、宗氏先出于平族、仕菊池氏、有戰功、菊池氏亡、猶家於古城下、爲郷著姓、先生幼好學、不

事生產、從業文學松石澁江翁、受句讀、穎敏過人、始作文、譯太閤記、以左氏文法、稍長入松月町野先生門、學醫術、又從霞坪大城先生、讀程朱書、以尤長於醫學、舉再春館齋生、松月之子、法雲君早世無子、遺言以先生爲義嗣、先生以文政辛巳八月、繼家、補外班醫員、無幾擢醫學授讀、尋與澤邨士寬、受命遊學江戶、俱執贄於林祭酒之門、就一齋佐藤先生、兼治王氏學、尤善詩、一齋先生、奇二人才識、每有述著、爲校其文字、當是時、泰嚴公在龍口邸、屢召說經、授邸、授讀三年而歸、天保中、補醫學教兼醫業副司考舉侍醫、弟子從受業者衆、官爲築塾居焉、弘化中賜祿百石、安政中進班物頭、列爲侍醫尙藥、加賜百石、以兼儒學、特爲公所親信、每駕東下、必陪從焉、及同公襲封、又賜祿五十石、在職凡四十六年、賜衣服金銀者數焉、先生少有奇節、比成童、潛出抵京師、入某寺、讀佛書、母氏憂慮、食不甘味、聞其在京、遠遣人迎歸、歸語人曰、予觀幕府、勢欲隆赫、非爲名藍大僧正、不能鍛之也、聞者震竦、既見考妣有憂色、乃屈節修身、恂々自盡、人不復知有前日不羈之行、其學篤信程朱、雖兼治王氏、以自修爲本、無所偏執、醫術承家傳、包括古今方、而施之自有一定矩矱、尤長於療疫、世人或目稱治疫醫官、年老精力不衰、診療之暇、每緝經史、到夜深往々手卷而就睡、著書數千卷、裝□□整、雖恒玩者、無一垢澤、其於世務、淡然寡欲、畢生不弄金錢、每聞世人親戚爭利事、爲之氣息流涕、其操心如此、慶應二年丁卯二月初一日疾風、奄然不起、享年七十有一、葬發星山龍淵院先塋次、釋諡曰仙慈院日昇居士、娶永井氏、生四男、三女、長轍次次謙藏、共天

次弘嗣家、次安亦夭、三女亦未嫁、門人弟子達材成器者、若干人、大抵以儒術爲本蓋其所陶鎔云、鄉里姻戚亦多、城野充通以書法、余兄業廣以文學、皆兄事之、及歿、子弘請二人表其墓、既而余兄亦歿、乃使余繼其意、亦以姻親故也、銘曰、

忠臣之裔、良醫之嗣、學吸其醇、術探其邃、矧其操心、澹然樂易、八世緒業、是於益粹、發星山麓、松柏鬱翠、高致長在、風光月霽、

木下真弘撰
城野充通書

一、鳳陽先生少にして奇節あり、十一二歳の比、士人あり、途上先生の名を呼び棄に呼び、今何の書を讀むかと問ふ、先生大に憤りて歸り、母氏に訴ふ、予渠の家人にあらず、門生にあらず、何を以て呼び棄にすと、悲憤慷慨、地を撲て哭す、母慰藉僅かに止む。

成童の比出て、京師に抵り、某寺に入り、佛書を讀む、母氏思て置かず、人を遣し迎ひ歸らしむ、歸り人に語曰、余幕府の勢燄熾なるを見るに、名藍大僧正になるにあらざれば、之を挫くことを得ずと、聞者震悚す。

時針器

町野鳳陽

豈同犬守與雞司、尺寸能傳十二時、細憂聲猶蠶食葉、徐旋步似蟻緣籬、夕陽深院僧收課、微雨殘燈

客歛棊、逝者如斯無晝夜、惜陰軒裡最良規、

失願

吾家元在鳳儀峰、剩住人間屬異蹤、安止難齊占枝鳥、匆忙喜類逐花蝶、寒衣典盡敲樽嘯、靈藥收來帶月春、夜久瑤琴彈一曲、秋濤時落半庭松、

伏見客舍別町元輝

葉室黃華

杜鵑聲裏度薰風、驛舍銜杯情不窮、相逢忽成千里別、一人西去一人東、

寄宋惟明

澁江涪灘

乍逢秋色到、遙憶所河涯、石髮亂芳渚、銀鱗翻綠湄、故人德星聚、客子密斷鴻悲、葉室與園木、爲余致此辭、

二

管嶺擢銀漢、曾非培塿同、龍蛇吟夜雨、虎豹嘯寒風、我父長其下、君家住彼東、誰言澆李世、不復出英雄、

三

蠻舍尋盟後、笠簑戴星行、殘鷄第店月、孤鴈水田霜、桂子薰山路、蘆花滿野塘、暮添西岸泊、一夜夢君長、

□ 梶原漆潭

名は矯、字は伯立、漆潭と號し、士班に列し、藩の文學たり。嘉永二年九月二十八日歿す。享年五十二。飽田郡龍田山に葬る。

梶原伯立墓誌

菊池之邑、山川秀麗、土田肥饒、其民庶而力耕耨、喜儲蓄、故閭里多豪富家、昔菊池氏、唱勤王之師、奉征西將軍、以據于茲、爭衡乎足利氏者數世矣、及其季世、首設學校、建聖堂、春秋行釋奠禮、以風化其民、今雖其典章教法不可審知焉、然其俗醇厚、畎畝之間、往々興起於文學、學成出仕、以供國用者多矣、如梶原伯立其翹楚也、伯立家世業農、至父九郎助、出仕爲地士、娶某氏女、生伯立及又五郎、伯立幼穎悟、喜讀書、父從其志、年甫十四、遊學于熊府、來遊於予門、居久之、其學頗進、衆皆謂才也、迺入國學爲學生、晝夜刻苦、勤學殆十年、奉命之江都、謁見諸賢以歸、於是經史子集、皆精通曉、而最長文章、下筆數百千言、混々乎來、而有法、則森如、衆皆以爲不可及焉、藩賞其業成、數賜金穀、遂自文章師、擢府學訓導、列士班、賜俸秩銀如例、於是名聲嘖々、興於都鄙、入門受業者多矣、一日携門生數人、遊于河陽大慈寺而賦詩、歸途得疾、臥于家、數日而歿、實嘉永二年九月二十八日、享年五十二、葬于飽田縣龍田山、娶某氏、有子四人、長女嫁于醫内海某、

次男保定好學、有父風、第三第四皆幼、伯立名矯、伯立其字也、家在本莊漆川上、故號漆潭、友人水津爲民木下子勤相謀、治後事篤矣、且欲令其子保定、繼父志、拮抗亦至矣、如二子可謂信于朋友者也、二子向余歎曰、天之成材也、甚難矣而奪之也奚速矣、如伯立、假之數年、學與仕必達矣、惜乎未見其止也、余不能答、不覺潛然、淚下沾襟、迺書行事之大槩、以瘞于墓、

近藤昌明撰

先大人行狀略

先人諱矯、字伯立、稱五郎助、號菊潭、又鳳儀山樵、後移住本庄村漆川傍、因改漆潭、以寬政丁己某日、生於菊池郡加惠邨、家世業農、至父九郎助君、出爲地士、先人幼而豪邁、不事生產作業、好讀書、從邨醫野中見壽翁學焉、會淡泉近藤先生、爲菊池郡尹試鄉學生徒業、先人年十二、亦應試、舉止從容、如成人、既就席、音吐朗然、晰義頗明、一座屬目、試業一般係伯父又五郎君語尹奇之、獎慰從學、先人亦奮勵立志、以告父九郎君、君亦酷好文字、縱其欲、文化庚午年甫十四、負笈游治下、路濟菊池川作文誓之曰、原矯不能成志業、以報父母、而復道於此者、有如此川、其文嘗存故既至、寓助致大城先生塾、先生以此年歿、乃從藤先生、嘗一貴族招先生饗焉、且曰、五郎年少、才氣可愛、請俱與來、先生告之、先人辭焉、強之乃往、恣飲啖而歸、翌日先生、命先人造其門、謝焉、先人掉頭曰、小子廢日課、而應其意、自彼來宜謝也、豈有往謝之理乎、遂不往、先生曰、年少強項、乃爾歟、益奇之、

此事聞 然以郡務執掌、不遑教育、命從烟家訓導阿部先生受業、先人洒落清貧如洗、先人衣服被衾、借而典之殆盡、家亦不繼給、先人不以為意、夜寢則入空籠、以蓋自揜、以禦寒、如是者經五寒暑、而毅然不撓、及先人沒、大母每話此事、攬淚曰、吾以為因所以就兒也、自今思之為己甚矣、此事余親聞於大母及藤先生轉訓導集生徒、先人亦從學、居二年以先生意、寓鹽井辛島先生塾年餘、文政已卯十一月、舉疊生、戊子七月列士班、為文章師、天保辛卯正月、奉命遊學江戶、初寓依田博士塾、後從松崎謙堂遊、此時聞海鷗社、以延天下之士、先人入社、一時知名之交、尤與河北溫山安積良齋森樞堂野田笛浦等親善、既還、居二年、甲午六月、班中小姓、為文章師如故、壬寅八月、擢時習館訓導、弘化丙午拜章服之賜、曾與諸門生、每暇日、擇幽莊蕭院可遊者、會文焉、名曰麗澤社、嘉永己酉九月重陽、以例會於河陽大慈寺、歸途得疾、臥家旬餘、遂不起、實二十八日也、享年五十二、葬於飽田郡龍田山、室柩原幽有翁之女、一男三女、長女內海氏、次為知定、次女三女皆幼、先人學純守程朱、博通墳典、自經史子集而外、如雜史野乘醫方梵筌、無所不讀、必鈔、所鈔巍然為推、曾以古人所稱、讀書之法宜加手到、為四到、教于門人、其講經也、詞簡而義該、疑似之間、人數十言所不能盡、斷之不過數語、理致具悉粲如也、而音吐如鐘、聲徹門外、聽者肅然、斂容、作詩務講格調、不喜纖巧彫琢、常愛錢劉風趣、尤長文章、下筆數百千言、混々乎來、而有法則森如、文章以下藤先生碑文中語為人剛直好義、視後進如親子弟、但有違教者、雖貴族之人、奮言呵責、毫不假借、是以驕傲子弟、或不能堪然其人改

則脫然不芥蒂、猶驟雨頓晴、清空豁敞、以故人亦服之、此數語先人評阿部先生為人之語先人資性亦莫易此語蓋視炎之久自然相肖者歟故今取用門下肥前人某、以不從教、召之面削門生籍、其人俯伏謝罪、不聽則流涕曰、雖歸無面目對父母、先人乃指外臥犬曰、斬渠、表悔悟之意則可、其人扶起拔刀、極力擊之、犬乃為兩段、先人大喜視之如始、聞于從學者日多、塾舍不能容、教導之方、從資性所長、不以繩尺律之、故人各有所成就、自參政諸員、至諸吏筆生、名于當時者、多出於先人之門、亦長於藻鑑、一面識之間、斷其人賢否邪正、禍福壽夭、往々符於後事、藻鑑事係池鑑水話性好酒、又愛客、客到則莫不置酒、談或及國家利弊、人物淑慝、難詰反覆、不顧忌諱、既而耳熟、論鋒生風、聲撼四壁、時々瞋目見人敗屈、而後止、雖徹宵至且不顧也、尤惡奔競之徒、又惡有所挾者、有來訪者、一言拒之、其人不喜而去、先人不以為意、一貴人某、執贄入門、坐談及日暮、其人子仲、先人見之不喜、遂謝絕不通、而天資慈仁、人有窮窶、若疾病者、惘然救恤如己有之、鶴崎生某、在塾染疾、厲氣甚熾、先人親執湯藥、扶持看護、或至徹宵、生遂不起、白衣衾殮棺、至歸送其鄉、實意周旋、雖家人骨肉、有不能及焉者、鶴崎生事係高山話平生寡欲、聲色貨利、淡然無嗜、終年不問家計、雖饑殆不繼、晏然也、只好蒔花卉、後圃數十畝、雜植無餘地、每春時花開、徜徉諷詠其間、如遺世獨立者、觀者以為神仙中之人、治家嚴、御妻孥僕婢毫不假聲色、使知定就學、智課至嚴、患知定性寬柔、恒戒曰、書云、寬而栗、柔而立、若偏乎寬與柔、委靡壞敗、不足有為、又云、沈潛剛克、汝沈潛宜剛克、庶幾將來有少所樹立、回思于今十餘年、言猶在耳、而知定學行不

進步、僕々爾萬在人後、先人之目、瞑于地下與否、不可知也、昊天罔極、嗚呼痛哉、元治紀元正月、男知定教撰、

悼樞伯立

片山介夫

伯立遊大慈寺得疾而歸經二旬遂不起今復由前韻聊寓霜露之感爾

龍蛇有識豈非天、遂使儒林嗟一賢、文酒生休麗澤社、風流夢在大慈禪、三春花落烏啼雨、殘夜水明樓、其居曰水明樓鎖烟、不忍重過舊門巷、茫茫無路返遊仙、

同墓下作

春樹宜々向暮天、岡阡佇立想君賢、孤雲流水看斯道、綠竹黃花笑世禪、二句伯立讀中唐詩意鳥立鳳山何見跡、玉理龍谷不生烟、一堂尊酒論文日、豈料茲來弔謫仙、

府學助教丹陵先生池邊君墓誌銘

府學訓導 樞 原

矯

先生諱樸、字大璞、稱謙助、丹陵其號、姓池邊氏、始冒橫手氏、山鹿郡人也、世無顯者、先生夙慧好學、受業富田大鳳之門、爲諸生領袖、池邊氏之先、嘗以武顯、至棕英君、無子、乃養先生爲嗣、除醫學監、廩百石、既而命變業、爲時習館句讀師、數年、擢于訓導、給賜采地、班至上士、終遷助教、以恪勤五十年、進班十名烏銃隊長、上以歿、春秋七十有五、實弘化二年八月十一日也、葬于祇山之麓先塋之西、先生骨相清迥、白鬚垂胸、居止閑雅、望之如仙、爲人溫恭簡素、澹于聲利、不好表襮

能以和易接物、家庭之間雍如也、人無貴賤、盡其驩心、其導後進、寬柔能誘、巨室世家、多延爲師學初主徂徠、後不局門派、然其所見、固守不變、雅喜文字、最好詩、書亦無專主、務行胸臆、皆瀟灑出塵表、性嗜酒不多飲、晚間獨酌、下物不過一盃鹽菜、每諸名勝宴集、衆皆喧嘩、獨先生酣暢溫克、必哦詩而揮寫、盡驩而止、其雅尚可想、娶池邊氏、生二男一女、又娶坂崎氏、生一男、嫡盛唯、次直明、嗣宮川氏、次直良、嗣柳瀬氏、女縫適國友氏、盛唯先歿、嫡孫名包高承重、先生之葬也、請予誌銘、嗚呼予幼時、學詩、受先生之點竄、自入學以來、三十餘年、情意特篤每有雅集、多陪從、辱唱酬、今其之懇請、諠不可以鄙拙而辭、遂諾而作誌銘、銘曰、

溫恭爲德、澹泊養心、塵表脫洒、天機自深、祇山之麓、其人此休、清風明月、光範永留、

阿部先生墓誌銘

先生諱素、字子緝、稱仙吾、故奉行吉海君諱景純之二子也、養嗣阿部氏、祿百石、配其家女、先生講武之餘、好讀書、專力經史、務講義理、好談忠臣義士之蹟、與二三同志、日夜功靡、以勵操行絕意官路、年將四十、始爲小國久住郡尹、轉任八代郡、遷將作監、遷府學訓導、班上士、加祿五十石、既而爲天守臺監、又爲又所々監、辭職、家居一年、再除訓導、歿祿如前、未幾而罷、此時有二三驕傲之徒、始受教先生、而憤不得志於世、聚群不逞之徒、騷擾都下、以先生教督失理爲詞、其人伏誅、

先生亦由是免職、而非其罪也、世皆知之、而憚辨其實、先生處之泰然、毫無所憾、曰我塞吾責耳、會遇疾致仕、奉職前後二十七年、褒賞之數、不遑甄錄云、以弘化三年二月九日歿、春秋七十四、葬于龍山側先人之墓次、私曰據德先生、爲人明敏、質直好義、胸襟灑落、人無老少賢愚、接之談笑、竟日無厭倦色、其爲郡吏、專主惠愛、不喜興作、去後人思之、其在營職、以振勵士風爲志、視後進如親子弟、但當官議事、議論激發、不顧利害、後進失義者、奮言呵責、毫不假借、以故俗吏間不能容、而驕傲子弟、亦不能堪、然其人改則脫然不芥蒂、猶驟雨頓晴、晴空豁敞、故人亦不甚怨、然由是官路多蹉躓、先生天資寡欲、好而施人、初阿部氏頗豐於財、自先生繼家數年、蕭然貧罄、處之晏然也、年未三十餘、室人生一男而歿、遂不復娶、男諱董之嗣家、今爲學監、乞予墓誌、予蒙先生之慈育、三十年如一日、誌銘之請、不可辭、謹序所見大略、繫之以銘、銘曰、

人之懷義氣、誰不稟於天、多欲者損、寡欲者全、先生存養、寡欲則然、我銘扁石、以瘞九泉、龍山之陽、銘乎不朽、義氣之在天壤、與山悠久、

□園木恍惚

通稱震太郎、光愷はその號なり。加惠に住し(加茂川村)萬延二年卒す。年齢詳ならず。

光愷幼にして才氣あり、學業大に進み易に詳しく且本草學に精通せり。文章を以て當時の學者間に

推さる、詮索所に出仕し、御山支配役となる。然れとも性癖ありて上官に對し從順ならず、其の行爲往々不法の事多く遂に御郡拂に遇ひ山本郡味取に退去す。後免されて加惠に歸る。夫人ありしも別居せしを以て子なく、之を以て甥方峻家を繼ぐ、光愷の事蹟據るべきの資料少きにより細川芳洲の文を掲げて其の一斑を知るに便す。

送園木光愷序

宗國之太祖幽齋公、以文武忠孝、開封於丹波、而能免禍於亂世者、獨賴和歌之學焉、和歌之能動天地感鬼神信哉、近世之士、棄情性而務華藻、餽釘上古之詞、以飾下俚之心、於是乎、太祖之遺風殆乎熄矣、余竊恐焉、有園木光愷者、自宗國而來、依我師於羽澤之山、羽澤之士數十、余求其高明磊落之材、愷其庶乎、夫愷之學、於經術韜鈴政刑治平之略、皆能通習之、而又旁理和歌之學焉、抱此利器而困於盛代者獨何也、余甚憫焉、嘗與宗卿八代相君語愷事、君頷之、屬余與我師曰必歸愷也、愷亦逼令任不得歸也、其志益篤矣、及其辭而歸也、余命之坐、而告之曰、汝非我太祖遺民之裔乎、太祖以和歌之學、免禍於亂世、而汝獨抱利器、而困於盛世、蓋修太祖之遺教乎、溫柔敦厚、詩教也與觀群怨詩道也、詩猶和歌也、和歌於詩也、汝既理和歌、太祖之學今猶傳於京紳烏丸公、則汝以遺民之裔請焉、必可得也、得而修之、有溫柔敦厚之教、以化汝之情性、有興觀群怨之道、以木鐸於太祖之學、則豈啻達於盛代已、雖經術韜鈴政刑治平之略、其行於宗國、而達於天下、孰能禦之者、汝以爲然、

就相君而請焉、愷再拜曰、謹受命矣、遂書爲二通、一以與愷、一以似相君、亦果能首肯乎否、

芳洲 細川 利和

□中津義直

中津直義姓は藤原、通稱彦太郎、水次村の人なり。膂力絶倫任俠義を好む松田範義に従て大に尊攘の義を唱道し、周旋盡力年あり、文久癸亥八月葦下の變、慨然奮て曰、吾死處ありと、即ち馳て鷹司氏の邸に抵り、進撃を促すもの再三、遂に七卿に隨ひ長門に下る。元治元年七月十九日天王山に屠腹す。年三十一。

中津義直君勤王忠節贈位記

王 廷 章

中津義直君、姓藤原通稱彦太郎、熊本縣菊池郡水次村人、膂力絶倫、好角觥、中年有勤王之志、從松田範義、奉護太政大臣寓長州、有年、元治改元、長侯討幕、從其軍、戰京都蛤門、此時幕武尙強、慮我志之不就、恥死于與同志十七人、於天王山自殺、嗚呼哀哉、明治三十五年十一月、天子巡狩熊本縣、有勤王忠死之士贈位之詔、中津義直君從五位、實家世之榮譽也、春秋祭祀萬世不可懈矣、因誌其略以遺後昆、

家乘略記

中津藤十次男、彦太郎勁健、自幼好角觥、夙有勤王之志、二十九載而上京、與同藩松田重助等、護大政大臣、寓長州有年、元治元年長藩討幕之時、從其軍七月二十日戰蛤門、翌二十一日遂於天王山、與同志十七名割腹、時年三十有二也、明治二年五月六日、熊本花岡山始有招魂祭之盛儀、同二十四年十一月五日、東京靖國神社合祀有招魂式、爾後官祭歲以爲例矣、

明治二十五年生辰春

中津彦太郎碑銘

西 口 世 馨

君諱義直、通稱彦太郎、肥後菊池人、生而魁偉倜儻、有大志、膂力絶人、旁好角觥、夙唱勤王之義、結交四方之士、當是時幕府失臣節、逞威福、於是乎、慷慨不置、一日飄然出家、遊于京攝之間、而屯蹇不就、遂至長門、有所謀適七卿蒙譴來投、君百方周旋、蛤門之役、官軍失利、乃走入天王山、然猶可以潰圍、而心不欲生、與同志十七士交刺而死、明治戊辰筑士肥士人、相謀建碑于屠腹之地、

明治壬寅

天子閱兵于九州、嘉其誠忠、追贈從五位、

贊曰不爲利回、不爲害怵、至誠貫日月、節達于天關、人臣之榮、於是乎盡矣、嗚呼盛哉矣、

□高木直久

高木直久、姓は源、通稱元右衛門、深川村の人、少にして不羈、氣を負ひ任俠を爲す。軀幹強壯武技に長じ尤も劍鎗の術を善くし、名聲國中に藉く。壬戌の冬長岡護美兵を帥て京師を護る、直久近臣某氏に従ひ行く。明年五月親兵となり益武技を練る。八月十八日の變屢奇策を進めて爲す所あらんと欲し行れず。乃小阪雄宗加屋時雄と長州に走る。時に兵を丹州に擧ぐるものあり、志士争て之に赴く、直久曰、人の事を擧ぐる其是非を問はずして雷同之に應ず、是兒女の見と均しきなり。丈夫宜しく義の當否を審にし、而後に之に應ずべしと遂に動す。偏に恢復を以て自ら任じ東西奔走艱苦具に嘗む。甲子六月宮部増實等と京師三條坊の旅舎にあり、會兵急に之を圍む。増實等皆之に死す。獨直久刀を執て格闘數人を殺す。殊に近藤勇來り戰ふ、勇幕は府隨一の劍客、直久は肥後の剛のもの、互に鎬を削りしが流石の勇も直久の爲に重傷を負ひ直久は圍を破て出づ。七月十九日長軍の先鋒となり蛤門に突入す、銃丸雨の如く迸る。直久双刀を奮ひ殊に死戦し殺傷過當、會々飛丸あり一は隔に中り一は股を貫き遂に之に死す。會兵其屍を検するに其糧囊に書して曰、肥後藩士高木元右衛門源直久年三十二と。會兵其勇に感じ特に首級を擧げざりしと云ふ。直久曾て長門を發し、途和歌を詠じて曰、

屍をば都の苔に埋め置きて我大君の守りとやせん

明治三十五年十一月正五位を贈らる。

直久の逸話

一、朝廷の衰微を憂ふること常にして、且外夷渡來に付ては攘夷のことを言て置かず。

一、菊池氏楠氏の功蹟を慕ひ追々落涙に及べり。

一、御親兵として差登され候節は菊池公の宮造營のことも周旋し、菊池傳來の古文書携帯し、折々公卿へも内密周旋したることあり。

一、直久小阪大作へ與へし書柬

私共儀不肖微賤の身を以て恐多も依勅諭君命 禁闕爲御守衛被差出候に付ては天朝の御爲は勿論御國家の御爲累年不被爲動の叡慮を遵奉し兼日被爲示の君命を推戴し乍不及如何にも粉骨碎身の覺悟に罷在候去月十八日不慮の變故相發候節は兼て御沙汰にも有之候通相心得陽明門の廊下へ打集御守衛可仕と驅付候處會津薩摩等の人數にて一功拒絶無存懸も 勅諭の由相唱候間不得已一先御守衛總督三條様へ罷出御指揮奉伺候處於此卿當朝參内及他藩人御面會被禁止の御沙汰下り居候得共斯て危急の御場合玉體の御安否如何と御案勞至極に被思召上且御守衛人數憂憤所願の趣意も一轍有之如何にもして御參内直に天氣を被爲伺答にて御守衛人數御引卒九門處により御入に相成の處嚴重に鎖鑰を施し到會薩等より砲銃おも指向け殆んと朝敵同様に相當兼て御沙汰重大の御趣意相達不申彼是如何の儀共に付前後の心得屹と關係仕候義と存是等の處書付を以て奉伺理非曲直重て御沙汰被下候様傳奏衆迄御達仕置候爾來早及二旬候得共更に何の御模様も無之其中直にも可

奉伺と野の宮殿へ請謁見候處御用繁の上他藩面會難相成との御沙汰有之候由にて御斷に付彼雜掌木下左近少貳迄屢伺出候處於同人も此儀明了の御答有之候迄は半年或は一年二年に及候半歟と見込候由申出甚可怪の折柄此度御守衛藩の人数被差返候旨被仰出の趣御書面には選士貢献とも御満足思召とも或は非常御警衛可有之とも御守衛名目には無之とも相見愚昧の私式條理何に適從可仕哉彌以疑團鬱結仕候次第巨細可奉伺候とも前件同様容易に氷解可仕御答も被下間敷誠以て憂心煩亂の仕合御坐候然る處攘夷の御沙汰而已は十八日前後御一貫の御趣意と追々奉伺殊に十八日長刃之の御沙汰にも攘夷の承何角迄も叡慮確乎被爲在故於長刃効力朝家候に付人心に振興の事向後彌御依願の思召に候間忠節可致盡候云々決して心得違無之様益勤王可竭忠力旨被仰出候と相見候通に御坐候得は於三條様も攘夷の叡慮御遵奉一義は從來御的任の御本懐と符合致候故從妙法院長府一御下向の御届書にも是迄の叡慮御遵奉爲攘夷御先鋒御下向と申御趣の由に御座候且初發御守衛被仰出候御趣意も攘夷の儀布告に相成候上外夷何時海軍却掠し畿内へ闖入の程も難圖 禁闕御守衛嚴重の被仰付度思召候處海國は夫々防禦も有之海軍に引離候諸藩は救援の手當有之候事に付邊鄙より畿内へ警衛美立居候ては自然不行届の筋も可出來且闖國の兵備手薄に相成國力の疲弊にも可至歟に候間京師守衛の義は不被爲置候ては實以て宸襟をも不被安候間忠勇强悍の選士差出候様被仰出其御總督則三條様に被任列藩の壯士も雲集仕候事に候得共第一畿内闖入の嚴備に被爲立候承

誠以不得已分決の時と奉存候然るに攘夷の所歸は向後彌御依頼益可碯忠力旨被仰付候一國の藩屏に是迄の叡旨御遵奉にて御下向七人の縉紳御維持仕可之歟抑偏少の一隅に候得共天下正義の所根據にして累年不被爲動之宸衷從是挽回貫徹せんはあるへからす太守様にも追々御請謁相成たる如汗の綸言に御座候得は於微臣共猶以感激忠身仕何方迄も奉載盡力死而後已候と申處に安心仕候外有御座間敷存込候間直に三條様追慕仕長刃表へ罷下申候爰に御鴻恩の御國家に後を向て候事は於情義毫釐も無之又一己の私を潔くし輕舉妄動の念慮は聊も無之其の邊の微意深く御憐察可被下候左も事成亂平の後萬一存生に候得は早々罷歸如何様共御國典を奉待の覺悟申迄も無御座候間此段巨細に御届仕置度如此御座候此旨を以て可然様御達被成置可被下候恐惶頓首謹言

九月十一日

加屋 四郎 藏

高木元右衛門一

小阪 小二郎 介

小阪 大八 殿

猶以て御同志中には一に奉伺候上決斷可仕筈に御座候處何分窮迫の場合に臨其實難行勢御海量可被下候別紙呈不致候間敷御致意奉願候御國許の義は此寫を差上申候間御手数敷宜敷奉願候以上一、直久實兄高木治三兵衛へ與へし書束

増御機嫌克被成御座奉恐賀候次に私儀去九月京都脱走以後一日も不快と申日は實に無之盡力仕居申候間乍憚尊慮安に爲思召可被下候九月十一日夜三條様を罷出若君様拜謁被仰付御別盃御饂別なと被爲項戴夫より直に發足伏見通を參り長州深川策助と變名仕大阪之十二日朝飯後着夕方川口へ下り翌朝出帆仕同十五日晚防州三田尻へ著直に七卿様を拜謁同十九日より三條様より京師之御使者被仰付直に發足十月十五日同所へ歸る廿三日より又々京師之御使者被仰付霜月廿三日同所へ歸著仕今日迄同所御茶屋、松賢閣下唱有之候處に滯留去正月二日より會議所詰被仰付日々御用筋多彼是盡力仕居申候去年霜月より三條様は山口の内湯田町と申所に御滯留被成御座會議連中は久留米眞木和泉水野丹後土州土方楠右衛門と申者湯田深山へ罷在申候三田尻へ宮部鼎藏久留米眞木外記土州田所壯輔小生四人罷在申候諸藩士惣人數今爰へ罷在しもの五十人餘日に議論多愉快の事共に御座候小阪小二郎此仁も何楚申分も無御座候伍長に被仰付盡力仕居申候

一、當時勢の儀如何成行可申哉長州固より申上迄も無御座候得共何方迄も攘夷の 叡慮遵奉にて昨年十八日後の誠命者用ひ不申覺悟の由に御座候或は社人坊主角力取百姓町人等願出三田尻近邊宮市と申所に遊軍備大將來島又兵衛と申者其外役に彼是三十人餘は藩士の由にて都合千貳百八餘有之候由日に兵練杯有之不怪盛の事に御座候備向は銃炮備にて大小砲八百斗り神職杯は弓備總體前後左右進退の自由なる事々々愚筆に難盡事共に御座候右等の備何ヶ所に有之哉方に有之候由に御

座候尤も士分の備是は三田尻に居申候精兵四百騎是も早且より練兵有之誠に勇々敷事共に御座候

一、正義の諸藩昨八月迄餘程多御座候得共反覆多只今にては東國にては先水戸是は長州よりも格別盛の由藩士は固より百姓町人迄も屹度攘夷正義□□し一藩にて何方迄も必死にて周旋の一定論に相成申候由上杉侯も正義の由佐竹は不相分尾州正義備前因州大に正義加州世子公正義對州正義箇様各藩正義御座候只今通にては中々納り兼可申乍恐澄之助様良之助様の御周旋大略承り申候處先薩に御同意の由御國の義は昨年十八日前屹度御正義にて爲在候處箇様に御反覆被遊候ては實に奉恐入候事に御座候御國の御爲ならては何とて箇様に盡力周旋仕居候哉因循姑息の士を御用被遊正義の者を御退け被遊候ては實に御國家の御大事此時に御座候得共奸物共當座々々と押移君徳を汚し申候事言語に打絶候賊等の爲に君に親み兄弟に離れ大守様の思召を奉し今日迄も周旋仕候事何方の爲に御座候哉悲歎に不絶事に御座候此秋京師脱走の節届書別番奉入御覽候

一、御母公様乍恐時下如何被遊候哉懸念此事に御座候萬端御保養被遊候様奉願候

一、於辰どの嘸々成長被成たると推察仕候程能便も有之候は、何楚進度御座候得共其義出來不申殘念に押移申候御序に宜敷被仰通可被下候 乍憚時時下御保養被遊候様奉願候海山申上度御座候得共便宜の人引止相認申候間何分愚筆任せ不申右迄奉申上候々々如此御座候以上

一、同上

以幸便奉拜呈候被爲捕益御機嫌能遊御坐奉恐悅候次に私儀無異にて罷在申候間乍憚尊慮安に爲思召可被下候然者去十八日後不日に戰爭に相成可申哉の勢に御座候處上向きは大分靜に相成申候事に御座候腹心より靜に相成候儀にては決して無御座日月未だ地に不落と申事に候得共天下の有志中も一時も不安は當然の義に御座候不遠如何とぞ相成可申見込の由井伊家の所業よりも返て上段にも相成可申一兩日の勢にて御座候惣體各別盡力仕居申候有志者は盡く叡慮と偽り唱へ候様子に付何方一散亂仕候哉何も國々へ引取候由相唱出奔仕候全體此一亂は薩州より中川宮を作り立我意を振舞可申存意も有之へく且又會津は頃日被仰出候大和御親征御行幸に付ては將軍家は迄と申所より起り申たる哉に相聞へ申候會薩何れも志は相募り申候由にて最早餘程不快差起居申候由風評仕候御守衛御人數も追々御免相成可申風評も仕候去る十七日より大和國には中山侍從様大將分にて幕府領八里四方斗御切取相成申候由不怪政事宜敷人々服し申候由追ては高野山に立て籠り申候由承申候打手(此内彦根津備前紀州米澤此餘は御小身にて覺不申候)八藩被仰付候由に御座候得共未だ一藩も戰爭不仕候由所謂楠公籠城の如き義兵にて御座候間手出不申候義は尤の事に御座候私共も主上を逆賊の手に相渡申候ては御親兵たる職分は十八日以來一切相立不申候間屹と仕候處分御座候間御安意に爲成可被下候山々奉申上度事御座候得共先右迄早々如此御座候以上

九月六日夕認

元右衛門

直久一

治三兵衛様

尙々三條様長州へ御開後は晩に内密御留主番へ罷出申候侍從様と申上候若君十二歳の御身の御番仕候御行末如何御成可被成哉安勞仕居候事御座候又々已上

一、子爵品川彌三郎より高木太郎へ贈りし手束

未だ拜仕を得ず候得共御健勝御勉務の段奉賀候陳は今般小橋君の御送附に相成候故高木元右衛門の御手紙壹通尊攘堂へ御寄附被下正に落手仕候永く同堂の寶として愛藏可仕候本年は三十年祭を執行する筈故此手紙も展覽會へ備へ可申候一讀百感生し往事を追懐し慚愧の外無之候心事何も御推察可被下御請證旁々頓首

明治廿六年五月二十六夜

尊攘堂主人

や

じ

高木太郎様

國家の爲め随分御健勝を第一として有事の日は元右衛門君の靈に對し十分の御盡力あらん事を奉祈上候

□片山桃齋

名は元惠、字は子信、桃齋と號す菊池郡水次村の人、醫を業とす。文化九年丙戌九月廿九日歿す。享年七十有三。水次村先塋の次に葬る。

片山桃齋墓誌銘

先生姓片山、名元惠、字子信、菊池郡水次村之人也、其先片山行朝、仕南筑高尾城守田尻氏、以戰功著名、田尻氏滅後、行朝子孫漂泊、來寓于吾國、終止居於水次邑、事詳其家記、故不斯贅焉、先生幼而秀慧、長有志于醫術、於是、其家君謂當時大醫、莫如龍門富田先生、遂使受業其門也、先生親炙切劘有年、所雖成業而施治乎、居恒囂々然、不屑世醫之自銜嚮、而卑疵纖趨、重縉之急、故無嘖々之名、而有慥々之効、先生爲人質直而喜氣、能艸書、好詩文、人有一不避、則無親疎、莫不面折之、及坐客滿酒酣、則未嘗不粲然擊節、而朗吟也、授句讀弟子、數擊拂童蒙、則丁寧反覆無敢厭倦、亦其性也、晚年刻意國風、所賦撰有若干章、其所居之室、環以池水樹竹、几案推以書冊筆研、嘯吟乎其間、欣々也、不知老之將至焉、先生往歲患飲癖、雖一旦得瘳、而老後復發、遂至由此而弗起焉、先生生于寶曆四歲甲戌正月十又八日、歿于文化九年丙戌九月廿九日、享年七十有三也、有男二女、長子及二女皆夭、次元靜、往歲染痢先于先生而沒、次仲禮嗣業、兼瘍科行于世、銘曰、

求師序斯就曠、遷業序斯遂志、生也從其所好、死也無累後嗣、

桑 滿 順 謹 識

石 井 章 恭 書

片 山 桃 齋

己巳仲秋哭男伯壽

何事悲哉搖落秋、一朝棄我儂悠々、凌雲志折垂天翼、嗅篴笛餘醫國憂、老蜉斯時如有失、明珠一夜是相投、無端更出衡門望、山野蕭條斜日浮、

一

廻風一自入楓林、一望蕭條秋色深、二十八年空作夢、三餘六藝置摧心、塚前徒唳子安鶴、牀上空懸王敬琴、長夜漫々唯落淚、草虫切々隔窓吟、

自爲瓦全作玉碎の心を

玉となりて碎くらんとは思へどもよしや瓦てあれとしもこそ

□木下韓村

名は業廣、字は子勤、真太郎と稱し、韓村又は犀潭と號す。今村の人、藩の文學たり。慶應三年丁卯五月歿す。享年六十三。飽田郡龍田山に葬る。門人私諡して忠獻先生と云ふ。

木下子勤墓碑銘

子閱人亦多矣、獲友二人、曰鹽谷毅侯、曰木下子勤、二人者少於予、或十年、或五六年、而其才之與學、皆長於予遠甚、毅侯仕山形侯、僑居江戶、雖已老、猶得時往來相歡、子勤則歸於熊本、不相見、幾二十年、文久壬戌予與毅侯、俱昇於幕朝、子勤亦徵、時子勤在京師、竊喜庶幾復相見、而子勤謝病西歸矣、自羽檄倥偬、郵書亦不時通、心爲之耿耿、三四年、慶應丁卯七月、忽得子勤之訃、予大驚、與兒益哭之、寢間一月、毅侯亦沒、嗚呼二人者逝矣、而予子然、猶且托餘喘於兩間、感痛如何、又間一月、于勤弟某、甫及遺孤信之書至、附行狀及年譜、請銘其墓、回思往事、歷々上心、欲辭不能、乃據狀序之、曰君姓木下、諱業廣、子勤其字也、通稱字太郎、後更真太郎、韓村犀潭澹翁皆其別號、其先蓋仕菊池氏、菊池氏、亡降爲編戶、猶世居菊池里、考諱衛門、如懿行聞於鄉里、邦君獎賞、母宗氏生四男、君其伯也、甫十歲、受讀於鄉人桑滿伯順、或戲問曰、讀書欲何爲、對曰欲不爲小人耳、年一章從游於府學助教大城氏、二十二以學業優長、許稱氏帶雙刀、明年舉府學居寮生員、天保乙未年三十一、擢爲伴讀、斑中小姓、歸謀於父、默然者久之、曰縮汝十年命、則能於是往侍于江戶、後常扈駕東西、庚子兼進講於世子、壬寅轉世子伴讀、甚見信任、隨事約規、一以至誠、尤致意於德色消長之間、有事關大體者、輒造長官爭之、往々自夕達旦、人或以爲持論大嚴、而不少顧慮、侍世子、凡九年、令德日躋、而嘉永戊甲不幸捐館、君悲惋不自勝、體氣頓衰、明年爲府學訓

導、安政甲寅、兼諸公子侍講、己未賜粟米百石、文久壬戌、成山公子、如京師、時君以事在、告公子以幾句不靖、請起自從、明年春在京師、會幕府有命特徵、君曰、吾起編戶、恩眷至此、未知所以報、臺命雖嚴、非吾所敢當也、遂以病辭、即日西歸、固病免、元治甲子、山陽用兵、公子會師于小倉、復命從之、慶應乙丑、復爲府學訓導、進班物頭、丁卯五月以病歿、距生文化乙丑、得年六十有二、葬於城東龍田山、始娶高橋氏、生三男二女、先沒、其二男二女亦夭、叔承家、即信也、繼娶吉村氏、生二男、稱小吉郎、稱哲三郎、小吉郎出繼叔氏之家、三女一嫁安藤氏、餘皆夭、君幼豪宕、數出不遜語、伯順引儒行、痛責之、君俯伏流汗、始知忠信篤敬、爲持身之要、嘗曰、學自寡言入、又曰、無識故無量、是吾不忠信篤敬處、晚年則曰、我久不開驕傲不遜之誚危矣哉、蓋其克治之功、非一日也、然人見其顏色和愉、以爲性然矣、學主程朱、然不肯墨守、以愷悌近情爲宗、其處家庭、友愛曲至、兄弟相聚、論詩談文、怡々如也、每聞世間有傷生滅情之事、則往々爲數日惡、接見貴族、齊邀唯謹、曰爲下而傲、戰國以來儒者之大病、非聖人八年始教之讓之道也、教導生徒、務獎其善、從資稟所近而造之、不律以一定繩尺、曰聖門之教、因其材、而篤焉、後世門戶之學興、必使人從己所好、實材所以難得也、我則從其所嚮、自後驅之要、期於成耳、其說經融洽情理、取徵於目前平易之事、不爲隱微深奧之論、聽者怡然、往々不覺爲經典法語、至人倫所關、若情性之變、則委曲剖析使人惕然悚動、有所省發而止、左以黨禍爲戒、門人有結社往來者、痛禁之、謂是非分明、非國家之

福也、晚年更曰、正邪之分、譬如男女讓於室、猶是可、至於清議分流、則兄弟相鬪、元氣索於斯矣、及洋學興、門人有讀蟹字者、則勉以通觀大勢、講究兵略、又汲々以甄別教旨、遏絕民害、為儒者之任、其言曰、今日為吾道、厄運維持之功、當期於百年之後、目前事為不足道也、又曰、聖人之治、建極明倫父道也、厚生利用母道也、孔子愛禮棄羊、寧去母道、不父文道、是為義利之辨、洋夷為國務、惠恤其民、是獨得母道、若夫倫理綱常則亡矣、然為舉世所歆艷、自今而往、彼此消長、駸々乎、有大義拂地之勢、可不懼乎哉、其於國也、務致力於冥々之中、無訐直之言、矯激之行、常存心於濟人利物治民之方、斷獄之理、井然具於胸、有時而言之、雖老於吏事者、莫不歎服、有所規畫進獻、不敢泄焉、至有以愀然絕物病之者、至疾篤、客有談時事者、輒蹙額曰、止、祇與吾疾為敵、一夕門人侍側、適聞有喟語、曰荷々二分矣、及覺問何所夢、曰鬲下二豎、分明相攻、痛若不可言、門人曰、得非平生之所憂乎、領之、疾既革、其發於譫囁者、曰竟是正心直道、或曰東首辱臨矣、或曰命召矣、沒之夕、忽起急呼朝服著之、言不及家事也、既葬、門人私諡曰、忠獻先生、蓋為不誣焉、銘曰、

道在卑近、積之則崇、是吾子勤、日省其躬、以成其德、爵祿以豐、以顯父母、其孝乃終、松榮柏悅、蘭枯蕙洞、維室雖近、休感則通、老銘君墓、吾心如衝、

擁青軒記

辱知 安井 衡撰
木下 鞞村

德永君約、家於菊池、以其所舊居地、陋且多陰翳、就近買士人菅氏故宅、移而居之、其他背村面野、頗有廣覽之樂、臨軒四望、大矢馬鞍、箭筈日闕諸山、陸續起伏、自東而北、而西走與玉名飽田以南諸峰、遙相接、連環合濃翠淡碧、遠近異態、皆可以游目寄懷矣、君約偶讀杜詩得高山擁縣青句、喜曰、此殆為吾言之也、因名曰擁青之軒、壬戌之冬、余從成山公子、適之京師、朝廷方議剿夷、羣疑鼎沸、物情洶々、甥善請其父母、曰舅老且疾矣、願從行、助其羈旅之勞、父母聽之、時方匝寒、山陽更甚、善與兒信、凌崎嶇、冒雨雪、往反數月、問起居飲食、盡心扶護、使余殆不知身之在行間也、既歸余謂善曰、何以報汝、善曰豈謂報乎、但為吾父、作擁青軒記、則賜莫大焉、余喜而諾、既而引病杜門、又後數月、春且暮、偶步庭中、新樹舒綠、翠梢蒼柯、漸已遮蔽西山、面眉思見其一峰、而不可得焉、因歎、人之得失命數不同也、余生長菊池萬山之下、足習登躋、目飽雲烟、一旦釋褐、移居城中、蕭然環堵、厠乎士大夫、第宅鱗次之間、耳目蒙蔽、與山光水聲、久相際隔、如人在羈旅、而思見故鄉之人、而不得也、君約則異於是矣、君約家本為府城吏員、藩初出為郡之山虞、世守其職、既以陟嶮嶮、窮幽奧、為公事、而又以數百里、怪奇縹渺之觀、收之於一軒、悠然賦詩於其中、何其得之多也、昔者柴桑之老、以採菊見山句、同於塵垢之外、與造物者俱游、而其五斗米、則為鄉里小兒所奪矣、如君約、家有秩祿之榮、身享山林之樂、今與柴桑之所交皆并而有之、豈非所謂乘鶴下楊州者耶、吏風日汚、苞苴成俗、奔競奉承之不遑、尙何在乎斯民之瘡痛、君約耿介老棘、不屑從人儷

仰、而至職守所在、雖長官上司、不能得而左右、使君約任養民之事、吾知其必不得罪於餒寡矣、然而於君約之禍福、未知其何如也、爲君約謀者、不若永守世職、恬澹自牧、維持清廉之風於一鄉、而吾又見善兄弟和厚、而有分辨、足繼家風、又豈非腰纏十萬貫耶、往者余省舊廬、遂訪君約、把杯臨軒、相與指點四方之山、評騭雲烟、嘯詠竟日、既而夜深四隣寂無人語、聽庭前老樵樹、落子聲款款如雨之希至也、思之恍然神往、鱗村木下業廣記、

守山城

家世勤王振九州、探題屢走北人愁、力維王闕三朝位、氣蓋金陵萬重舟、寒兔奔霜月臺夕、哀蟲咽草杏壇秋、變遷如此吾誰問、水抱空城寂寞流、

舟溯漢水夜雨

柳萎花影暗相隣、夜岸冥冥百大牽、故國春爲江上夢、遠征人在雨中船、漁燈點處疑螢火、客淚垂時聽杜鵑、一二橋邊天未曙、漢城東去水如烟、

大磯

大磯新雨小磯風、欲盡春光綠映紅、不怪踰關語音變、一灣隔水是江東、

藤澤至戶塚途中口占

欲晴又雨相山路、垂暮有風江水波、風雨似狂還似妬、落花時節不堪多、

春日遊谷隱軒夜歸

溪中題字罷、別竹出柴關、見客僧無語、背人鳥自還、春燈花際寺、夜火雨前山、餘興猶思酒、明朝童課閑、

壇浦夜泊

蓬窓月落不成眠、壇浦春風五夜船、漁魚一聲吹浪去、養和陵下水如烟、

戊申除夜

光陰誰道夢中過、經歷一年多少情、滴血夏山傷望帝、浮身秋海取殘生、論交書見分離字、擲地詩爲悲哭聲、未把黃茅修故宅、頻使風雨夜來驚、

野居春雨

三春風雨寄林園、幽趣堪欣孟裡存、石帶青苔半階綠、水浸芳艸一池渾、淒涼梨雪輕寒寺、慘澹杏雲將暮村、恐有看花來往客、滿郊細雨不關門、

晚向故里

獨追歸鴉出郭門、天光猶喜未全昏、野雲遠起秋餘熱、溪雨久乾波落痕、爲客十年違色養、看山一日亦君恩、夜深欲渡黃花水、舊路依稀月裡村、

古耕精舍記

叔子士毅游七年，一日歛容謂予曰：古之學者耕且養，其道何如，予未有以應焉。叔子曰：學而通經，將以明人倫也，人人父子相親，兄弟輯睦，室家鄉黨，相安相保，上下之際，無亂其分，則麟必游於郊，鳳必鳴岡，聖人之所以求於斯民者，不過如是。故古者大小學之設，其法備具，雖畎畝之間，耒耜之人，莫不自得於學，而君子學，而知愛人，小人學而知事人，蓋如是而已。且我兄弟一則懼之，情方切于身，伯子已蒙國恩，不可輕顧其私，則吾將歸耕田里，以助仲季之養，何如？叔子幼好讀書，卑之卷冊，終日在一室中，群兒戲墻下而不顧也。稍長意向實踐，作文詩，不好輕俊，又樸厚拙訥，未嘗言其志，而今如此，予心已服之，而未有以應也。丙午之春，家君就疾，叔子遽搬書研馳歸，執湯藥，而予在三千里外，不能急拔身而還，其得失既判矣。予之奔親疾也，以歲之十一月某甲子，始到家，則叔子有官命，授學鄉人，家君言叔子之志，喜動于顏面，乃臥按圖，割田數畝而授之。又付村南地一區，可棲息者，為讀書之所，曰南北其戶，夏涼冬溫，繞以樹，厚其陽，以備風之衝，築土勿不密，堀井勿不深，不久而，爾曹必衰毀不能事事，勿以是而緩工事，既而歲改，矣。吾兄弟天崩地虧，窳窳之事，僅畢而余內人肺患，又劇苦楚百端，血穢狼藉，久而後沒，二兒索乳，鞠育失術，叔子與仲季侍親疾，衣不解帶者，既二百餘日，又棄其家，為予奔走營救，至于骨瘦而黛，而予復忍痛東行，詩云死喪之戚，兄弟孔懷，似為我兄弟今日，而賦之，而叔子之舍，則未有成也。予抵江戶之數月，叔子有書曰：舍就如遺命，溪伯子記之，予因述其意，名之曰古耕，曰從叔子而游者，耕中之人也。

其所與講者人倫之經也，推叔子之所以自成，則可以成人，鄉勿小國鄉之推也，童勿幼長老童之推也，吾君吾相所憂於廟堂之上者，千百萬分之，而其一在一鄉之人，一童之身，有人執道藝，養其蒙涵其性，千百萬積之，而吾君吾相無憂也，然則身在廬井，而游心於六經，助人君明教化，古耕學之道為然，是為記。

鹽谷宥陰評、木伯子此文藁、肖魏易堂、而木叔子為人、乃與魏季子克肖、今古人同不同未可知也。

哭韓村先生

竹 添 井 々

元氣行天地，有時盛衰，上下活熙久，世道日以乖，綠眼環瀛海，覘疊朶其頤，機巧投人意，駸々上堂陞，世間稱儒者，眼光燭火微，是非已不辨，何況取舍宜，夫子拔華起，窮理析毫釐，利用取彼長，所憂在民彝，至其進退節，毅然不可移，微命自東至，振衣歌采薇，最是易簣際，蹙然慎其儀，一心唯在國，片言不及私，鴻也恩如父，視鴻何哀々，飢寒分衣食，鞭策範驅馳，一朝梁木壞，自今向誰依，愁霖日滂霏，不如吾淚滋。

木下先生行狀

竹 添 井 々

先生諱業廣，字子勤，初稱宇太郎，後更真太郎，姓木下氏，考諱衛門，以懿行聞於鄉，官命獎賞，母宗氏，子男四人，先生其長也，以文化二年，乙丑八月五日，生肥後國菊池郡韓磨村，甫十歲，受

句讀於同邑桑滿翁、伯順翁、儒而兼醫者也。姻族町野玄肅，長於先生數歲，嘗爲梳髮，因問讀書欲何爲，對曰：欲不爲小人耳。二十二以學業優長，官特許氏帶雙刀，明年舉國學居寮生員，泰嚴公襲封之十年，先生年三十一，擢爲伴讀，班中小姓，歸謀諸考，考默然久之曰：縮汝十年之生則能矣，於是遂往侍公於江戶邸，天保十一年，兼侍泰澍世子講筵，十三年遷爲世子伴讀，就物納規，一以至誠，尤致意於德色消長之間，或有事關君德，則造長官爭之，往々自夕達旦，故長岡大夫，爲人方正少所許可嘗聽先生講退，而嘆曰：如此可矣，侍世子九年，世子令德日躋，而無祿早世，先生悲惋不自勝，體爲之羸，嘉永二年爲國學訓導，安政元年兼侍講，諸公子，六年賜廩米百石，文久二年冬，成山公子如京師，會先生以事在京，公子以幾內不靖，請特起以自從，明年春爲幕府所徵，先生辭以疾，曰吾起編戶，恩蒙至此，不知所以報之，幕府寵命非吾所當也，卽日請暇西歸，元治元年，幕府有事于山陽，公子往會師小倉，又請自從，慶應元年，復爲訓導，二年進班物頭，三年丁卯罹病，以五月五日易簀，享年六十三，葬城東龍田山，先生幼豪宕，出不遜語，爲長老所溫，桑滿翁引儒行，痛責之，先生俯伏流汗，始知忠信篤敬，爲持身之要，自是專以內修爲務，嘗曰學自寡言入，又曰，無識故無量，是吾不忠信篤處，晚則曰，吾久不聞驕傲不遜過，危矣哉，蓋克治之功，有非一日者，而人見其顏色和愉，藹然如春，以爲性然也，先生容止徐緩，臨事未嘗疾言遽色，作字端莊，蠅頭細書皆有矩矱，家庭之間，友愛曲至，兄弟相聚，論史談文，怡々如，每聞世間有傷生戕情之事，輒作書

日惡，平生無嗜好，稿牘敝氈晏如也，待人寬厚，雖性極魯者，矜而進之，常以臧否人物爲戒，子弟言或涉謗議，輒蹙然禁之，接見貴族，齊邀恭已，嘗謂爲下而傲，爲戰國以來儒者大病，非聖人制禮之意也，又嘗有言八年出入門戶，及卽席，飲食必後長者，聖人之急於教讓如此，人唯先己後人，故事業不能成，而天下之爭亂，常起於此也，教導生徒，懇篤功到，或有過，則屏左右，厚情寬諭再三，其人感悟，然後止，造就人才，視資稟所近而誘之，不律以一定繩尺，嘗曰教人之方，先而唱之，使其出於一塗，吾不欲焉，吾則自後驅之，任其所之，要不使陷於荆棘耳，又曰，聖門之教隨器分科，皆足以適世用，後世門戶之學，與此正相反，實才之所以難得也，先生學主洛閩，而不爲墨守，以豈弟近情爲宗，嘗曰，吾爲學非求爲聖人，求免小人之域耳，不求至純粹地位，求不爲僞假之物耳，今之所爲，不過如此，其說經融洽情理，取徵於目前，不爲隱微深奧之論，聽者意悟心通，如已有之，往々忘其爲經典法語，至於人倫所關，若情性之變，則又委曲剖解，使人惕然竦動，有所省發，有質疑者先使言其意，瞑目聽之，其人不能自悉，則爲言其所欲言，至暢之無餘，然後徐可否之，反復詳盡，久而無倦色，先生濟人利物之念，不頃刻釋于懷，治民之方，斷獄之理，雖老吏聽之，莫之嘆服，其於國事，專致力於冥々，無訐直之言，矯激之行，時有建言，言積密不泄，有問者則曰：無之，若初不知者，外人或至以竅然，無所憂慮，病之，而先生不以嬰意也，嘗曰，風之入物，有隙，則雖無竅隙之地風無不在，故能得竅隙而入，但發屋拔樹，非巽妙用，又曰納約自牖，甚難，或過於從順，徘徊

顧瞻、卒失下手之機、先生尤以黨禍爲戒、平生交友、曠然不措厚薄於其間、有門人結社來往者、輒嚴之禁、嘗以正邪之分、爲非國之福、先生晚年更曰、正邪之分、譬如男女謹於室、猶是可、至於清議分流、曰兄弟相鬪、元氣索於斯矣、及西人之學興、門人或有講其書者、勉以通觀大勢、講究兵略、又汲々以甄別、教旨遏絕民害、爲儒者之任、曰聖人治、建極明倫、父道也、厚生利用、母道也、孔子愛禮棄羊、寧棄母道、無失父道、是爲義利之辨、西人務惠恤其民、是得母道、若夫倫理綱常、則亡然、舉世欲艷、自今而往、彼是消長、駸々乎有大義拂地之勢、可不戒哉、丙寅秋先生、觸疹已瘳、而潮熱不解、神氣沈鬱、恒若有所憂念者、是歲再用兵于山陽、無幾而輟、物論益喧騰、丁卯歲且先生賦二絕曰、群行紛錯亂荆中、塗轍誰能合異同、千古金甌何所賴、回頭天地立春風、欲向靈蓍問未然、吉凶悔吝亂如烟、告吾獨有瓶中物、水在本根花自仙、自是疾漸深、脅間絞痛、轉刺心窩、不能帖臥、蓋癰結于內也、客有談時事者、輒蹙額曰、止祇與吾疾爲敵矣、一夕門人侍側、適聞有喙語荷々二分矣、及覺問何故夢、曰鬪下二豎、分明相攻、痛苦不可言、門人曰、得無非平生之所憂乎、先生頷之、疾既革、唇燥舌梗、若有所言、諦敢之則曰、氣體之充也、又曰竟是正心直道、其發譴囑者、或曰、東首辱臨矣、或曰命召矣、屬續之夕、忽起坐、急呼朝服著之、蓋刺々之言、不及家事也、先生以韓村爲號、又號犀潭、晚號澹翁、門人私諡曰忠獻先生、始罪高橋氏先沒、繼娶吉村氏子、男五人長某某俱天、次重三嗣、皆高橋氏出、次小吉郎、出嗣叔父真弘家、次鍊三郎、女二、重三

屬井上毅及鴻、作先生行狀、竊以鴻等學淺詞陋、安足以當之、但吾二人者、親炙最久、義不可辭、乃相與輯平生所見聞、并述其世系行事概略、以俟大人君子表之、謹狀、

□城 鞠洲

名は允、字は升卿、一に由道と稱し、鞠洲と號す。菊池村の人、再春館助講に任せられ、明治三年七月十八日歿す。享年七十有一。

鞠洲先生墓碑銘

君諱由道、字升卿、一稱允、號曰鞠洲、其先菊池氏第八世右京大夫藤原能隆之第四子、城六郎隆經之裔也、蓋菊池氏亡後、世爲處士、隱閭里之間、君之考諱光由、始業醫、妣者藩故上卿米田氏之臣白石氏也、君以寬政十二年五月二十五日生、享和二年十月二十五日、考光由君逝矣、時君生三歲、妣年二十九、無幾妣携君、寄居于外姻某之家數年、君幼而嶷然、篤志好學、遂就賢師反受業、勉力不懈、又見選爲醫生員、其間字育扶持、一出于妣之勞勩也云、文政十三年九月十五日、奉官命嗣考之業承爵、天保十一年十月加一級、同四年九月、以事母能考賜賞、其年十二月、特賜米若干、嘉永六年九月、加階進子謁見醫師、應慶元年九月、賜櫻花章外套一、翌年四月擢於外班官醫、任醫學助講、明治庚午七月、因藩政新革解職、君初繼先河原氏、是一男一男、男名曰郁次、早夭、後養疾醫有働

氏弟翼爲嗣、以其女爲配、後君又娶高木某妹爲繼室、先是己巳春、君年甫七十、義子翼設壽筵、余亦應其需、屬鄙辭一篇以賀焉、既而庚午七月十五日、君因故事、謁于故里先塋、還于舊宅、忽爾得疾、越十八日遂歿、享年七十有一、君爲人質直而好義、努力超群、嘗會同鄉之友生、時習修文辭、或講醫若儒之書、導按證處方之業、會約尤嚴、其執刀圭也、主忠恕、守禮節、其志一在正時醫之風習也、其育門人小子也、夙夜匪懈、諄々不已、數十年之間、受業者凡三百有餘人、其所著傷寒論、金匱要略、玉石辨、傷寒講義、及捨玉醫事、或問素門鈔、論語講義、文稿三篇、今茲辛未春、義子翼來、詢彫其石、傳不朽于余、余亦不得辭、敢誌所知、嗚呼哀哉、死生有命、禍福無常、不圖今日記君之遺事也、且作之銘曰、

篤學成業、孝廉立身、忠信執技、禮義接人、不朽者文、不離者親、等峰之陽、菊水之濱、維此勝地、歸休維神、

明治辛未夏

富田 栗誌印

城野 充通書

七 興

城 鞠洲

鞠洲先生、生鞠瀧、講醫爲業、側學道藝、乃嘗執技、枝以糊口乎世、亦寓意乎洙泗之遺流、袞袞而厲揭、或賦詩屬文、伴無以憇、耽興好樂、優游卒歲、有客來謂曰、先生生乎鞠、乃處乎鞠、鞠之勝

興、宜其探掬、曰然、然則其最以爲幽勝佳興者、吾願聞之可乎、曰可、鞠之地理、方數十里、泗原角之、鹿野倚之、夾川網之、鞠河紀之、鞍峯聳之、等嶽崎之、田野闢乎其間、貨財殖乎其裡、數百千年、維民之所止、昔者肥公鞠池氏、嘗城都乎此、政教施布、人民草靡、今也雖荒廢乎、猶餘其基址、城池之深邃、足以仰昔日之美也、吾登其荒墟、覽其遺壘、俯仰天地、顧眄遠邇、呼無以答、思無以弭、喟然而嘆、慨然以悞、則悲風颯至、愁雲慘起、若是何如、客曰、先生所探誠鞠之美談、然遺壘荒墟、人皆泣而暗、非所見而喜、非所聞而題、先生曰、春日之花、于彼原隰、乃青帝之爲政也、陽氣漸翁、和風所扇、井雨所濕、瓊蕊瑤葩、珠藥玉蕾、勃然生焉、藹然闐焉、粲然色焉、賁然彩焉、若錦若繡、若綺若綾、若霞之絢々、若雪之皤々、佳色幽芳、撲鼻奪目、苾々芬々、郁々爛々、燦々耀々、煜々若攀瑤臺、若迷金石、若與豔妻居、與神女宿、乃使文園挾槩之士、詠賞其美、則設筵置席、開罇舉世也、醉而忘憂、樂而致喜、詩以陳其趣、文以伸其旨、若是何如、客曰、夫花之美、朝開而夕落、未可以爲永樂也、先生曰、腐草之所化、以生耀日、日落天暗、乃動光燿、草間露清、樹梢風調、點々以飛、紛々以翺、螢々以輝、煌々以照、江上的々、蘋末蠢々、若群玉之斯散、若衆星之斯隕、婆娑頽頽、言之不可盡也、昔者鞠之先公、出遊乎河水之畔、觀螢火之亂乎橋邊、而有亂橋之美、讚至于今、民傳其名、嘖々賞嘆、乃三四月之交、相率莫不以爲奇觀也、築地之溝渠、木庭之河岸、石梁木橋、緩步以顧、看夕陽西沈、水面既肝、初霏微共髮髻、終的皜以燦爛、聚斯散、

々斯亂、樹懸華燭、水鱗錦瀾、縫闈而來去、自夕達旦、詞客之所詠、兒女之所玩、貧士假光、以照書案、古來之幽趣、不可舉而等也、若是何如、客曰、一時之觀、不足以示後死、耳目之美、不足以詭君子、姑欲聞其上者、先生曰、城墟之隅、有望月殿之遺迹、先公全盛之時、會宴乎秋月之夕、風流詠歌、至今有遺冊、蓋一日之所賦、萬章集成、乃十七之什、而莫不賞月之鮮明、今吾望荒臺之月、而思往昔之高情、讀萬章讀遺章、而感三嘆之賞聲、竹裡布金、松間碎瓊、鸞鶴鴻雁之影、山川海岳之光、團々團々、滿々盈々、與霧俱開、與雲俱晴、與霜俱白、與露俱清、宛轉霏微、見乎篇章也、而吾藏之以爲家榮、若是則可以傳後生乎、客曰、是亦一時之盛與、而非萬世之奇絕、一冊之遺草、豈不朽之典閱哉、請置此、而新其說、先生曰、鞠居乎肥之北鄙、冬月之寒最侵、發發之候、栗烈之辰、風散先集、而雪殊深、乃其飄々降者、殆如玉塵、其皓々積者、恰如白銀、枯木著華、而嬋妍層巒、削玉而嶙峋、四野無月之夜、而奔兔走麋、三冬嚴寒之日、而藹然若春、郢都之所奏歌、剡溪之所放輪、窓中讀書、夜燭不貧、簾前飛絮、女說最新、是吾北鄙之興、特以采真、若是何如、客曰、雪者風寒之所憤怒、而農民之所憂苦也、妨晝茅膏絢之勤、勞患繼縷露肩之貧窶、其勝雖潔清乎、非仁德君子之所不取也、先生曰、鞠之河水、泅渌冽清、可以褰裳、可以濯纓、鱗魚所產、鞠菜所生、呀而淵、滔而長、其石幽奇、其樹鬱蒼、其浪灑激、其流汪洋、竹竿可以釣、桂棹可以行、蕩々漫々滾々湯々、湍瀨之所激、鳴而鏘々、負而望之、則若蛇之斯走、若龍之斯橫、綿連屈曲、然後入海瀛

也、而支流之所灌、田畝數百町、農夫以稼、是稻是梁、其苗以碩、重糶以成、而民用是富、而家以之榮、板屋鱗次、人烟蒼茫、吾處乎其間、醫以爲職、則民之罹乎百疾也、間或乞吾治、慕吾德、是以吾得不織而衣、不耕而食、若是則可謂仁之一端、而吾德之所克乎、客曰、頗樂矣、然猶未徧也、先生曰、鞠之名山、崔嵬嶺峴、其嶙峋者爲筥、巖從者爲鞍、鞍之象可跨攀、筥之形可射彈、鏡嶺傍鞍之腰、鞭野橫鞍之轅、殆似騏驎之可馳驅周旋也、或夕月之恒懸乎筥之嶺、翻乎其反、方張而彎、々則筥之銳乎、尖者恰如弓矢、相持而向九天也、天造之武備、吾山嶽之勝爲然也、昔者菊池氏受封、營城乎此間、世唱勤王之師、大奮其忠肝、勝則東南取蘇益之二縣、西北取豐筑之兩邦、敗則率其銳兵、而逃入乎山谷之中、山谷之中、險艱殆與蜀道同、蟠岫崑崙、截辭棄爰、虎口之所伏、斑蛇之所蟄、一夫可拒、而萬卒不可入、唯其地勢若斯、其急也、是以傳世、二十有五、而以爲九州之盟主、則天下之人、莫不知其拉鬼之勇武也、今既歷數百之星霜、而其英雄之遺靈爲草木、爲金石、爲風雨、爲雷霆凜々烈々、猶將不滅、則其山嶽之秀色、亦鬱葱乎不改、其奇絕克靜而壽者、豈不亦仁者之所樂悅乎、故登冒遊望之人、皆感嘆而不輟也、若是則以爲徧乎、客曰盛矣、然是特介泮武弁之事、君子賤之、先生乃默然、頃之曰、白雲城之西、孔子堂之遺址、維昔先公重朝、文武忠孝不匱、施張弛之政教、建孔子之廟堂乎、此絃調樂洋、春秋祭祀、太平奇策之什今猶在耳、當此時、域樸之風大扇、菁莪之化盛起、濟々英彥、斐々君子、挾觚挾槩、屬辭比事、風靡一世、澤施後昆、方今鞠之士人、

辱得與聞斯文、則深山之中、大澤之墳、生龍生蛇、蜿々蠅々、或蟄伏乎巖穴、或騰躍乎中原、靡々乎不己者、得無非先生之餘恩乎、言未終、客決然起而、再拜曰、美哉美也、無有所加矣、是吾所欲聞也、今能藩教化暨開、既營津宮、徧育人方、亦是繼鞠之餘燼者、而其先公之遺風哉、先生處乎其源、嘗浴乎其遺澤、則洙泗之文物、固藏乎其曾膈、伴奭以勳焉、優游以宅焉夫、然後花之晨、月之夕、詩賦暢懷、杯樽濯魄、乃其縹緲之烟霞、幽邃之泉石、固天真之佳興、而心神無所不適也、願吾從先生而問鞠之遺迹也、

謁正觀公墓

白雲城下菊川東、樹竹蕭然古梵宮、中有先公墓碣在、莓苔蒼々埃塵空、我登城上悲荒蕪、還謁墓前仰勳功、維昔天皇蒙塵日、我公累世藩王室、赴々武時既捐身、桓々武重亦委質、共是皇室之干城、義軍忠戰舉非一、斯公之武尤有光、志操凜然犯秋霜、謀隨孫吳多秘術、名並楠新共鷹揚、火子昆弟永錫類、挫賊驅盜事勤王、遠馳英風驚異土、終奉正朔爲盟主、遺策綿々雖不窮、無奈盛衰有常數、爾來但恨蕭牆內、紛紜爭肉豺兼虎、臺謝一朝委塵氛、原田數頃入耕耘、箭筈峰頭懸弦月、鳳儀山上擁浮雲、騷人相遇談舊事、廢寺秋風怨恨聞、

丙午正月二十二日大雪發熊城還故山

中原拜年值春寒、欲還故山雪漫々、由來輕侮春日雪、數十里程何有難、足著草鞋手擎傘、飄然容易

發城端、霏微始疑梅花落、繽紛更作柳絮看、仰見若席又如鷲、群飛亂點解委路、路上泥濘不易行、或疑雨雪妬我步、雲母店前稍凝華、王兔溪邊全積素、倏忽道路如蹈步、行脚始忘泥濘若、俄然風伯出嚴令、千山欲拔萬木譁、千山萬木黯不膽、吹落雪片碎纖々、前後渺茫人不見、凜々但覺風威尖、此時縮傘僅容首、肩背猶集水晶鹽、水晶鹽光畫如月、宛轉隨身白銀蟾、既過堀川行數里、始得羽田賣茶檐、賣茶檐中又賣酒、往來憩休人所狃、吾有謹心雖絕飲、今日此時何得守、爲禦寒疾未全憂、一酌僅酌小半斗、猶且探囊舖一飯、腹中之養於是厚、身體溫々如重繭、意氣揚々足亦轉、出戶向北奮然行、雪雰々兮風颺々、須臾寒威又透肌、杜康之力何得久、此時平地不啻力、中道既已沒膝膈、寒裳恰似涉銀河、顧身更非乘搓客、但疑此地非人間、何處草木不潔白、大池原頭瓊瑤凝、辨天山下寶王積、目隄所觸渾嬋妍、自憐此行類游仙、難何行脚漸已憊、努力促步道不前、鳥巢村前鳥未宿、啾々喚飢飛野邊、鹽浸坂下如鹽雪、疾風吹捲浸水田、誰知坂名不空立、偶假雨雪義始全、黑松村上松不黑、棲鶴悉是垂白翼、縱非天仙宮中看、封得姑射真人色、多少景勝空經過、欲作詩篇缺翰墨、時有一漢自後來、追隨與我道不減、形貌虺茸被草苦、恰似山中似奪衣賊、借問大夫何處之、告言歸去菊水北、菊水之北又何人、且語我居隣村民、此民平素不相識、今日相遇始相親、共語今朝靡微雪、何圖終日若此頻、大夫從來雖有膽、此行何人遂巡巡、自今相伴共得力、又恐中道到日昃、玲瓏縱有不夜光、亡洋寧莫失路惑、田嶼村中業已過、坂井原上又可憶、張々愈行雪愈深、半素陷路悉滿塞、

原野一帶無高低、欲蹈正路亦何得、原上風拂雪墜塗、臥間菜麥或未匿、遂上原上蹈其淺、猶躡屣屢屢顛覆、險阻艱難備甚之、漸至我鄉菊水側、菊水渡橋有村閭、同伴民所結廬、從是分手又獨行、漁樵斷故蕭疎、直行東指數百步、叢爾一村即吾居、吾居今日何在、妻孥卜歸坐相待、時拂雪衣多戶入、袂下落花粉催々、妻孥狼狽起慰勞、且喜中道無凍餒、直解草鞋脫衣裳、庭內早已設浴湯、浴湯溫々久沈體、朝來寒苦始得忘、出湯著袍神稍憊、夕餐僅舖終就床、夢魂猶惹山陰興、髣髴乘舟迷溪傍、

□城野靜軒

通稱は彌三次靜軒と號す、隈府町の人書を能くし研磋大に努むる所あり、其の技益々進み旁ら武術に達す。寛政十二年に生れ明治六年に卒す。年七十四。

城野充通稱彌三次、號靜軒、肥後國菊池郡人也、幼好學賦詩屬文、最善書、及長慨然欲以成名、家素業商、充通乃委產於子弟、從事於學、始以雪山爲法、中喜衡山、後深慕王右軍、誓得其神髓、以自慊焉、反覆臨摹終日不捲、人或慮其致病、諫之不聽、性頗嗜酒、然未曾及亂、必微醺而止、乃書又甚愛山水信足跋涉、所至諷詠、欣然自適歸家乃書、與人語相歡則書、宗族相聚盡歡則書、聞鶯鳴則書、聞杜鵑聲則書、望月而書、觀花而書、雪書、霞書、涼書、暖書、皆優於平時書而恨、書寒酷暑不得書恨、風雨晦冥不得書恨、俗客雜沓不得書恨、官室修繕不得書恨諸不得書後、必大書數十字、

字皆活動自呼稱快、如此數十年、書名大發、執贊及門士數百人、遠近來乞書者甚多、或有轉輾得之者、充通戲曰、我書得妙通神、字皆活動自在、無足飛行到人家耳、充通雖既以書成名、亦愧爲文弱迂疎之士、常講武藝、平素務節儉、禁奢靡、以率鄉人、嘗出一策、欲矯風俗厚積倉之儲與鄉士數十人謀、每歲暮春、祭菊池武重武光二公、談話皆爲其故家遺族、慕其流風善政、相共砌磋、因各四分其家歲入、儲蓄其一、名節倉、家有患難者、得取其所自出、凶歲則開倉、恤窮民歷數年風俗大革、一鄉富庶永免飢、荒之患、事聞官、賜倉及衣服以深褒賞之、遂擢爲留主中小姓、十餘中致仕、謝絕世味、一意臨書、老益力、臨死尙書數十字、書畢投筆呼快而斃、時年七十四、

小橋 秀雄 撰

靜軒城野先生碑銘

世之以書法名者、不知幾百千人、率投時好摸明清、自以爲足焉、獨我靜軒翁則不然矣、翁幼好學、尤善書法、初善雪山、次慕衡山、比年三十、奮然決志專學右軍、潛心臨習、手不釋毫者數十年、至老益力、益非得王氏神髓不自慊也、其處身節儉、左右用具多手製而隣里有窮乏者、輒救恤之、家本業商、翁委產於子弟、揮毫餘隙、授讀書演武、以率誘鄉人、晚年官褒其技、擢列中小姓、明治六年癸酉八月二日病沒、享年七十又四、臨書數千部、著作百餘卷、皆藏于家、以其居僻地、聲價未高於海內云、翁姓城野、諱充通、稱彌三次、靜軒其號、世肥後菊池郡人、

著述書目

- 一草露貫珠拾遺 十八冊 安政六年十一月十七日稿就寫本
 一草露貫珠變體 二十一冊 安政七年三月十九日稿就
 一借換字義 一冊
 一原字小識 一冊
 一見聞雜錄 五冊
 一私解論語 四冊
 一以呂波原字 壹冊
 一字原考 六冊
 一論語集句 一冊
 一書學捷徑 一冊
 一私解孟子 四冊
 一日録 弘化年間 二冊
 一日記 嘉永年間 二十五冊

□吉村義節

義節通稱は市次、隈府町吉村氏に來りて家を繼ぎ、明治九年神風黨に與して刑せらる、墓は妙蓮寺内にあり。

吉村義節は敬神黨の同志中にも義烈勇敢を以て推重されたる人物にて、其の平生を觀れば又其の人となりを知るべきなり。吉村は菊池に居住しけるが家いと貧しく萬事不自由勝の生活にて有りしも、武器丈は大事に臨みて後れを取らぬ様常に準備を整へありたり。其の帶刀の如きは外觀の裝飾に頓着せずして全く實用を主として中身は見事の業物なれども短刀は麻繩にて束をまける程の粗末の者なりし由、佩刀せる頃には何時も太刀と脇差との外に右の腰に鹿皮の袋に腰差として短刀を帶し居れり。人に語つて曰く自分は小兵なれば若し敵と組んで組伏せられなば脇差を抜くは困難なれば短刀もて下より敵の横腹を刺さんと思ひ居るなり、小さき刀にて刺したる許にては安心し難けれども二つ三つ抉りたらば宜しからんと以て平生の嗜を知るべし。其の家は養父隱居して別家したれば疊の新調をなす餘裕なく近邊の農家より猫ぶく藁蓆の厚く廣きものを借りて之を布き居りしに、收穫期に及び返戻を要するを以て自ら藁を編み疊の代りとして之を用ひたり、而も此見苦しき室の一隅には鹿皮を布きて机を置き愛翫の書籍を机上に載せ、床には軸物を掛け刀劍を排列せるなど何

處となく古武士の嗜み見えて奥床しかりき、平生和歌を學びしがそは辭世の詠を得んが爲なりと云ひ居たる由なり、其の菊池にあるや平生は身體を練るの手段として農務忙しき時は農家に日雇稼き同様の加勢をなし居りしが、固より雇賃を貰ふには非ず、唯酒さへ飲せて呉れば可しと云ひ居りしを以て、農家には痛く氣の毒がり何れもその高潔の精神に感動して譽めたゝへぬはなかりき、舉兵の前數日吉村は菊池の住宅を出發して熊本に赴かんとし、老祖母と妻とに向ひ明日より用事ありて熊本に赴く筈なるが或は數日間滞在するやも計り難しとて、太刀二振衣類下衣などそれ〴〵準備を命じたり。其時下衣は質入れて家に在らず。妻は大に心配し居たるに、豫ねて氣丈の老祖母は文を觀竊に自分の衣類を質入れて件の下看を受け出し、又鮎など買ひ求め酒肴の用意して其門立を送りたり。老祖母も市次平生の心事を熟知し居る者から此行の尋常ならぬを覺りて斯くは門出を爲さしめし者なるべし。吉村胸中の悦如何なりしぞ、夫より熊本に出て同志の友古田十郎に逢ひ、萬事の手筈を聞き又實兄松井正幹と共に舉兵の事につきて互に激論したりと云ふ、舉兵の當日吉村は京町赤尾口なる親戚手島氏の家に立寄り、今夜は御客として遠方迄行く筈なれば帶一筋貸與へられたし、博多帶の善いならば尙結構なりと諧謔して酒など酌み交はし心許りの訣別を爲して出陣したりと云ふ。後事破れ獄に投ぜらる、その刑せられんとするや辭世を詠じて曰く、

ふり棄てし出にし跡の千草には淋しき秋の風や吹くらん

大丈夫の踏むべき路のきさみちを踏つと千代に語り傳へよ

斯くて髪を櫛り衣裝を整へて徐に立ち出てたるさま、見事にて死を觀る歸するが如しとも評すべき有様なりき。

□畫人吉岡蘇雪

蘇雪名は源四郎、竹迫の人、畫を能くするを以て名あり、文政十二年に生れ明治十年に歿す。通稱源四郎といひ、合志村大字竹迫紺屋業松兵衛の三男にして蘇雪は其雅號なり。幼より繪畫の趣味を有し戯れ遊ぶとき、至る所の地面常に此の漫畫を以て満たされしといふ。嚴照寺住職其奇才を愛し家父に謀りて、菊池村西寺紺屋某に托し繪紋畫の技を學ばしむ、技進むに従つて趣味益々高まり、遂に畫家を以て世に立たんと欲し藩主の繪師矢野宇善の門に入る、修業中熊本市内尾保の養子となり一男を擧げしも故あつて離縁し、矢野氏の門を辭し、東北及中國、四國の各地を遊歴すること五年、歸りて細川侯の繪師となり吉岡姓を賜り五人扶持を拜し帶刀を許さる、妻を迎へて一男二女を擧げ西南の役兵燹に罹り家族を提げて郷里の親戚に依る。官軍竹迫に至るに及び鈴木參謀に従ひ宮崎鹿兒島を遍歴し地圖製作に従事す。亂平ぎて熊本に歸り、遂に病んで歿す。年四十九。

蘇雪性剛膽不羈、事に當るや勇往邁進、毫も人言を顧みず、常に酒を愛し囑を承くるや先づ杯をと

り氣充たざれば容易に筆を執らず、其氣充つるや一氣呵成、紙面忽にして生動すと。

□澁江公毅

名は公毅、通稱治郎助、澁江涪灘の第二子なり。菊池郡及八代郡種山郷の文學教導となる。明治十四年三月十六日歿す。享年五十二。

澁江公毅墓碑銘

菊池之郡、居肥良位、山水清淑、土壤肥沃、其地既靈、往昔菊池氏盛時開府士、崇名教興文學譚禮樂以陶其民、故其流風遺澤、浹浴民心、延及數百歲之久、至於晚近、俊偉魁傑之士、接踵而興、是以其雖偏小、而隱然爲一國之重矣、然其所謂俊偉魁傑之士者、及一旦業成、往々挈家族去鄉里、以不能傳其澤於久遠、是爲可惜也、獨澁江氏、自其曾祖紫陽先生、數業相承教授爲業、其子若弟、或循於德行、或長於文藝、雖人品不一、而要皆以一郡偉人、誘掖後進、則是傳其澤於久遠者、獨不得不推澁江氏、而若公毅君、蓋亦其一也君諱公毅、通稱信一郎、後改治郎之助、更改一郎次、紫陽先生之曾孫、涪灘先生第二子也、兄公溫入繼本宗、君因爲先生次、自幼英敏過人、及長明經義、好文詞、藩命爲菊池郡文藝唱導、後轉八代郡種山郷文學教導師、每歲賜米若干苞、封建既廢、王政中興、明治七年縣以君爲學區取締、當此時、菊池郡未有小學之設、君奔走盡力、爲起數校、實此郷學校之嚆矢

也、君豪邁不羈、矜傲凌物、是以往々不與世合、然恤人窮貧、擲財救之、奔人急難挺身代之、是亦憫人赴義之意、殆發於天性哉、抑其抱負極大、不遭其時、無所展其力、僅得磊落奇偉之名、乃歿哉、君以天保元年正月某日生、明治十四年三月十六日歿、享年五十二、配田尻氏、生二男二女、其長豐彦、次曰良藏、豐彦嗣君後、君門人追其德、欲乞余文以銘其碑、余乃叙其梗概、而系之以銘、銘曰、山川流峙、地雄西陲、哲人既逝、流風猶遺、孰執木鐸、厩有江氏、世循儒術、闔郷羽儀、推君卓犖、生不遭時、文教有績、可以銘碑、

菊池懷古

澁江公毅

節鉞東西懲虎狼、趙々兵馬獨勤王、翠楠豈只堪寒雨、黃菊由來傲肅霜、靈見寶刀氷一片、歌留錦繡血三行、杏壇秋老絃聲絕、認得當年孔子堂、
一、公毅の磊落天性に出づ、一日縣の山林官某隈府町某家に宿す。會々公毅と飲す。某驕慢矜傲の色あり。公毅曰汝は草木を統率す余は萬物の靈長たらん人を訓育し、陛下の臣民を教導するものなりと、遂に上座に著席して、平然たりしといふ。

□橋原東臯

名は知定、字は伯紹、東臯と號し、助之進々稱す。列士班、藩の文學たり。明治十五年七月二

十五日歿す。享年五十一。匏田郡龍田山に葬る。

東阜先生櫛原墓碑銘

古人稱、道德事業文章、巨三不朽、而輒近以事功文辭著、固不乏人、獨以德行稱者、寥寥無聞焉、若余友櫛原君、其庶幾乎、君諱知定、字伯紹號東阜、通稱助之進、肥後菊池人、考諱矯、字伯立、妣同族某女、伯立起寒微、以文學優等、爲熊本藩儒員、列于士班、其沒也君尙、幼蔭未滿、不得襲士班、入木下櫛村先生塾、未數歲、學大進、權入藩塾、安政五年秋、藩命遊學江戸、以母病歸郷、藩命誘掖諸生、給俸若干、叙士班、慶應三年七月、補訓導、明治四年廢藩置縣、學校亦廢、君因解職絕意於仕進、開家塾、授徒、十三年春、熊本縣令舉君爲中學校長、固辭不聽、乃奉職、十五年、二月獲病、遂沒于熊本白河上家、實七月二十五日也、距其生天保二年三月三日、享年五十一、葬龍田山先塋、君凡六娶、前三氏未有子而出、池邊氏生一女、而離婚、繼娶光永氏、生男女各一而沒、男曰孫藏、後娶大島氏、生二女君爲人溫厚沖和、未嘗與物忤、然不枉己阿人、能操中正、終始不易、學究經史、兼善詩文、又能書、有詩文稿若干卷、罹兵燹、僅存二卷、事母至孝、家雖貧、奉養無不盡、池邊氏以上四氏、皆與君相諧、唯以不適母意去之、性嗜酒、客至必命杯、使盡歡而去、是以人皆樂過君家、而意中能辨其淑惹、故佞人邪士、則不敢至、君篤于朋友親族、能恤人之患難、余曩在郷、構宅無君憐、時猶弱冠、始與君相識、屢奉教、家事亦就謀、誼實兼師友、丁丑西南之亂、余羈

盲東京、老母幼妹在家、避亂于姻戚家、意未能安、君乃招寓其家、情意周浹、幾同骨肉、君待人之厚、概是類也、余觀辯村先生門下、前後陞顯職、及以文章經濟氣節、顯於世者、不下數十百人、而德行如君、實無比、假使君少枉其志操奔趨世途、攀援舊故、則富貴固非難得、而君不屑之、轆軻以終、是君之所以爲君、而其以德行稱、亦在茲也哉、君沒之明年、門人故舊、共謀建碑、屬銘于余、余與君相知最深、不可以不文辭、乃序其行實梗概、系以銘、

節彼蘇山、旣德比崇、白水湜々、旣心則固、弗矯弗輻、自然守中、薰陶之厚、以冀文翁、圭窠筆戶、樂也融々、雖無口仕、德聲永隆、

鎌田景弼撰

原東阜先生履歷略

先生名は知定姓は櫛原東阜と號す、菊池人父漆潭先生儒を以て家を興し府學訓導となる嘉永二年九月病を以て没す先生二人扶持下し置かれ諸役人段に召し出され山口二九郎支配となる四年十一月學問詩文相進む旨にて講堂に於て總教を金子二百疋下置る十二月學資料とし毎歲官札貳百五拾目下さる旨申渡さる安政元年二月時習館居寮仰付らる四年正月學問不相替出精詩文も出精の旨講堂に於て總教より申渡さる五年戊午九月江戸表遊學命せらる林家は勿論其余の儒者へも廣く研究致し候様仰付られ十月江戸へ着十一月學問多年出精相進詩文も出精相進候段賞せられ龍口御邸に於て櫻御紋付

麻上下一具下置る萬延元年庚申正月昌平阪學問所書生寮詩文掛命せらる旨聖堂御坐敷に於て御儒者佐藤新九郎より申渡され骨折料として中元歳除金子三百疋宛渡置る六月江戸游學中格合士席に准せられ尤學問に付ての場所に限り候儀に付年頭節句の御禮其常の儀は持前の通衣服の儀は御禮式の外士席の服不苦候旨助教築瀬兵衛より書中を以申越され候十月書生寮舎長命せらる旨聖堂御坐敷に於て御儒者佐藤新九郎より申渡三人扶持渡置かる文久元年七月老母病氣に付早々罷下候様御達有之八月下著十月一人扶持増下さる御心附として毎歳米十俵宛下置れ時習館居寮仰付られ寮中詩文章の世話致候様仰付らる尤格合の儀は士席に准せらる二年壬戌十二月居寮御免に成り館内外生詩文章相誘且會讀をも相誘候様仰付らる右に付御心附として毎歳銀五枚宛渡下さる慶應元年乙丑四月學問數年出精致し學業相進候に付米十俵増下さる五月御用の筋有之四國筋へ差越され七月歸國三年丁卯七月時習館訓導助勤當分仰付らる八月助教を助け兩教家塾生の儀世話致候様仰付らる十二月御留守居御中小姓仰付らる御切米十五石猶二人扶持の御足下置れ勤方今迄の通學校方御奉行觸座席御留守居御中小姓上坐に附置る明治元年戊辰二月訓導當前の勤向は御免遊され講堂并兩御殿講釋且詩文章倡方專相勤候様仰付らる四月官塾取建同月落成三年庚午七月八日學校改正に付當職免せらる出精相勤候に付別段を以て留守中小姓に仰付らる同月御達に付保次と改^{是迄通稱}六年癸酉名を知定と改む七年甲戌六月温古堂教員申付らる九年丙子東京師範教科熟知として上京申付らる四月千葉中學校二

等教授申付らる九月依願免職十年丁丑一月千葉中學校二等教授命せらる五月臨時編修御用掛申付らる準八等屬七月任熊本縣七等屬七月縣下兵燹に罹候者へ爲救助十五圓差出候賞として木杯一個下賜せらる九月鹿兒島逆徒暴舉己來勵精盡力候段賞せられ金參拾圓下賜せらる十一年戊寅七月熊本縣地誌編製申付らる九月兼學務課擔任十一月爲教授火金曜日師範學校へ出頭申付らる十二年己卯一月師範學校生徒爲教授毎日一時間出校申付らる二月學務課擔任申付らる七月一日熊本中學校教授方兼副長申付らる月給金參拾圓當分師範學校教授方申付らる十三年庚辰一月鹿兒島賊徒御征討の際盡力候に付拾五圓賞賜せらる同月中學校校長命せらる教授方故四月依願中學校校長差免副校長命せらる教授方如故七月副校長差免教授方專務申付らる月給金參拾五圓副校長の心得を以て校務取扱候様御達八月中學校長兼教授方申付らる月給四拾圓十二月依願中學校校長差免教授方專務十四年辛巳十月任熊本縣熊本中學校教諭四拾圓十五年壬午二月二十四日病に罹り七月二十五日家に歿す年五十一龍田山先塋の次に葬る歿後に熊本中學校創設爾來數十年教授に従事し非常勉勵其効績不少候に付爲追賞頭書の金員下賜 二十七圓

橫島訪池邊某

梶原東阜

元亮未除淮海氣、壯心寂寞託荒濱、且追明哲耽耕讀、誰識英雄有屈伸、芳艸初蒸青野雨、^{青野波瀾}郵名波瀾不競紫溟春、江湖吾亦營簑笠、只賴君家爲近隣、

乙亥一月送鎌田高見松浦諸友赴東京

懇々政化入春王、畿甸正宜觀國光、呼友遷鶯出幽谷、空群良馬上康莊、提携爲客無傷客、雖紫居鄉不當鄉、往矣蛟龍得雨日、窮鱗在轍莫相忘、

□大矢野宜春

名は種徳、字は子克、宜春と號す。菊池郡大津町の人、明治十五年七月十五日歿す。享年五十五。大津町先塋の次に葬る。

大矢野宜春先生墓碑銘

君諱種徳、字子克、稱格次、大矢野其氏、宜春其號、東肥大津郷人、考諱種親、府君實相馬氏、妣西岡氏、其第三子也、文政戊子十一月十七日以降、幼志于學、從郷先生澁江吉川二氏、年十七、學我先考、爲人方正、慷慨進取、目光炯々射人、在門五季、汎愛發蒙、後進倚頼、居業孜孜不遺餘力、夜以繼日、遂患眼去、先人爲作字說以贈之、去則師木下先生、再來倚先人、又去遊于木下氏、其於學無所不悉心焉矣、壯歲營一書齋、著作自樂、專教授子弟、明治維新之始、公武不協、輿論紛芸、時君年既強、譽重一邦、選遊于昌平學、旁兼諸藩交接、俸廩稱之、其在寮中、試經義質問掛、既權于中寮長、給年俸二百石、居二季、學由是大進、遊道益博、初郷文藝指南方、後任熊本師範學校兼

監事、各地小學、歲無虛歲、日無虛日、入則估畢、出則伊吾、循々然不遺細物、其教學自任如是、丁丑之役、以君盡力于國事、歲之己卯、褒賜金二十圓、所著孝經壁牒、及參註、孟文私記、故言溫故、孟子困知錄、國語參註、毛詩妄言等、藏于家、蓋皆商榷援據、据摭遺逸不鮮矣、其學宗我家學、勉細釋經傳、不喜浩博、其文質而不俚、片言隻字、必膠陳迹、其論平夷、莫有激詭抑抗之態焉、其筆解縷分、時或失諸鈞索、蓋亦其性爲然、明治十有五年、七月十五日卒、年五十五、配毛利氏、生四男三女、伯仲叔早夭、季常吉、長女適西岡氏、二女猶幼、及建石使其門友來乞余文、夫東肥之廣、漠都之櫛比、鴻匠鉅儒不疑術何限、而遠徵諸桓、蓋君不忘其初之德、其或淪髓于族子弟之所致歟、君長於余二歲、匪紆之交、沐其薰陶也大矣、豈敢辭不敏、修飾狀所言、屬以余所知、使勸諸其碑陰、

辱知北筑 龜井 桓 君 珪 甫 撰
辱友 吉川 管子 嘔書

大矢野宜春略歷

天保七年正月合志郡大津郷文藝誘方吉川弘へ入門漢學修業同十二年二月より菊池郡文藝指南方澁江忠多へ親灸同十五年七月に至る同年八月より筑前福岡龜井鏡次郎へ親灸嘉永三年正月に至る同年五月より舊藩學校訓導木下真太郎へ親灸同五年二月に至る同年閏二月より龜井へ再遊同六年二月に至る

る同年七月木下眞太郎へ再遊同七年二月に至る其三月大津郷文藝指南方奉職文久元年九月辭表著述を事とす明治元年十一月關東遊學被命一式造用米何石五口米月金五兩他藩交接必附月八兩同二年二月大學へ寄宿五月在寮中御雇を以て寮中經義質問掛被申付月五兩七月寮中御用掛へ轉任八月大學中寮長拜令年給米二百石同三年二月辭表三月歸國四年正月合志郡大津郷社祠掌拜命二月辭表同七年六月大津郷陣内小學校教員奉職月給五圓下等生六級迄傳習同八年三月師範學校教員拜命月給八圓同九年四月師範學校監事兼務六月辭表同月合志郡竹迫學校教員拜命月給六圓同十一年五月辭表上等生二級迄傳習八月一級授業生拜命阿蘇在勤月給拾圓上等生一級迄傳習同十二年十一月大津小學へ轉校月給拾圓七拾五錢高等生三級迄傳習明治十三年三月鹿兒島賊徒御征討之際盡力候に付爲其賞金貳拾圓下賜せらる

右先生自記のものを謄寫せしものなり

明治四十三年三月一日

合志東部高等小學校に於て

高橋小太郎

逸事

一、先生の父を大矢野種親と云ふに非常なる書物買ひずきて近邊に住する松岡某と云ふ人と競争的

に書物を集めたそれ其藏書は夥しきもので先生勉學の資に供せしと云ふ

一、先生は非常なる勤勉家で幼にして同郷の吉川弘記について學ばれし頃までは遲鈍と稱せられし程なりしに大なる勤勉は遂に大儒となれり

一、先生年十七にして筑前福岡なる龜井南溟の門に學び居ること五年其間一夕も帶を解て寢しことなし常に机に憑て眠り居れり五年の後業成り家に歸りし夜母堂に向ひ五年振りに帶を解て寢ますと語れりと云ふ

一、筑前にありし頃南溟始め門生一同打連て近郊の瀑布觀に行けり先生も亦之に加り居りしが歸途など先生の居らざりしに氣付き南溟始め或は川に陥りしにあらずやと心配し搜索せしに瀑の下なる岩上に佇み居るを見一同心配して捜せしことを先生に云ひしに先生云へらく鯉の瀑上りと云つて鯉さへ此の激き瀑を上るとすれば吾々萬物の長たるものが志の成らんと云ふことはあるまいと鯉に感じて之れを觀て居りしと答へしと

一、成業の後郷里に於て私塾を開き専ら子弟を教授されしが其門に集るものは多は百二三十に及びたり朝は必ず五時より燈火を用ひ會讀を始め一日に三日の會あり門生中如何なる初歩のものも先生必ず自ら素讀を授け決して門生に托せしことなし夜九時頃會讀し後は必ず著述にかゝれり就寢は毎夜深更になりしと又攝生に注意し毎日三餐の後は田圃の間を散策せりと云ふ

一、先生選ばれて昇平齋に遊ぶや中寮長となり從五位下に叙せられ年俸二百石を給せらる然れども其古學派なるを以て程朱派に忌まれ志を得ずして遂に歸國せり後熊本師範學校に入りしも同じく學派上都合惡しかりしと云ふ

一、當時大津地方に吉川原南澁江晚香及先生の三人あり世人稱して吉川の才澁江の篤實大矢野の學力と云へり

一、先生は稀有の藏書家にして書箱七八十もあり同形にして正しく排列せられ土用干の時の如きは十四五人かゝりて四五日も費したりと云ふ

家塾

一、名稱 泚水

一、位置 菊池郡大津町

一、學科 漢學

一、科目 孝經 四書 五經 左傳 日本外史 通鑑 綱鑑 史記等

著述書目

孝經壁牒及參註 孟文私記 故言溫故 孟子困知錄 論語參註 毛詩妄言

□高山蘭痴

幼名は謙太、木下業廣の門に入りて句讀を受く、後熊本なる白木伯軒に就きて漢書を學ぶ、慶應年間家塾を郷里赤星に開く、笈を負ふて來り學ぶもの百數十人に及ぶ、既にして菊池郡教導となり毎月三日の日御用宅に出て、書を講ず、後御中小姓に召出され三人扶持を徐せられ帶刀を許さる、明治五年病を得て退隱し、明治十六年十一月廿九日病を以て歿す、享年六十八、墓碑銘等參考資料とすべきものなきを遺憾とす

過屢門遺趾有感作

有無不必問師名、復古職由是此兵、趾絕屢門春寂々、鶯花何處弔元衛、

高津曉望

仁德祠高不可驕、登臨扶杖倚嶮嶠、春寒圍繞東西寺、曉霧晴分四百橋、

嵐山

衣香扇影如無地、歌曲絃聲半是舟、借問看花何處好、高橋第一二三樓、

□池田正賢

諱は正賢、才平と稱し、俳號を鴨川亭里潛友花仙と曰ふ。加茂川村の人。明治二十四年八月十七日歿す。享年七十八。僧諡にて達道院と曰ふ。加茂川村先塋の次に葬る。

池田正賢墓碑銘

君諱正賢、通稱才平、池田氏、考田勘七、毗原山氏、東肥菊池之人也、自幼從父之志、用力於吏事、自文政十一年、至明治四年、在勤凡四十四年、猶一日未嘗厭倦、其間自筆生作庄屋、遂累進作河原會所手代、傍兼手永監督、且蒙出田零落村救起之任、其他受田圃山林之檢地、荒壤之開墾、堤防修築之命、用心盡力、効勞頗多矣、官下例米之外、屢賜金錢、賞之、當維新之際、一般解職之日、君又撰作菊池郷里正、最有等才、執贊藩算學師手島翁之門、勉勵數年、術大進、至曆學測量術、皆得極意、傳頗究其蘊云、官命同門之倡導、誘掖懇到、嘉永六年十一月、賜郡宰直觸席、爾後益不怠、多年諄々善誘、所居之地、有裨益于人不少、慶應三年八月、遂進地士席、及其門者、爲二百八十人、寘精勵以身率人、故居官同僚相和、臨邑民人服從、又存風雅之心、有公暇則嗜俳諧、號曰鴨川亭里、潛濃州之宗匠、托君以文臺之主、曰友花仙、臨終有句曰、鴨水之水登冷計理死出之旅、君以文化十一年正月十三日生、以明治二十四年八月十七日沒、春秋七十八、僧諡曰達道院釋白蓮、娶田島氏、生一女一男、女夭、男曰眞治、亦有算才、善繼父志、前爲熊本濟々疊數學教員、今轉于高等菊池小學校、君可以瞑也、今茲門人相謀建碑、請文于余、因而係以銘、銘曰、

究九數蘊、諄々教育、茲興家門、永遺嘉福、

澁江公木撰

池田正賢略歷

- 一、文政八年正月算術測量曆術師役熊本藩士手島宇平太に入門天保四同人嫡子師役手島五左衛門より目錄相傳同十年六月天元術極意並測量術目錄傳授同十五年演段免許曆術測量術共皆傳
- 一、安政五年十二月村井流砲火術中段及砲火術類附中段目錄相傳
- 一、嘉永六年十一月算學曆學測量術心掛能く出精いたし免許等相濟所柄に於て同門倡方も行届候旨にて御郡代直觸被仰付其後不相替出精いたし同門倡方も手厚く行届所柄爲合に相成候旨にて慶應三年八月地士に進席被仰付依御改革士族に編入相成明治七年九月依願隱居被仰付
- 一、弘化三年算學測量格別出精いたし候旨にて壹貫文賞賜せらる
- 一、明治二十四年五月濃陽宗匠夢外仙當地游歴の節故宗龍の跡を繼ぎ當地文臺の主と定めらる

辭世

鴨川の水と冷へけり死出の旅

□城子德

名は翼、子徳は其の號なり。山鹿有働氏男、長じて菊池村なる城充の家を繼ぎ、醫業の傍ら塾生に教ふ。性謹嚴頗る郷人に尊敬せらる。天保四年に生れ、明治廿五年卒す。年六十。

君諱由教、字子徳、通稱翼、號菊蔭、山鹿町有働泰庵之弟也、考由道君以無男、養爲子、以女配之、明治庚午考逝矣、十二月嗣家、食祿如故、初由道君以學術精究、官特抽爲外班官醫、任醫學助講、與余爲同僚、來住於城下、屢相往來、以此時初識君、君爲人溫厚寡言、能奉家學、勤勉无懈、於是代家嚴治療患者、教授生徒、子弟受薰陶者、無慮百八十餘人、明治丙午、興馬所小學校教之、無子養河崎章爲子、今承家、君以天保四年八月七日生、以明治廿五年八月十九日病歿、享年六十、葬之先塋、作之銘曰、

承嗣他姓、繼續箕裘、學能教育、術尤情修、神之攸安、佳城爰休、

明治二十七年八月

行德直溫撰並書

□吉川原南

名は菅根、字は子嘖、原南と號す。菊池郡原水の人、明治廿三年七月十七日逝す。享年六十有七。原水村先塋の域に葬る。

原南吉川先生碑銘

嗚呼余畏友原南居之歿也。既經十星霜矣、曩門人來、囑余以墓銘、而因循至今日者、蓋有追懷當時不忍援筆者焉。元治中、余寓於津南、與君同爲鄉文學、時相往來、論文講道、有疑則相質焉、有過則必規焉、情如骨肉、余歸北里也、再不得訪君、而君罹病溘逝、遂背平生之友誼、幽冥之中、每思之、遺憾不能自禁、其何以忍銘其墓哉、頃門人屢促前囑、於是序其梗概、曰君吉川氏、諱菅根、字子嘖、號原南、實愿恭先生長子也、曩祖宗雪、自開醫業至君八世、皆以醫于世矣、世住於肥之合志郡南方郎、君幼而好學、年甫十歲、入于余家翁之塾、後執贄於藩醫田中先生之門、又入於再春館、讀和漢古今醫書、究其濫奧矣、爾來涉獵經史、通覽諸子百家書、賦詩屬文、最善書、天保十四年九月、嗣父遺蹟、班郡宰直觸席、嘉永元年、開醫業、乞治者日衆、安政二年十一月、進班御郡醫師席同三年拜合志郡大津郷文藝唱方、傍開家塾、用力於教育、慶應二年十一月、昇班御目見師席、明治二年受藩命、遊學西京、敲典藥頭高階從五位門、吐平生之抱負、論治術、質疑團、頗有所得、歸來遠近、乞治者益夥矣、既大勢一變、王政維新、百度更張、及小學校設立之令下也、居與有志、謀請官以家塾、假充小學校、推君爲教師、旁薰陶青年子弟、七年七月、公立原水小學校竣矣、生徒充盈、校運日盛、八年九月、以授業拔群之效、賜若干金、同月轉學區取締、九年二月、復於原水校教員、同十月、官賜金以賞教育之懇篤、當十年薩匪之亂起、士民往々誤向背、君唱大義於其間、竊與志士相謀、將有所爲、既而匪徒知之、搜索者甚急、君潛伏得免、聞官軍之至於竹迫、奮躍挺身、嚮導奔

走、盡力於王師、官喜其功勞、賜金賞之、亂定也、復職原水校如故、十四年更開大原義塾、從是問鄉之內外、學徒負笈者益夥矣、君學以報國爲本、貴實業、喜農桑、一鄉靡然嚮風、於其家庭怡々、兄弟相集、則談必及報國之事、是以二弟惟清以醫救人、季弟寬治以武報國、如彼丁丑之亂、帥鄉之有志隊、致身于王師、爲衆議院議員、以盡心邦家、莫不胚胎于君之教誨焉、君爲人豁達寡默、處事能斷、毅然有烈士之風、雖當羽檄奔走之地、彈丸雨注之衝、有泰然不動之氣象、然接人也、醇々能得人之歡心、始交也殆如無風趣、人及其久、則漸生淡雅無限之味矣、余來津陽也、君與大矢野宜春友善、君齒德最高、宜春學殖深邃、余以少壯魯鈍、交其間、追隨會范、吐露胸臆、馳驅文壇、上下議論、有暇則相携逍遙于山水之間、呼酒賦詩、超然作塵外之遊、不復知有人間榮辱之事也、廿一年春、君頓罹靡證、藥餌無驗、廿三年七月十七日遂易贊焉、享年六十有七、葬原水先塋之域、君娶三島氏、生五男五女、長不二助天、次貴三爲嗣、三萬里、四三雄天、五至海出繼一萬田氏、二女嫁小島氏、餘皆先歿、嗚呼君與宜春既死、余獨保餘喘、忍而銘君墓、豈不痛哉、銘曰、

嗚呼碩德、嗚呼良醫、教化治術、人服衆推、弟子如雲、俗變風移、存也鄉盛、亡也鄉衰、彼蒼者天、何奪名師、

吉川原南略歷

澁江 公木 撰

- 一、天保十四年九月父の遺蹟を嗣ぎ御郡代直觸となり嘉永元年醫業を開く治をこふもの日に衆く安政二年十一月郡醫師並席に造みたり
- 一、安政三年合志郡大津郷文藝倡方を拜し傍家塾を開き力を教育に用ふ是を桂陰學舎の創始とす且大津郷舊會所に於て郷中青年輩を集め經書を講じたり
- 一、慶應改元明治となり大勢一變百度更張小學校設立の令下るに及び有志と謀り官に請ひ家塾を以て小學校に充て氏推されて教師となり傍青年子弟を薰陶す後學區取締を拜するに至れり
- 一、明治十年薩人の亂起り士民徒に向背を誤る氏大義を其間に唱へ志士と相謀り力を王師に盡す官亦大に其功勞を嘉賞せり
- 一、同十一年十月原水小學校幹事拜命戰亂の後を受け益教育の必要を感じ爾來再び小學校教育に盡瘁せり
- 一、同十四年更に大原義塾を開く是より四方笈を負ふもの益夥し氏は實に報國を以て本と爲し實業を貴む農桑を奨むるを以て大方針となして同二十三年七月贊を易ふるに至る迄三十有五年の久しき終始一貫實踐躬行を以て子弟を指導せり

丁丑戰亂日誌 節錄

二月十九日 實弟紫藤寬治等と縣廳守衛等の事を議し同日午後四時同人及安藤庄太郎出廳す同時長

男吉川貴三を原水村の内元鐵砲小路村に遣し服部知信に寛治等出應の意を告げ且つ該村士族の方向を誤らざることなきを説かしむ

二月二十日 近村士族を原水校に會同し敵愾の氣を皇張せんことを談じ總急事に應せんことを盟ふ
二月二十二日 再び貴三を知信に遣し前件を談ぜしむ一村の士族稍方向を定む惜哉山東佐野等に盡感せられ知信の盡力一時に水泡に歸す

三月十三日 總督親王の檄文を得又舊知事代細川休馬列を諭すの書を併せて朋友親戚に頒つ

三月二十三日 菊池郡居住九等警部高木靜三竊に人を遣して王師を稿ふゆへんを議せんことを乞ふ此際賊菅等を襲捕せんことを議すること彌急にして身を動かす能はず故に女婿國崎寛齋及び二男吉川萬里を遣す道梗して達する能はず辛ふじて空しく歸る

三月廿四日 野々島の賊該村の役夫を徵す菅賊の爲めに驅使せらるゝを愧ぢ獨り出さず里人賊の該村を焦土にせんことを恐れ恟々怨言す

四月二日 已を得ず人を雇ひ出京町口に遣し兼て賊の虚實を伺はしむ此日賊は米を上下鍋村に遷し雜穀を徳玉山室の兩地に輸す

四月十三日 五小區小合志學校教員横田五十城田島村より御本營の命を蒙り大津近傍の探偵として來り地圖及木山町賊の動止を探偵せんことを依頼す

四月十四日 岡崎寛齋を木山町に遣し具に探偵せしむ此日木山接近の赤井村邊戰爭木山の賊將さに退去せんとする兆あり是より先き枯木町莊吉なるもの城中より密旨を受けて歸る由を横田に告ぐ

四月十五日 横田莊吉を伴ふて田島に歸る

四月十七日 午後十一時頃三小區戸長紫藤尙義菅が潜伏する窖中に來り大津の賊徒菅等を縛斬せんとする由を告ぐ同日午前七時今村新次大津町より竊に來り賊本日十二時を以て菅等を縛せんと議す工藤清實勉めて其期を慢にせんことを謀る速かに處分すべしと告ぐ紫藤寛治又竹迫町御本營に投ず人を馳せて賊を避けんことを促す因て先づ婦女を隣村に逃れしめ二子貴三萬里と出沒し賊の舉動を偵ふ

四月十八日 午後十一時柳水村彦太郎の潜所に至る

四月十九日 古閑原士族を同處に招き戰地教導のことを示談す該地の戰教導地理を諳ぜざるを以てなり又同村十戸長來りて賊の抵當米に迫る由を告げ其所置を問ふ因て其期を緩にする策を授けて午前九時彦太郎と同じく竹迫町參謀部に出頭顧問に依て地勢の得失且つ白川を渡るの策を献ず又地圖を訂正す

四月二十日 枯木馬場柳水入道水等の各村に橋材の手當を命じ白川沿村の賊を探偵し午後七時御本營に歸り上申す此日菅が村里兵燹に罹る

四月二十一日 參謀の内旨を以て鐵砲小路村賊に應ずるもの、同所淨念寺に會し

上旨を感戴し自首伏罪せしめ子弟の踪跡を搜索し面縛して罪を乞ふことを諭し總代として父兄の内一兩名を伴ひ枯木町出張の將校に上申す淨念寺の住僧覺然も又與る

四月二十二日 十一大區高森菅尾馬見原野尻及鹿兒島の内日向國高千穂九大區矢部川の口村の地理に熟したる者を各地の探偵に用ひんことを命ぜらる。大津驛に至り其人を求め平山大尉高木警部と各地の形勢を議す

四月二十三日 御領村御本營に上申す兵燹後雨露を凌ぐの便も之れなきにより暇を賜はり此節は別段の盡力追て筋により御沙汰も之れあるべき旨參謀より懇命を蒙り歸宿す

五月十七日 矢部表より高木警部熊本鎮臺鈴木中尉の内命を以て有志の輩を募る因て同志を會し協議す

五月二十一日 前後數名出張管は止りて後事を周旋す右出張の名籍は戸長によりて上申す

六十歳元旦

吉 川 原 南

六十迎新耳尙逆、赤拳欲排狂風瀾、他時涅髮君休道、伍否庚寅一議壇、

□紫藤寬治

名は寬治、姓は紫藤、菊池郡原水村の人、衆議院議員たり。明治三十年六月十五日歿す享年六。十有六原水村先塋の城に葬る。

紫藤寬治翁墓碣碑

世降俗微、道義掃地、名利之所在、同氣胡越、至誠殉公、不復違室家、能蹈古道、如我紫藤翁者、舉世果幾人、翁本姓吉川氏、通稱寬治、家世業醫、考名愿恭、妣多田隈氏、以天保三年三月、生於東肥合志郡原水村、後出嗣紫藤氏、翁爲人魁偉、沈寡寡言、自可幼失父、受教伯兄、最善武術、年齒未壯、受藩命、設道場于自邸、以率郊里鄉黨、嘉永安政以來、尊王佐幕之論與攘夷開港之說囂々、傾朝野、物情騷然、肥藩公子、以文久三年九月入觀京師、翁蹶然奮起、督鄉士扈焉、明年八月、奉命振旅于小倉、當是時、危機愈熟、越慶應元年、伏見鳥羽之變起、列藩戒嚴、公子督兵、從京師向江戸、翁復扈之、十一月軍下總、事平從歸、王政維新、擢任津久禮村里正、此地習俗陋惡、稱最難治、翁夙有所見、自毀第宅、設學校、於是教化大行、閭鄉革面矣、既而廢藩置縣、百度更張、翁徐觀天下趨勢、與同志士、私設疊舍、教年少子弟、尋任學區取締、專從事教育、官屢賜金賞之、明治十年、西鄉隆盛大舉圍熊本城、翁糾合志士、屬官軍、轉戰于豐日隅薩之間、梳硝煙沐彈雨、及城山陷凱旋焉、司令官谷干城、特賞其勤勞、官亦厚資金、旌其勳功、人或有擬翁顯職、而辭不就、同十三年之交、政論鼎沸、危激狂躁、動至大權、翁憂其誤家邦、投資誘子弟與伯兄、創大原義塾、大發揮國

體綱常、尋爲縣會議員、當常置委員之撰、侃々諤々執掌縣治者、約八年、同二十三年、有帝國會議之設也、翁首撰爲衆議院議員、爾來當撰、兼拜馬匹調查委員、以老餘之軀、祁寒酷熱、夙夜匪懈、鞠躬盡瘁、是日不足、凡明治十三年以降、投資於公事、擲躬於國家、不復顧家產、一意殉公、殆不惜身命、而名利之區、顯要之地、務避之、翁常謂、我國俗齡達六七旬、則告老不復視世事、奚悻之甚者也、吾惟蓋棺而後告老而已、是以振々厥子、巍然成立、世謂紫藤氏有子矣、同三十年在東都獲病、五月歸養于家、六月十五日、遂啓手足矣、春秋六十有六、葬于原水先塋之次、翁娶相馬氏、舉六男四女、長猛嗣、執世業有名、次章就官、次毅征清之役戰歿、次喜四郎、次文平共天、季靖、專督家政、長女次女亦天、次翼適西村琢、次堅盤歸我、願海內知名之士、知翁者其數何限、銘翁墓者必有其人也、然翁常惡名聞過情、余故不自量、敢銘其碣、曰

心既殉公、豈敢計功、身既許國、何論窮通、寒々厥節、克致匪躬、矮々厥氣、還盛泮宮、至誠所感、上下望風、名聲所及、永世无窮、矧斯馨德、仰之愈崇、

明治三十二年六月

武藤虎太謹撰

紫藤寬治略歷

一、父は吉川氏名は愿恭家世々醫を業とす最も漢學に長じ遠近贊を執るもの頗多し母は多田隈氏天保三年三月寛治生る伯兄管根家を嗣ぎ仲兄惟清別に家を立て寛治出て紫藤善十の家を嗣ぐ

一、幼にして父を失ひ慈母の鞠育する所と爲り長じて伯父吉川郁次の教育を受け年十四始めて贊を澁江忠多の門に執り次て伯兄吉川菅根に就き和漢學を究む爾來専ら武技を研精し道場を私邸に設け藩命を受け普く子弟を誘導す後特に武技を以て藩の用る所と爲る

一、菊池郡瀬田水道は加藤清正の開鑿する所沿岸の田地皆是によりて灌溉の利を享く然れども急流激湍動もすれば潰決し藩内水道中最も治め難しと稱す是故に郡司交迭ある毎に例必ず治水に長ずるものを登用し土功の事を囑す文久年中非常の破壊あり是に於て藩命を受け其修繕に従事す是より潰決の憂少なし

一、文久三年九月藩主公子京師に朝觀せらるゝや命を受け郷士を督して之れに扈從し翌年四月又從て歸國す

同年八月藩命を受けて小倉に出陣し十二月凱旋す

一、明治元年伏見鳥羽の變起り人心恟々諸藩戒嚴藩主父子兵を督して京師に入朝し更に江戸に向ふ是に於て組長として從軍を命ぜられ十一月下總に軍し地方を鎮撫す十二月事平に及び復從て歸國せり

一、明治三年一月同郡津田村の最も治め難きを以て特に其里正を命ぜられ同五年辭職

一、明治六年是より先き廢藩置縣の令新に下り少年子弟學海の方針に迷ひ餘弊の極る所或は無學坐

食の徒を生ぜんとするの傾向あり則同志の士と與に學舎を居村に設け後進子弟を誘導化育し且つ授産の方法を講じ勸業の進歩に努めたり

同年七月十三番中學區取締を命ぜられ學事を督勵し専ら普通教育の上進を謀れり

一、明治九年一月同志の士と謀り製糸場を設けんとし諸般の計畫已に熟す會々明年丁丑の亂あり事遂に果さず

一、明治十年是時に當り不逞の徒將に事を擧げんとし天下の危機漸く熟し尋常の以て大勢に應ずるに足らざるを觀察し此年一月に至り中學區内巡視を終へ直に現職を辭す

一、同年二月鹿兒島賊徒果して大舉熊本城を圍む是に於て同志の士と共に熊本に至り徐に動靜を察す當時熊本縣令富岡敬明逃れて御船に據る乃面り其策の得たるものに非るを陳して去る是に於て同志を糾合して一隊を編し從軍許可を得熊本鎮臺第十三聯隊第三大隊に附屬し豊日隅薩の間に轉戦し城山没落の後に至り本隊と共に凱旋す

一、明治十四年天下の政論沸騰し其勢滔々として社會の根軸を搖さんとし害毒施いて青年子弟に感染し往々其向背を誤るものあるを見大に學舎を擴張し同志を集め更に伯兄吉川菅根と共に大原義塾を創設し我國體倫理に基き真正の教育を施し以て醇良有爲の國民を養成せんことを務めたり

一、同年十月撰れて區會議員となり同十六年縣會常置委員となる爾來専ら縣治に執筆し而して製糸

事業の大に本邦將來に望あるを期し人を高知に派して其方法を講ぜしめ遂に合志製紙場を設け大に高知流の製紙を創めたり

一、明治二十三年七月撰ばれて熊本縣第三區衆議院議員となる

一、明治二十四年十二月衆議院解散を命ぜられ同二十五年二月再び同區より撰ばれて衆議院議員となる同二十六年十二月再び衆議院解散を命ぜらる同二十七年三月同區衆議院議員に當撰せり

一、明治二十七年日清戰端を啓くや同志の士と義勇兵を編制し從軍を請ひ許されず則義勇團を組織し以て萬一に備ふ

一、同二十八年六月製糸傳習所を設け製糸法の改良を企圖せり

一、同年九月内閣より馬匹調査委員を命ぜらる

一、明治三十年衆議院議員在職中東都にありて病を獲五月歸りて家に養ひ六月遂に六十有六を以て鬼籍に入れり

一、明治十年の役功を以て谷少將より金幣を受け同十三年六月に至り更に一時賜金を領す其他賞杯等を受くること數多

一、明治二十八年三月帝國第七議會召集の際勵精の廉を以て銀杯下賜せらる

伏して惟るに上奏の道自ら一定の法規あり一定の法規に依準せずして上奏するは潜越の罪謬しとせず然れども今日の時は國家の勢日に匪運に陥り内外の事益す多難に赴くの秋なり苟も國家の鴻恩に沐浴して猷芥の微志を抱くもの何ぞ常律に倣はりて所思を盡さず坐して社稷の患害を傍觀すべけんや臣聞く國家の憂は上下の情意疎通せざるより大なるばなし上下の情意疎通せざるときは君民の間睽離す之れを人體に譬ふるに猶ほ頭足其所を異にするが如し何ぞ活動せんや苟も國家活動せざれば善制美法ありと雖も遂に其用を爲す能はず古より邦國の滅亡せしものを見る大抵上下の情意疎通せざるに依らざるなき實に皆此の理に出づ故に聖主は常に其四聽を開き其四目を明にして以て下情を察し賢相は亦其心を公にし其量を寛くして以て民意を探る伏して惟みるに陛下は聖徳天の如く聰明神の如し即位の首め直諫を求むるの詔を下し又萬機公論に決するの勅を發し給へり是れ古の聖皇と雖も何ぞ及ばん然るに當路の諸臣に實に補弼に任じ職に樞機に居る者宜しく日夜惕若として聖意を察し以て民意を察し下情を通ずる所以を勉めざるべからず而して其實全く之に反する者あるは何ぞや抑も内地雜居の事は國家百世の利害に關する大問題なり故に民間忠誠の志ある者皆竊々として其是非得失を論究せざるなし而して熱心義に奮ふの徒は其見る所を懷きて當路諸臣の門を叩き以て之を開陳せんと欲すれば當路の諸臣敢て面會を許さず再三之を訪へば警吏をして門より追ひ去らしむ是れ豈に下情を通ずる所以ならんや現條約を勵行せんことを望むば方今の民意なり而して是我國正當の權利を行はんと欲するのみ敢て外人を排斥せんことを望むに非ず而るに現條約勵行の議一が衆議院に頭ばるゝや當路の諸氏は之を目して攘夷の説となし甚しきは誣ひて陛下の大勅たる開國進取の國是を阻格するものと存じ毫も其説を盡さしむるなく漫りに議會を解散するに至れり夫れ現條約を勵行せんことを望むものは亦世界の大勢を知らざるものにあらざるを知らざるは恐くは當路諸臣に優るあるも劣ることあらざるなり而して其微忠を陛下に盡さんと欲するの志は亦決して當路諸臣に譲らず唯其勵行を主張するものは國威の振揚之れに非ざれば期すべからず國權の擴張之れに非ざれば望むべからざるを知ればなり而して開國進取の國是亦之れに由て實行を見るべきなり何ぞ阻格するとせんや當路諸臣の民意を察せざる亦甚しと云ふべし當路諸臣の民意を察せず下情に通せざる固より此に止らず此唯一端を擧げたるのみ而して當路諸臣の民意を察せず下情に通せざるは即畏れども陛下の聰明を棄蔽し奉りて要樞の地に盤り傲然下に臨みて忠臣自ら擬し天下の清議之れを攻撃するあれば忽ち言論の自由を箝束し或は袞袖に隠れて其位置を保たんとす其罪實

に大なり若し此の如き輩をして左右補弼の重任を汚さしむるときは下情遂に通ぜず民意究しく塞がれて上下阻隔君民睽離の端或は恐くは是より開けん而して國家の活動全く息むに至らんも亦測知すべからず豈に懼るべきにあらずや方今世界の大勢は日を送ふて切迫し東洋の危機實に眉睫の間に在り一國渾然和同して鏡丸の如く以て此際に卓立するも國運の前途猶實に憂慮なきを得ず況や上下阻隔して國家の活動を妨害するに於てなや臣實に憂懼に堪へず伏して願くは日星の明雷霆の威速かに要路の諸臣を退けて之に代ふるに忠誠賢良の人物を以てせんことを是れ實に邦家百世の基礎を鞏固にする所以なり臣昧死し上奏す

建 白 (遺封の二)

夫れ外國の交渉たる國家至大至重の事件にして在野在民の敢て窺知する處にあらずと雖も類に道路の説く處に依るに一昨年中止せられし各國條約の改正今般更に締盟を結ばれ批准の期業既に且夕にありと聞くが如きは外人の法官登用なり我法典の編纂なり土地所有の權利なり獨立對等の國際上に於て萬古未曾有の締約と云ふべし夫れ斯の如きは獨立國のありと雖も半ば屬國の實を負ふものと云はざるべからず 天神此土に降臨ましましてより數萬歳の久しき國威赫煇未だ蠻夷の爲めに我國權を毀損し我財用を蹂躪せらるゝの不祥なかりしに明治聖世に膺りて千歲翻るべからざるの汚點を列國史乘に印するに至る豈に日本臣民として黙止すべけんや速に輿論の欲する所に從ひ斷然條約中止の大詔を發せられ國會開設の後を疾ち之を輿論に諮ひ更に獨立對等國の締約を取結ばれば 宗祖の威烈を傷げ給はず下に兆民の福祉を保護し國權を億萬斯年に全ふせられんことを冀望に勝へず臣重諫を避けず以て微言を直言す幸に諒察焉

素 懷 書 (遺封の三)

君辱めらるゝときは臣死し危きを見て命を授くとば何等の時に膺つて適用すべき哉顧みるに今や我が日本帝國は如何なる境遇に際せしや如何なる屈辱の域に濱せしや新條約締結の期業既に且暮に迫れり道路に聞くが如きは天孫統を垂れ極を立給ひ大日本獨立の國權金匱無缺の國體を擧げて一朝□□の爲に失却せられ聖子神孫なる我天泉陛下をして牛羈國の君主たらしむるに至らんとす豈に日本臣民として斯の如きの屈辱を甘受し生を食り死を避くる時ならんや一死以て國家に報ひ聖威を海外に輝し國權を萬歳に全からしめ兆民長く福祉に慶頼せんことを欲し憤然譟起賣國の□□誅除し

我日本國辱を萬國歴史に著すの新條約を斥け獨立對等の締結を冀せんことを我好んで不祥の逆境を企圖するものにあらず萬止むを得ざるに出づればなり其成敗の如きは天なり我が能くする所にあらず只義盡て仁至る而已後の志士亦能我志を繼ぐことあらんことを信じ聊か素懷を陳す

□伊牟田泉

名は泉、田島村の人、明治二十五年四月十四日歿す。享年七十六。先塋の次に葬る。

伊牟田泉碑銘

守我所信、而自不失、使後世能由其緒矣、其功豈不偉哉、昔者韓文公奮身於異端橫生之中、而尋鑿緒茫茫、遂能維持聖道於百世之下矣、近世索如此人於我邦、吾於伊牟田先生見之、先生名泉、肥後合志郡人也、父曰伊賀正、先生其長子也、幼穎悟好學、及長有氣節、常悲神道之衰微、奮然用力於和漢之學、孜孜勉勵、業大進矣、天保十年始說皇道、以辨國體、使世人有悟尊王敬神之所以然之意、時弱冠後三年也、既而舊藩主細川侯、親召使先生講神道於此、先生有大感激、自此後應九州諸藩之招、到處說以國體之尊嚴、歸而始下惟於鄉里、講和漢之學、以教門弟子、負笈來學者頗多矣、藩廳聞之、賜金褒之、嘉永之初、先生應玉名郡某氏之招、說皇道於其伊倉村八幡祠內、十晝夜、聞者雲集、時同郡某寺僧某聞之、憤激不能措焉、直傳檄於諸郡同宗僧徒、將與先生鬪論議、其意及今不論駁先生、則我佛道墜廢矣、於七十餘寺僧徒大集、皆示威力、與先生論神佛兩道之利害得失、殆涉八

日八夜、先生不少屈、泰然坐於緇徒環攻之中、益振起元氣、竭精極微、馳驅於皇道之間、大駁擊佛敎之非、論旨無復餘蘊、僧徒等不能敵其論鋒、怏々退去、遂至藩主請判其言論曲直、藩主固識其論之非理、謫去之、自之先生之名、藉々於國中矣、當此時、耶蘇教亦頗行於世、先生又大排斥之、後應八代城代長岡氏等之招、講皇道、不暇數也、長岡氏給年穀若干、又給木材、使以建私學、先生之名於是益聞於四方、門人大進、執贄者前後殆五百人矣、安政二年細川侯、賞先生曰、夙篤於學、特用意於皇道、集衆多門人敎之多年、且事父母能竭其孝、皆可大嘉獎焉、賜金穀、後又增賜之、四年繼家任田島村菅原神社神官、自家祖至先生、皆爲神官、至先生實七世云、明治四年任錦山神社神官、神社祭加藤侯清正之所也、時係創設、先生有大所盡心焉、萬事遂就條緒、七年任日向之國都農神社權宮司、兼補中講義、翌年又爲宮崎縣中教院長、尋任宮崎神社宮司、兼補中講義、亦以神社新陞爲國幣社、先生盡力於其間甚多、九年任宮崎縣神道事務分局副長、尋任權敎正、翌年任鹿兒縣東神道事務分局長、十八年任權中敎正、二十年神宮敎熊本本部傳言先生曰、身雖已老、自費資力、以布敎盡心於茲、可謂至矣、賜以金若干、二十五年三月罹病、踰月不瘳、其將死也召兒孫於枕上、與以數百金、曰汝等宜傳之子孫、以充追敬祖先之資也、遂以四月十四日而歿、享年七十六、葬於田島村坂口里先塋之次、有子男三人、長曰直人、爲日向國都農神社禰宜兼敎導職先卒、次曰繁、今爲縣會議員嗣後、次曰直衛、別成家、今爲某小學訓導、皆守先生之遺教、能不失之、有女二人、皆嫁、嗚呼

佛教始入我邦、遂使人心陷沒於染軟懦弱之間、經數百年、而未已、先生以振起皇道自任、大駁擊之、至使其畏縮不能起、豈可不謂偉哉、銘曰、

皇道不明、人心泯滅、生神州者、誰不憤激、談笑靡之、以滌邪說、幾百僧徒、肝破膽裂、噫先生逝、遺風凜冽、

明治二十六年四月

第五高等中學校教授正八位 笠間 益三 撰

門人 内藤 卷石 謹書

伊牟田泉略歴

伊牟田氏名は泉菊池郡田島村故伊牟田伊賀正の長男なり母をやち子と稱す文化十四年五月二十七日に生る幼にして穎悟能く學を好み業を鍊る漸く長ずるに及びて頗る氣慨あり常に神道の衰頹を憂ひ奮然力を和漢の學に盡し螢雪研磨の効空しからず學業大に進む天保十年初て皇道を説き國體を辨じ世人をして尊王敬神の道を悟らしむ時に年二十有三なり同年舊藩主細川侯の前に於て神遺講演命ぜられ爾後細川家一門三家を始め諸大名及び筑前筑後肥前豊後等の諸藩に聘せられ皇道の尊嚴と國體の卓越にして他に比類なき事を説明し同十一年初めて帷を郷里田島村に下し和漢の學を講じ厚く門生を教授す諸國より笈を負ひ來り學ぶもの極めて多し時に年二十四なり同年四月舊藩廳に召され文

文學出精に付金子百疋褒賜せらる

嘉永元年四月玉名郡元小田手永多田隈丈左衛門の招に應じ伊倉八幡宮に於て十晝夜間皇道説教をなす時に同地某寺の僧某之を聞き憤激し直に諸郡の同宗に檄を飛ばし論議を試んことを企つ蓋今に於て論難抗議せざれば佛道衰替せんとは是に於て七十餘箇寺の僧侶一時に同地に會合し威力を示して以て神佛の短長を論じ殆んど八晝夜に渉る然れども氏屈する色なく勇を鼓し身を以て神道の犠牲となり且つ辨じ且つ駁す其論旨正理に合ひ論鋒頗る鋭敏なるを以て僧徒遂に敵すること能はず快々として退きたり然れども餘念尙ほ止まず遂に論議の顛末を訴へしも納れられず是より氏の聲名邦内に藉甚す時に年三十二なり其れより八代城代長岡佐渡を始め諸大名の招に應じ道を講ぜり

嘉永四年七月皇道を研究する益す周到に門生を教養する益懇切なる旨を以て藩廳に召され金貳百疋を賜はる

嘉永五年正月八代城代長岡佐渡守より一代限り毎年米五俵を給せらる又同年十一月私塾の建築成る其用材は佐渡守より給せらる是に於て名聲益揚り門生頓に増加し絃誦の聲日夜絶たず前後門生凡そ五百有餘の多きに至れり嘉永六年十一月藩主の前に於て再び皇道を説き金若干を給せらる

安政二年三月學問心懸厚く別て國學に委しく多數の門弟教導數年手厚く行届且能く兩親に孝道を盡すの故を以て藩主より毎年米五俵を給せらる

同年五月祈禱を命ぜられ同四年五月白銀七枚を賜はり其れより毎年白銀三枚を賜りたり此時に當り諸大名の信任殊に厚く一身の榮譽實に此時に集れりと云ふ

安政五年正月元竹迫手永文藝教導方命ぜらる

文久元年十月學業上進教導懇切孝道行届きたる旨を以て猶又毎年米五俵増賜せらる

慶應二年二月有吉將監より毎年米貳俵を給せらる又明治元年十月藩主より金子千疋を賜はり明治三

年二月竹迫會所内に於て官熟を起し父子交替を以て教導方を命ぜらる

明治四年八月熊本縣錦山神社祠官に任ぜらる當時同社創業の際なりしにより日夜苦心盡力して或は其筋に建白し或は請願するありて其の緒を整へ遂に功を奏せり

明治七年十一月日州都農神社權宮司兼權中講義に補任せられ同八年三月宮崎縣中教院長申付られ同年同月日州都農神社宮司兼中講義に陞任し明治八年九月日州宮崎神社宮司兼中講義に補任せらる從來同神社は一の縣社なりしが此任命は會々國幣中社に社格昇進の際にして創始の事務に當り頗る苦心焦慮して其功を奏せり明治九年四月宮崎縣下神道事務分局副局長を擔任す同年同月同縣教會副會長申付らる同年九月教官榮進して權少教正に補せらる同年十二月神宮祭主久瀨宮殿下より賞與金貳圓賜る同十年三月鹿兒島縣下東神道事務分局長を擔任同十三年十一月内務省へ寫眞を差出す同十八年十月權中教正に補せらる同十九年八月神宮教玉名分教會長を申付けらる同二十年四月老體の上自費

を以て布敷盡力の段奇特なりとて神宮教熊本本部より金參圓賞せらる同廿五年三月病に罹り同年四月十四日歿す享年七十有六翌年門人相謀り碑を建て永く其德を仰げり

□津々良一如

阿蘇郡坂梨村高森勘次郎の三男にして、安政二年得度し明治五年興福寺の住職となり、明治十五年八代郡宮地村宗覺寺に轉ぜり、和歌を好くし畫に巧なり、嘉永元年に生れ、明治二十八年に卒す。年四十八。

迫間村興福寺内にある碑文、其人となりの一斑を知ることを得べきを以て、左に掲ぐ。

當山六世日普大德又之名を鞭草一如といへり、年久しく本寺に住まれしかば、其德をしたへる人少からず、書などを好みて、歌は古今の昔を考へ、長歌へ萬葉集の古きを尋ね、繪は土佐の流を汲みてかゝれしが多く世にめてられたり。中頃八代の本成寺をしり、後に球磨郡人吉なる林鹿寺に移りて、明治二十八年九月八日といへるに遷化せられたり、かれこれこゝに其の教へ子只村英亮、はた信徒なる馬場稼一其外有志かれこれおもひ起して、紀念碑なるものを建て、後の世に傳へんとす。ぬしはもと阿蘇郡坂梨なる高森某の家に生れて、當寺に春秋十あまり五年許すまれしかば、こゝを第二の故郷とやいふべき、さればなき靈もいかでだに見遇し給ひましとて、此のしわざなむそのよ

し聊ものせよとはへるまに／＼書しるすとて、在し世におなじみ國學のおさなき友。

岡 千 足

一如の坂梨を出て、隈府に来るや、妙蓮寺の徒弟とをり、此に修業中時の庄屋長田穂積に知られ、十八歳の頃興福寺に入り後數年にして同寺の住職となれり、平素勤王の志厚く佐々豐水岡千足等の如きは其の親交ある人々なりき。

□澁江龍伏

名は公寧、字は子靜、龍伏と號す。衆議院議員たり明治廿九年十一月三十日歿す。享年三十九。

澁江龍伏墓碑銘

君諱公寧、字子靜、號龍伏、姓澁江氏、肥後菊池人、祖諱某、父諱公木、母木村氏、公木受業於犀潭木下先生之門、以儒著、君幼承家學、夙有育英之志、明治初年國家下令、振興學政、君奮入師範學校、研鑽新學、業成教授教於鄉塾、既移學務委員、時公木開家塾、曰遜志堂、以昌明忠孝仁義之教爲己任、君餘力助父、勸獎其子弟、子弟知所方、而一鄉興於善、又與同人會、討論政法治術之要、善有所期於他日也、十四年、余不自揣、從先輩諸公之後、創立紫溟會、唱欽定憲法之大義、尋組織國權黨、以發揚皇威、振張國權爲宗旨、君亦與焉、頗竭盡心力、隱然爲一方之雄鎮、二十年舉縣會議

員、尋爲常置委員、明年廟堂、有與各國改訂條約章程之議、物論四起、君慨然曰、此約一成、我之不利莫大焉、移檄同人、聯結衆志、代造元老院、建白其不可、而廟議亦不遂行、二十六年前議再興、至此再代黨衆十餘萬人、詣京、上書貴族衆議兩院、具陳民情所在、二十七年舉衆議院議員、黨之志也、於是君始得居天下之廣居、立天下之正位、而其道亦將大行於天下、忽爲二豎所冒、彌留不愈、當是之時、我皇發征清之師、進大纛於廣島、下詔特下議會、君蹶然起曰、家國興衰所繫、吾得生而翼贊皇謨、則死亦有餘榮矣、慷慨上途、迨事平之後、朝廷嘉其勞、賜銀盃、頃之竟不起、明治二十九年十一月三十日也、距生安政五年十一月、享年三十有九、聞者惜焉、君資性篤實、事父母而孝、接弟妹而友、常曰、吾有三樂、看花一樂也、飽甘旨二樂也、接家君之膝下、聽其說話、三樂也、迨既病曰、今也不甚欲觀花飽甘旨、亦猶有膝下之歡、此樂真莫名焉、靄然之情、溢于眉宇之間、然自知不能終父母之養、以爲深憾、臨終日中喃喃、猶言先父死之不孝、嗚呼可以知其爲人矣、配大賀氏生子一人早夭、女三人亦亡、其二女尙幼、銘曰、

鞍岳峩々、菊水溶々、有古君子、幽宅厥中、後有過者、當想遺風、

一、龍伏勤王之志厚く菊池氏の精忠を天下に發揚するを以て已が任としては門生に訓話し出ては天下の士に説き常に曰日本忠臣多しと雖も我菊池公誠忠第一たり楠公の大忠臣たるは三尺の童子と雖も之を知る然るを東都知名の士龍伏在京の一日内務省神祇官某氏を叩き菊池神社の由來を説き菊池氏歴代の忠烈を談べしに某感嘆良久ふし其然るか初て聞き得たりとにして尙

且菊池氏の事蹟を知るもの少し之れ他なし地既に西陲にあるあれば上游に及ばざるもの多し而して之を發揚するは菊池人の責任なりと畫工を自邸に招き百數旬の久しきに涉りて幻燈畫を畫かしめ之を東都に遣りて畫版を製せしめ天下の人をして其精忠を仰がしめんと謀れり又菊池神社の神苑を擴張し鎮西の吉野たらしめんと期し長岡子爵(護美)を始め知名の士を説き畫策將に成らんとして歿す龍伏孝心深く三樂中(花を見る一樂甘旨に飽く一樂父と話す一樂)父と談ずるを其最とす晚香翁も亦曰汝と談ずるは父君(涪灘)と談ずるが如し

一、龍伏幼にして穎悟氣節あり夙に家學を承け年十八熊本假師範學校に入り旁ら經義を大矢野宜春に學び業成り菊池郡督學に任せられ父晚香先生を扶け家塾遜志堂を督す是の時に當り四方來り學ぶもの百數人生徒を率ふるは忠孝を大本とし禮讓を尙び品性を陶冶し實用的人物を作るを目的とす

明治二十三年黒田内閣條約改正の舉あるや議論沸騰朝野實に騷然たり龍伏縣下二十萬の代表者となり東京に赴き尙早意見を唱へ廟堂に建白す又縣會議員に擧げられ常置委員となりて縣治に盡瘁し衆議院議員に撰ばれては國家の爲に獻策し明治二十七八年の役大蠱を廣島縣下に進めらるゝや特に軍國の議會を廣島に召集せらる龍伏適病に臥す奮然起て曰臣子の本分を盡すは今日にありと病を勉めて議會に列し各黨各派の間に奔走し邦家に貢獻せし所少からず朝廷其勞を賞し銀盃を賜

ふ明治二十八年郡制廢合の議出づるや菊池なる郡名を存續するを得たるは氏が帝國議會に論議する處與りて大に力ありたるによる

□後藤實義

名は實義、通稱官平、泗水村の人、明治二十九年一月六日歿す。享年六十有三。僧諡して雲林院釋成功信士と云ふ。泗水村先塋の次に葬る。

後藤官平先生誌

先生名は實義通稱官平天保五年五月合志郡村吉に生れたまひぬ父は木村啓左衛門と申して子三人あり先生は其次男にして出て後藤氏を繼ぎ惠美子と配して五女をあげ給ひしが長女は世を早くし養子直七次女に配して家を繼ぐ先生幼くして父の教を受け稍長じて藩の天文學教師範手島氏に従ふ時に安政元年なり是より思をこの道にひそめ田畑に出づるにも問題紙を筧に結ひなどして携へたまひ又夜のほのゝと明け行くをも知らず教理を研究したまへるなどまことに寢食を忘れ晝夜を分たず勵精したまひければ學術門下に並ぶ者なく知れるもの聞くもの敬重せざるなかりき文久元年に至り算術秘奥の免許曆術測量皆傳の證狀を得官の恩賞にも預り給ひぬるが中にも明治二年算術拔群心懸厚く同門の譽後進誘掖の效少からずとて特に郡宰直觸に列し佩刀を許され維新の初め士族に列せ

らる藩主軍艦萬里號を購ひたまへりし折乗組の内命あり手島氏の勸誘再三に及べとも義父母の養すて難きをもて之を辭し家業のかたはら人の乞ふまゝに算術を教へつゝありしに郷の算學教授の命を受けたまひぬ先生常に進取の念をいだき洋式を獨修して算術代數何の奥義を究めたまひ小學令制定せられてより吉富田島等の教員となり特に小學高等算術科教授免狀を受け給ひぬ此頃縣下はいふも更なり他縣各地より教を乞ふもの少からざりければ自ら奮ひて官廳の認可を得教學専門の私塾を設立し直整疊と名づけられぬ實に明治廿一年一月なり遠近四方より來りて學を修め業成なりて教員官吏軍人となるもの少からず前後教を受けし者五百に及べり先生老いて益斯道のために一身を抛ち教へて倦まず後進を導くを以て樂としたまひつるに昨年冬圖らずも中風症に罹りたまひ親懇門人打驚さしが家族の看護懇なりし効にや病は漸く退きて本に復したまひぬここに門人相謀りて永く先生の恩恵を遺さんものとして義金を醜集して此の碑を建てぬ先生尊皇の志いと深く教神の念厚く寛厚の量慈愛の情を具したまひて門人懷き家門治まり郷閭推服す先生健かにはし、明治廿九年一月六日新年の壽を述へむとて親戚近隣を訪ひたまひつる歸途中風再發して其夜十二時逝去したまへり嗚呼悲哉永く其徳を傳へたまへども亦尊容を拜み奉るに由なしこゝに親戚故舊門人一同打集ひ同八日遺骸ををさめ奉る享年六十有三法號雲林院成功信士と申す

工藤 左一 撰

□木下梅里

通稱小太郎、梅里と號す。眞弘はその名なり。文政六年を以て今村に生れ、明治三十年十二月廿一日東京に於て卒す。年七十五。染井墓地に葬る。

梅里木下先生之碑

武藤 一 忠

桶里木下先生、通稱小太郎、後改眞弘、韓村先生弟也、幼從涪灘澁江先生受句讀、後從府學教授近藤先生、專攻程朱之學、而不肯墨守、弘化三年八月、爲菊池郡讀書師、開家塾今村、凡不論郡内外、從學其門者、幾十百人、夙起授句讀、午時至聲澁咽喉吐血、而講演數次、曾無厭倦之態、當是之時邊陲不穩、民心激昂、先生乃策海防私議、派門生數名于長崎、使傳歐洲兵式、及歸自操銃列隊伍、閩郡翕然、編軍隊至千八百餘人、專以鼓舞作興子弟爲己任、在郷二十餘年如一日、明治元年四月、任府學訓導、乃舉家塾委門生武藤一忠、更開家塾于熊本、執贊者加多、既會廢藩令下、挈家東上、任正院出仕、尋轉内閣修史局、其在正院也、土方内大史、傳三條岩倉兩公之意、使條陳民間苦樂、而以事屬于機密、不肯示人、後役于朝鮮三年、歸得病、專事鉛槧、如豐大閣征外新史五冊、劄厥既成、蓋振作人心、以培養國家之元氣者、先生畢生之志也、曩者在郷門生、相計開同窓會也、先生寄尺牘曰、自別諸子三十餘年、天涯爲客、無一事益于世、齡踰七十、加以老病、無夜不夢故山、豈圖

諸子不忘舊誼、爲予設宴、何堪感謝、請年追此會、益爲邦家修學勤業、以顯菊池光榮也、嗚呼先生齡高自如此、而勸獎備至、先生之風、與馬鞍箭筈之雨山高、兼菊池迫間之二水長、今也天涯地角、相距三百里、不能屢瞻先生、忻慕之餘、請井々竹添先生、書篆額、茲建碑以爲紀念焉、銘曰、
 教而不倦、必叩兩端、述而不作、屢策治安、隊伍維勦、閭鄉成團、維文維武、
 德馨如蘭、菊水之上、菊城之巒、巖々維石、千秋仰觀、

□堤 政 泰

文政五年十二月を以て菊池村大字長田に生る、父は中原行晴なり。後長じて木柑子なる堤政資の家を嗣ぐ、頗槍術に長ぜしを以て名あり。明治三十一年一月卒す。年七十七。

政泰は中原宇兵衛行晴の男文政五年十二月を以て生る、安政年間堤甚之助政資の養嗣子となる。幼にして穎悟桑滿伯順の門に入りて學を修め、齋後慶太に就きて劍を習ふ、政泰の槍術を富田惟房の門に學ぶや、鍛鍊研歸其の術大に進み衆に勝れて見るべきものあり。遂に極意皆傳を許され師に代りて門弟に教授す、藩主に請ふて武者修業に巡遊し、國に歸るや、藩主(齋護)の側役に召出され、奥附監察を命ぜらる、明治維新の際玉名郡築地村里正となり、後菊池郡輪足村里正に轉ず、至る處治績あり、明治十年の亂に際しては舊藩士鎮撫に盡力せしも、其の筋の嫌疑を受け長崎に收監せら

る、無罪放免後別格菊池神社主典を命ぜられ、誠意神祇に事へ六ヶ年の久しき始終一日の如し。翁の性實に天真爛漫たる美質にして、歌をよくし又俳句の嗜ありき。明治三十一年一月十二日卒す。年七十七。

□中尾 五百樹

別格官幣社菊池神社主典となる、頗る典故に悉し、歌を能くす。明治三十一年二月廿六日歿す。年五十八。

中尾五百樹碑文

此石建るは誰ぞ君が常に教の懇なりしに報いて君を慕ふ心の切なる人々なり。この文書くは誰ぞ君と共に公務を執りし後も遠しとせずして文かよはせ頗る親しく交らひしに、思ひきや君は歸らぬ旅にもものし給ひしよしを聞て悲しさに禁へぬ一友楳邨なり、嗚呼悲しきかな。君や父君は英太郎後に英山と稱ふ、母君は中尾氏なり、天保十二年四月江戸伊皿子銀臺町に生れて鬼太郎と名づく、長じて小監謙一に就きて漢學を修め鈴木重胤に頼りて皇典を學ぶ。嘉永五年七月藩君に仕奉りそめて後何くれと召仕はれ其御國にも住めりしが明治三年に家督相續ありて五年に五百樹と名を改め六年五月東京に遊學し八年三月教部省に出仕す。こゝに楳邨は七年七月徳島縣屬より同省中録に轉任して特選

神名牒纂委員なりしかば此時君も同掛員となり共に／＼其事に従ふ。九年二月同省筆生に任ぜられしも編纂の事は故の如し。然るに十年一月に教部省廢省の後一たび立別れて君は同年十二月高知縣屬に任ぜられしを十一年七月依願免ぜられ而して十二年二月菊池神社主典に任ぜられし以來其職を奉ずるに勉勵なるが故に十六年一月皇典講究所委員となり十九年四月同監事兼教諭を囑託せらる。二十年主典奉職滿八年以上勤績によりて若せ金下賜の恩命あり、二十九年三月從八位に叙せらる。かくて本社に奉職の後も公務の暇にまことある書を講じ月花にも諷詠し給ひければ同心の人々遠近を論ぜず集ひ來て親と敬ひ兄と睦みつゝ頼めりしに如何ならばか天この君に年を假さず明治三十一年二月廿六日といふに歳五十八にしてみまかり給ひぬ嗚呼悲しきかな、そも／＼君天性凡ならず沈毅にして平常神祇を畏れ敬ひ君親を尊重し朋友にあつく老を憐み幼を愛しかば其德に懐くもの少からず、典故の何くれ明らめられしが故に其教を受くる人多し、いにし廿五年四五月かけて楳郷臨時全國寶物取調の事に従ひこゝにもものして別れて久しき二たびの對面に過し昔の述懐しつゝかたみに袖ひくならざりしかど御名の五百樹の稍繁り榮え里の名の菊の香はしく千代も經なむとて別れしを今思へばそれ即ちついの御別れなりき、嗚呼悲しきかな、さればいとせめて君の履歷の一端をこの石にかいつけ隔なかりしこゝろのかたはし不朽にあかさむとするは明治三十三年八月なり。嗚呼悲しきかな、

御歌所參候東京美術學校教授

從七位勳七等文學博士 小 杉 楹 郵

□石淵八龍

通稱は萬壽、八龍と號す。岩村大字水次に生る。醫を業とし家塾を建て、子弟を教授す。天保八年正月に生れ、明治三十五年五月歿す、享年六十六。

八龍石淵先生碑銘

先生通稱萬壽、字子家、石淵氏、號八龍、奕世醫家、考淡水先生諱貞幹、妣野中氏、先生夙承家業遠近乞治者、日踵於門、先生溫容接之、對症投藥、至其全瘥而止、不嘗問貧富親疎也、又設家塾、以經學教授生徒、常曰、教化之淵源、存於經學、夫醫術雖能治疾病、至其蝕侵人心、傷害世道者、則非經學之力不能救治也、故其教生徒、先忠孝、而及當世之務、懇到親切、躬行而化之、以是鄉黨慕其德、奉爲圭臬、從受教者、前後數百人、其後雖世態一變、學制亦隨革、然至今風俗之醇、文學之隆、猶冠他鄉者、先生教育之功、因居多也、先生學問該博、蘊蓄極深、而資性謹厚、不欲聞達、所爲詩文亦不妄示人、故鮮傳者矣、明治三十五年五月二十三日以病歿、距生天保八年正月十二日、享年六十六、葬于先生之側、配奥山氏、生二男二女、長曰壽山、早死、次曰郁次、出嗣城氏、二女皆

適人、壽山遺子某、以嫡孫承祖、尙幼、先生既葬之明年、郁次君來告忠雄曰、先君子恭儉自持、又常以是、訓子孫、其病而將不起、遺命曰、墓碑勿超先制、其文句乞貴紳大家、無已則俾門人知余性行者、略記之可也、子克知先君子者、願得子文、以副先君子之望、嗚呼忠雄豈足知先生乎、雖然少小從學、受教最深、故郁次君之囑、不可以拿陋辭、因謹記所知概略、且揭先生舊友田廷章所題、先生贊、以代銘、

和而知禮、義而守仁、教導子弟、醫治衆民、君子人歟、君子之人、

明治三十七年五月

門人 高木忠雄 謹撰

菊池八景

鞍嶽晴雪

石淵八龍

玉鞍峯上雪華晴、皎潔如銀寒影清、獨駐先公昔時唱、餘光相映轉鮮明、

菊溪朝霧

如練長流是菊河、由來宿霧此間多、平明不辨津頭客、唯有空中送棹歌、

西寺晚鐘

野樹村烟夕照低、蒼然暝色望中迷、報來鐘響知何處、寺在杏壇深水西、

筥峰秋月

筥峰千仞聳雲端、長掛一輪明月團、拉鬼英雄空沒去、高臺此夜有誰看、

廣瀨飛螢

南風暮夜激湍邊、螢火煌々映水連、飛點一條暫時聚、長竿燦々貫球鮮、

守山霜葉

秋風落日白雲城、寂寞更無絃誦聲、唯有霜餘紅葉色、彩霞長駐此間明、

狹間瀑布

瀑布千尋劃石成、飛騰如霰散還輕、段々振響長無斷、尙怪當年鑿鼓聲、

高嶼婦舟

兩派長流映碧山、縈迴菊鹿二鄉間、從茲貨穀通貿易、朝去扁舟暮復還、

永田夜歸

歸節鞭草獨微吟、零落濕衣知夜深、未蹈七回溪上月、但聞林籟鬪泉音、

其二

星光影薄暗幽蹊、更覺悲風添夜凄、怪見陰丘翠杉際、火燐滅處野狐啼、

過正觀寺有感

春暮綠陰暗梵臺、殘花落盡法花開、杜鵑啼血如含恨、松籟奏琴欲惹哀、功駐火東雲上石、名薰筑北

水濱苔、孤墳寂々今猶在、永使騷人吊古來、

□佐々豊水

字は少左、城北村黒蛭の人、天保八年四月三日に生る。夙に皇典の學を研究し、造詣深く、殊に歌を善くす。明治四十年五月十四日卒す。享年七十一、

佐々豊水先生壽碑

大人姓源、氏佐々、名豊水、字少左、號蛭村、誕辰天保八年四月三日、考豊次、妣高濱氏、兄政俊致仕城北村木野、領地三百石相續、熊本藩士也、娶鹽川林登之女、生子、曰豊登、曰繁子、曰鄰子矣、藩主細川侯、以大人補大砲隊司令、司元治慶應年間長門之役、有戰功矣、明治元年陸奥之役、有軍功、同十年之役、有褒賞矣、同十五年致仕、養弟政徳、讓家督矣、爾後教授皇典有年哉、茲從學之徒、爲大人建設壽碑、以存芳名不朽云矣、

□武藤環山

名は一忠字は子章環山又戸崎山人と號す小字乙右衛門幼にして穎悟精力人に絶ち劍鎗把勢游水の術に通ず初て贅を榎里木下先生に執り後榎村木下先生に學び業成り家塾を開く榎里木下先生藩の文學

となるや榎里先生其後を繼がしむ是に於て乎家塾を閉し戸崎に移居し帷を下す是時石淵八龍徳永隆業其門人を教授す石淵八龍は護國徂徠の學を唱へ漢唐傳疎を主とす氏は専ら師説を守り程朱を奉ず菊池文藝倡方を命ぜらるゝや毎月三次菊池文武講堂(隈府町字北原村)に出て經書を講説し郡内子弟を薰陶せらる言語明晰にして講説滯らず聽者をして了得せしむ明治維新百度改廢せらるゝや諸般の公職を奉じ銳意事に従ふ是を以て事蹟大に擧れり明治十四年政論勃興自由民權の説盛なるや欽定憲法を主張し同志と紫溟會を組織し天下に呼號す後縣會議員國會議員に擧げられ大に盡す所ありたり晩年意を當世に絶ち詩を賦し文を屬して以て樂まれたり其委曲の如きは令嗣虎太氏著す所の行狀に詳かなれば爰に贅せず

先考小傳

武藤 虎太

先考字は子章環山と號す戸崎山人は其別號なり小字は乙右衛門後一忠と改む其先は大織冠鎌足公に出づ公の裔關白道隆十四世の孫政運始めて武藤氏を稱し子孫相傳へて政宗に至り肥後國菊池郡永山村に城きて居る後世下て民伍に編せしが曾祖源兵衛君に至り原村に移り子字助君を経て孫卯平太君に至り復た士籍に編す先考は實に其三男なり天保七年十二月二十日を以て原村に生る幼より文武の學を嗜み弘化三年十一月山東新十郎先生の門に入り武藏流劍術及び揚心流柔術を講じ同時に惠良左十郎先生に就き揚心流居合を富田十郎右衛門先生に就き槍術格術を受け嘉永元年後藤源太左衛門先

生に就き太田流砲術を受け同四年十六歳の時居合中段相傳劍術五法相傳及大格術相傳を受け翌五年柔術裏手数相傳安政四年廿二歳の時劍術三ツ先相傳柔術目錄相傳等を受け同六年居合相傳を慶應四年砲術中段目錄相傳を受け小隊教官に補せられたり

文藝は弘化四年木下韓村先生の門に入り次て安政二年廿歳の時木下梅里先生に就き講堂出席を命ぜられ殊に詩文章精勵の故を以て屢次藩の賞賜を受けられたり

文久二年廿七歳の時木護深葉兩山監守を命ぜられ翌年藩侯扈從の命を受け京都にて役し元治元年侯に從て國に歸り直に山林監督の命を受け地士に列し植林事務を督す爾來年に植栽の松杉三千餘株に及び當時赤岩に藩役所あり居常來往其間賦詩作文以て清閑の樂と爲せり

慶應三年七月菊池御家人の文藝世話方を命ぜられ御用宅に出席し自宅には私塾を開き朝夕句讀會讀等の指南方を命ぜられ専ら青年子弟の教育に従事せられしが翌慶應戊辰の年中原に於ける尊攘閉鎖の論は遂に地方に影響し肥後藩領豊後北方亦警報を傳ふるや藩命に接し筆を投じて直に同地に趨き津江日田の間を來往し動靜を偵察せられしが是年四月更に菊池御家人の文藝倡方を命ぜられ木下梅里先生の私塾を承け再び教育の任に當らるゝに至れり時に年齒正に三十三歳なり

明治二年四月文武精勵造詣不淺の故を以て別席一領一疋に召出され一列無役の口に附せらる獨力修業別に一家を營み遂に士籍に列するに至りしは誠に男子の光榮なりと謂ふべし而して此間教育の傍

ら山林監督の任を全うせられしが如き頗る其活動の盛なりしを見る當時常に「生前之死心死後之生氣」の語を締め書せられしと謂ふ

王政維新の業始て緒に就き天下列藩藩政改革の時機漸く至り熊本藩亦着々釐革する所あり明治三年八月小林監督の職廢す元治元年より此處に至るまで實に七年の久しきに及ぶ九月文藝倡方の職亦廢す明治元年より此に至るまで三年に及四年二月菊池郷里正を命ぜられ六年三月第十六大區三小區戶長を命ぜらる爾來郡中各地の戶長に任じ頗る民政に意を注ぎたれば管下の治蹟大に舉り四民悅服せしと云ふ其間私塾は尙之を繼續し朝暮句讀會讀を授け諸生を薰陶せしかば郡の内外笈を負ふて來り學ぶもの數百人に及べり

明治九年冬職を辭す翌年二月會々西南の變起り熊本の人士薩軍に投ずるもの甚だ多く地方爲に風靡し動もすれば大義名分を誤るを憂ひ竊に山鹿に赴き官軍に投じ盡力する所あり七月薩軍敗走し民情舊に復するや直に郷里に歸り教育の一日も忽にす可らざるを察し直ちに小學校に授業し特に私塾の諸生を教育せられたり

明治十二年府縣會の創設に際し直に選ばれて其議員と爲りて縣政に參與兼て學務委員に任じ地方の教育を獎勵せらる但日新の科學漸く盛に從來の皇漢學のみにては或は學生の進路に障害有らんことを恐れ明治十三年斷然私塾を閉鎖し諸生を散じて中學校師範學校陸軍士官學校等に入學せしめられ

たり慶應三年以來及門の諸生にして現に文武官吏に任じ教育實業に従事し名を爲せるもの尠からず

是時に當り天下政黨の論漸く盛にして詭激狂躁の徒動もすれば國體民情を顧みずルソーの社會契約論モンテスキューの萬法精理等佛國一派の革命説を標榜して我國を律せんとし一面には西洋の文物風習に心酔し國體の精華を蔑視するに至らんとするを憂ひ縣下に紫瀉會の興るや之と聯絡して國粹の助長國體の擁護に努め後同志の士と與に國權黨を組織し遂に身を政界に投ずるに至れり爾來縣會議員の改選ある毎に選に當り常置委員縣參事會員副議長に選ばれ地方政治に參與せらるること殆んど二十年に及ぶ

明治三十年衆議院議員の選に當り翌年三月總選舉に際し再び其選に當られしも爾來宿痾漸く重きを加へ復た劇務に堪へざるを以て此年六月以降専ら病を故山に養ひ僅に地方森林會議員に任じて縣の林政に參與し郡村學務委員に任じて地方教育の發展を計りしのみなりしが四十一年四月病俄に篤く越て五月十九日溘焉簣を易へらる享年七十有三戸崎城墟の中腹に葬る

菊潭之北、作稽古堂、枕城墟、面村落、草堂一區、潔樸無華、頗縱山水之勝、掇芳菲、而釣綠陰、嘯月咏雪、友朋來游、四季之景、無不可愛、而壁立萬仞、賈勇怒立、當堂之東牖、隱然如城郊者、箭筈之嶽也、如飛如馳、峰頭聳空、當堂之東楣、翠色可掬者、馬鞍之山也、發源於市成之東、蛇回

堂南者、黃菊川也、過風儀山下、潺々鳴於堂北者、狹水也、其山乃如仁者安於道義、而重厚不遷也、而其水如知者達於事理、而周流無滯也、仁智而居於此、則所以樂者可亦夥也、此堂也聚六經群書數十百卷、每月三次、鄉先生講經試文、俾子弟講習經史於其中、以究格致誠心之要、求修身治國之道、傍設演武場、曰擊劍、曰揮鎗、曰稜刀、讀書生員、當可百人、演武子弟、則倍蓰之、夫學校者王政之本、國家元氣所係也、齊桓公將伐魯、仲孫湫曰、魯獨秉東周禮不可伐、則以學與不學、知國之興廢也、閔子馬聘于周曰、學猶植也、不學將落、原子其亡乎、則以學與不學知家之存亡也、我靈感公聰明威武、首建學官、以一治教、然後封內翕然、莫不向學、稽古堂亦起此時、其始在隈之西、近卜築於此也、癡愚如予輩者、亦得遊此間、以聞絃誦之聲、何幸如之、昔者菊池氏之居此土也、以拉鬼之勇、動勤王之軍、闔門之士、皆慷慨激越、義旗所向、兵鋒無前、於是四方豪傑、聞菊池之風、奮起者、亦不少矣、上之敵王之所懼、以恢復爲己任、下之各盡力致死、以振武於亂離之間今也政明治休、四方無虞、江山無情、漠然徒見山高而水清、士之往來於此間者、以氣稟物欲、爲己敵、猶菊池氏之馭驅群賊於水沮山隅也、以聖賢傳爲干城、猶菊池氏之據嶮養銳、以永保其城壘也則或經史、或詩之、於擊劍、於揮槍、不求諸名譽利達而、求諸爲己事君親之間、盡力致身之訓、存養省察、孜孜勉之臨利害得失、卓然不可奪失、庶幾乎不愧菊池氏勤王之教也、是爲記、

評曰、菊池不啻菊水之秀美、與勤王之遺蹟、殊如菊池重朝、建孔子堂、行釋奠之禮、以興文教

千古足奮人心、稽古堂亦酌其流者歟、此種之文、關於世道、不唯可以辭藻論之、

遊玉祥寺

峽水褰衣度、寺門路不迷、荒園忘俗事、禪室愛餘凄、舊業傍花話、新詩拂石題、欲探忠士碣、閑步到幽蹊、

辭家

虎竹符新到、從戎赴日邊、故人乘醉別、單騎舉鞭前、雞唱荒村曙、身辭數畝田、旅裝與劍佩、渾自兩親傳、

丙寅秋帶藩命、閱木護深葉兩山、每至則宿赤岩、六律節一、

暮鴉歸散夕陽西、拂石折第時品題、疊峰烟疑梁苑雪、孤峰花似武陵谿、雲從絕壁中間破、月向懸巖缺處低、已字山形之字水、携樽幾度費攀躋、

夏日遊正觀寺

禪門突兀倚高岡、陣々清風無盡藏、山鷲入看晴自好、溪聲洗耳夏猶涼、人間路絕仙寰趣、物外吟成翰墨場、時拂青苔催一睡、忠臣墓畔夢前王、

日清交戰皇軍連捷

萬世金甌日月光、元戎進盡對遐方、經文緯武偉勳在、揭地掀天忠節揚、彈雨夕飛大連水、劍鉞朝閃

北京霜、旭旗指處遂無敵、箠食壺漿仰太陽、

日露交戰皇軍大捷

敵國來侵果如何、天兵猛戰二年過、威凌歐露東洋穩、恩洽滿韓北狄知、放馬華山花發好、陣師牧野膚降夕、祥烟靄々春光麗、億萬生靈又凱歌、

澁江晚香

名は公木字子訥晚香と號す夙に家學を承け後韓村木下業廣に學ぶ嘉永三年勤勉衆に超え學業進歩の故を以て賞賜せらる安政四年小笠原國老の招に應じ邸内に於子弟及家臣に教授す元治元年大津郷文藝指導を命ぜられ金穀若干を賜はる明治四年私塾を開き生徒を教授す教を受くるもの前後六百餘名に及ぶ明治五年より菊池神社に奉仕し明治十一年禰宜に任ぜられ同四十年宮司に任ぜらる明治三十七年藍綬章を賜はる大正三年正七位に叙せらる

人となり質實退遜人と争はず又一事人の短長に及ぶものなし人善をなせば己れ之を爲せし如く稱贊して置かず温顔以て人に接し藹然春風中にあるが如し而して其行履に至ては敢て犯すべからざるものあり若夫名分の關する所は親故と雖も假借する所なし薩匪の亂は天下を聳動し人心恟々懸旌の如し而して菊池は戰亂の衝に當り蜚語浮説流行し物論騷然たり此の間に處し大義を唱へ名分を明にし

其方向を知らしむ明治十四年政論勃興するや急躁過激の徒は路氏の説を唱へ自由民権を主張し狂奔叫囂底止する所なし氏極力其不可を論し國體の擁護國粹の保存を唱へ欽定憲法を主張し是を以て紫溟會の興るや城北の士は相率て之に投ぜり

學問該博經史に精通し文を屬し詩を善くす其門下生に於るや性の近き所に從て導き過あれば其非を指摘し循々善導し情意懇切親子弟の如し是を以て一ひ贊を乗りて門に入るものは業を終へ郷に歸るの後も思ふて置かず時々存問起居を俟す

晩年門生を謝し騷人墨客と山水の間に徜徉し名利の表に超越す又克く客を愛し客至れば則酒饌を饗し驩を盡して後歸らしむ塗鴉吟社の創設せらるゝや同人は翁を推して盟主とす翁齡己に八旬を超え聰明衰へず書を作るに眼鏡を用ひしを見ず尙且胸中一團の春を貯へ嬰鏢たりしも大正三年一月病の爲に歿す壽八十三

菊池神社宮司從六位澁江公木

元治元年九月大津郷文藝指南方申付(熊本藩)▲明治五年正月菊池神社祠堂申付(同)▲明治六年五月教道職十二級試補申付(教部省)▲同年十月菊池神社祠宮申付(白川縣)▲同七年五月菊池郡神道教導取締(中教院)▲同八年四月兼補少講義(教部省)▲同十一年二月菊池神社禰宜(内務省)▲同十二年十二月補中講義(内務省)▲同十五年十二月皇太神宮大麻頒布に付拔群幹旋感入爲賞絹一反を賜ふ(神

宮教會熊本々部長)▲同二十五年五月教育上功績ありとして大日本教育會總裁大勳位熾仁親王殿下の裁可を得て銀製會章を贈り功績を表彰せらる▲同二十九年三月子弟の教育に力を盡し父老の孝養に怠らず奇特として熊本縣より木杯壹組下賜▲同二十九年四月叙從八位▲同三十七年七月藍綬章下賜▲同卅八年六月叙從七位▲同四十一年一月菊池神社宮司被仰付▲四十一年四月官國幣社神職尋常試験委員を命ず▲同年四月皇典講究所評議員囑託(皇典研究所)▲同四十三年三月叙正七位▲大正三年一月廿四日六級俸下賜▲同年一月二十六日叙從六位

私塾

一、名稱 遜志堂

一、所在地 菊池郡隈府町

三綱領

一、忠信禮讓を本とし廉恥を重んずること

一、倫理を正し忠孝を勵むこと

一、智識を擴め事業を主とすること

一、文科 (豫科)

修身 歴史 文學 算術 習字 體操

(本科)

修身 歷史 文學 地理 物理 法政 代數 幾何 三角法 習字 體操

修業年限

豫科 二ヶ年 本科 四ヶ年

澁江晚香先生頌德碑銘

子爵 清浦奎吾撰

先生、名公木、字子訥、號晚香、橘姓、澁江氏、東肥菊池人、家世業儒、曾祖紫陽先生、祖松石先生、考澁灘先生、茲以碩學懿行、聞於鄉、先生幼受家學、卓然有所立、及壯受業於木下麟村之門、研精尤勤、嶄然露頭角、元治元年啣藩命、下惟于合志郡大津、闔鄉靡然嚮學、明治維新之後、歸于菊池、教育後進、四方之士爭集其門、先生講學倫於箕範、踐名教於孔跡、出則由義路、入則居仁宅、其講經授徒、以躬行為本、使之立志有為、辭氣懇々、一以至誠、聽者無不悚動矣、先生資性溫厚、藹然如春、而胸次洒落、似光風霽月、容止閑雅、監事未曾疾言遽色、故子弟相親、無隱無犯、有從容不迫之樂、而無扞格不勝之患、雖觀花聽鳥之間、亦能使人有所感發興起、家庭之間、友愛曲至、事母至孝、母夫人晚年老耄、舉止缺常、尤嗜酒、醉輒起而舞、使先生謠、先生吟詩和之、膝下承歡、婉愉之情、觀者流涕、聽者正襟、遠近子弟前後受薰陶者、一千五百餘人、立身修道者、不勝數也、先生善詩、其詩格端而調高、絕無浮華之氣、亦以可益於名教、明治廿五年大日本教育會、旌表其功

勞、而贈功蹟章、廿九年三月熊本縣知事、賞其德行、而贈桐章杯、三十七年七月、官賜勅定藍綬章而表彰其善行、蓋異數也、先生謙讓曰、聲聞過情君子恥之、臨深履薄、益務其實矣、先生曾所居之舍、在菊池郡城址、名曰天然圖畫亭、山嶽巍峩、河流蜿蜒、氣象萬千、皆在眼界、猶環畫屏而座其中、先生日夕受賞、優游自適、如不復知人間得喪之事者、頃門人相謀、建碑于此地、欲使先生德行不朽、來徵余文、余與先生相識、義不可辭、乃為之銘、銘曰、

鞍嶽崢嶸、菊水澄鮮、靈氣所開、孕出大賢、學湖洙泗、極其深淵、種桃育李、忠孝為先、躬行實踐、化及閩縣、聲達楓震、藍綬恩纏、千古師表、行正德全、白雲城址、圖畫天然、卜此勝佳、盛名惟傳、矜式後昆、貞珉維鐫

菊池公墓下作

澁江晚香

其奈滿天凶焰揚、孤忠誓欲斬豺狼、縱令楠木聳深翠、何若菊花凝晚香、立馬穿扉金箭鏑、詠歌訣子鐵心腸、豈同鼠輩偷生怯、死作七隈原上霜、

偶

作

(明治二十年前後政爭激甚有甚可憂者蓋此時之作也)

萬世真王冠宇中、五州誰得與吾同、古來朋黨多生禍、畢竟議論不奏功、遍使斯民霑帝雨、行看各國仰皇風、寄言兄弟六千萬、願作一心護日東、

奉家兄書

自曾祖之中興、至於先君三世、未曾有不以文顯者、而忠信禮讓、又其家素也、先君常語吾兄弟曰、吾家世々以儒相受、汝輩讀聖賢之書、踐禮讓之行、以能不墮祖先之業、則今吾雖死可以瞑目也、余時双角雖未及深思、竊記之於心胸、不自謀其才、謹守先君之教、叨欲期大成於一時、不幸先君罹病而歿、吾兄弟既喪所天、內無田宅之資、外無姻黨之援、零丁孤苦、朝不保夕、特因慈母鞠育之恩、以得至於成立、先是伯氏入繼本宗、不能從事於文事、仲兄受先人之後、常戒余曰、惟吾與汝、相共勉勵勤苦、當以繼先人之志也、然而以家貧故、不能遊城中入大學與國俊髦講學論文、營生計於晝日偷暇隙於晨夜、以問道於鄉之先生、而公雄性陋劣怠惰、可不有所加、仲兄有高邁超人之資、而亦事故多端、遂羈曠不能大成其所志、然而不屑變志、吃々自強、是以家產年墮、貧窶日迫、有筆資油價之煩慮、無蔬食菜羹之療飢、使人處于茲、則不氣折志變者殆希、而仲兄晏然不改其志、亦可不謂豪傑之士邪、仲兄及長益豁達、不事家人之生產、磊落不羈、超然遊于法度之外、又能飲酒、頗類於孟萬年、其接人有大鵬見鷦鷯之思、是以往々不爲俗人所悅、虛毀百出、萬口喧傳、雖然識者知其心腸者、以淮海士取之、如仲兄者不能貧而大成、如初志亦可謂有辭而已矣、雄也幸受人之養、飄然得遊于府學、就善師交士、日夜馳驅于文壇、然進步之效、茫如捕風、則與學步于邯鄲者何異、嗚呼自先人之沒、星霜已十八年、遺言猶在耳、然而無一人以酬遺命、將何辭以見先人于地下哉、一念至此腸一日而九回、則又自奮曰、雄也雖鴛亦人也、假令不能成大業以自顯、未至於自暴自棄、則從今以

往、與仲兄合心齊思、改前日之過、以爲後日之戒、刻苦自新、勉從法度內禁酒荒、外絕禽荒、節儉以興家、恭敬以持己、不敢悔慢人、幡然折節、爲忠信禮讓之人、則雖不能如父祖之盛、上足以慰祖先之靈、下可以遺子孫之榮、夫如是、可謂奉先人之遺命者乎、敢以質仲兄、仲兄其教之、

澁 江 雄 拜

全篇唯知自責焉耳、然愛兄憂家之意、津々然溢於言語之外、其愛之也深、故其言之也婉、其憂之也切、故其訴之也急、凄々惻々、如哀猿之叫月離鶴之呼子、其能有不感動物者哉、公雄平生不作間文字、此文出於至誠惻怛之情、一篇可以抵數卷、

廣 批

(廣は木下韓村翁にして雄は晚香翁のことなり)

第五編 沿革

菊池の事蹟が始めて文書に記載されしは支那三國志の魏志（皇紀五百年代の書）なるべし、同書卷三十倭人傳に其官有狗古智卑狗なる句あり、狗古智卑狗とは菊池彦と訓むべしといふ。

次に日本書紀（紀元一二八〇年勅撰）に曰く

持統天皇十年丙申夏四月二十七日戊戌肥後國皮石郡壬生諸石授位追大貳並賜絕四匹絲十約布二十端歟二十口稻一千束水田四町復戸調役以慰久苦唐地

右の皮石郡とは明治廿八年第八議會の協賛に依り明治二十九年より菊池郡に合併したる合志郡の名なり。

次に續日本紀（紀元一四五七年勅撰）に曰く

文武天皇二年戊戌夏五月二十五日甲申勅太宰府繕治大野基肆鞠智三城

右の鞠智は即ち後の菊池なり。續日本紀に曰く

和銅六年發丑夏五月二日甲子制畿内七道之諸國郡郷名務用佳字

右の制令により皮石を合志と改め鞠智を菊池と改めたるものなるべし。

以下順を追ふて菊池に關する重なる事蹟を載録すべし。

大同二年丁亥秋九月菊池郡造城野社祀松尾神(社記)

承和七年庚申六月從五位上肥後守藤原朝臣菊池麻呂兼治部大輔

天安二年戊寅閏二月二十四日丙辰肥後國言、菊池城院兵庫鼓自鳴翌日丁巳又鳴、夏六月二十日巳酉太宰府言去月一日(五月辛酉朔)大風暴風雨官舎悉破青苗折失九國二島盡被傷又肥後國菊池城院兵庫鼓自鳴菊池城不動倉十一宇火(文德實錄、類聚國史)

今尙城北村より炭化せる米粒を出すは右にいふ不動十一宇の火災の際の遺物なるべし、因に右の文德實餘は紀元一五三九年の勅撰に係るものなり。

貞觀元年己卯夏五月四日己未分肥後國合志郡始置山本郡(三代實錄)

貞觀十七年乙未夏六月二十日辛未太宰府言大島二集肥後國玉名郡倉上向西鳴、群鳥數百噬拔菊池郡倉舎葺草(三代實錄)

貞觀十八年丙申秋七月二十六日辛丑太宰府言肥後國獲白龜一長五寸長四寸五步、九月九日癸未太宰權帥在原朝臣行平奏、管肥後國合志郡擬大領日下部辰吉於所部正六位上奈我神社河邊獲白龜一(三代實錄)

右の奈我神社は今の北台志村にある同社なるべし。

元慶三年己亥春三月十六日丙申太宰府言、肥後國菊池城境兵庫戸鳴(三代實錄)

右の三代實錄は紀元一五六一年の勅撰なり、菊池城が王朝時代に於ける重要なる官城なりし事は右の太宰府の諸報告を見ても知るべし。

菊池はもと穴郷、西郷の二郷に分れたりといふ。紀元一千六百年代に源順の著述になれる和名抄には菊池に久々知と假名を附け左の九郷ある事を掲げたり。

(1)城野 (2)水島 (3)辛家 (4)夜關 (5)子養 (6)上甘 (7)日理 (8)柏原 (9)山門

城野 今の城北村の木野は其遺名なり、木野の名は屢々古文書に見えたり。

水島 今の砦村の一部落に其名を殘せり、水島城の名世に高し。

辛家 今の加茂川村の加惠は其遺名なるべし。

夜關 加茂川村の夜間なるべし、夜間を也計と訓めども間には計の訓なし。恐くは開の字の誤ならん、和名抄の關も亦開の字なるべし、夜開郷の名は各國に多し。

子養 加茂川村の五海は其遺稱なるべし、古加伊と吳訶井と清濁の差あるのみなり。

上甘 加茂川村の蟹穴村なるべし、訓讀相似たるにより後に字を轉ぜるならん。但し加惠、五海、蟹穴の三郷につき肥後國志原著者成瀬久敬は疑を有せり。

日理 現今の隈府町大字亘は其遺名なるべし、後世渡又は輪足とも書けり。渡津ある部落を日理と稱する事各國に其例甚だ多し。

柏原、水源村に原及び柏の二部落あり、中に菊池川を挟む、疑らくは其遺名なるべし。
 山門、今の旭野村岩本ならんか、岩本山門の轉語なるやも知るべからず。
 合志郡は和名抄に左の六郷を擧げたり。

(1)合志 (2)小川 (3)山道 (4)鳥島 (5)口益 (6)鳥取

右の六郷の中合志とあるは今の西合志の小合志は其遺名なるべく其他は考ふるに由なし。尙和名抄
 中山本郡中に記せる殖生は西合志村の上生なるべく佐野は田島村の佐野なるが如し。

近古以來の制に菊池は南通(領村十五)中通(領村三十一)北通(領村二十七)の三郷に分ち、合志は中
 郷(領二十八)北郷(領村十八)下郷(領村二十四)の三郷に分ちたり。

延久二年庚戌藤原則隆賜肥後國菊池郡始來菊池(武朝申狀、大日本史、菊池系圖、但し武朝申狀
 には延久年中とあり)

菊池則隆入郡以來約五百年に亘れる間は本郡が國史上に光彩を放ちたる時代なり、即ち九州勤王史
 の中心は實に本郡によりて形成せられたるなり、其時代菊池の地名が諸文書に散見するものは隈部
 守山、水島、大琳寺、正觀寺、迫間、伊倉、寺尾野、穴川、盤園久、染土、虎口、輪足、片角、廣
 瀬、木庭、藤田、鳳儀、赤星、出田、北宮、村田、加惠、西郷、長野、岡田、山崎、袈裟尾、玉祥
 寺、禪方、木野、池田、宮原、阿佐古、大林、須屋、江良、弘生、鳥栖、久米、福本、合志、小野

崎、林原、板井、村吉、竹迫等なり。菊池氏の史蹟は別に篇を設けたるを以て此に贅せず。

後菊池を深川、河原の兩手永に分ち合志を大津、竹迫の兩手永に分つて行政區を定め、各々會所を
 設置せり。菊池は村數百五十五箇村此内郷村六十七枝郷七箇所を有し、合志は村數二百一箇所此内
 郷村六十枝郷十三箇所を有し其他は郷村帳に記載せざりしといふ。

河原手永見圖帳の卷尾に郡奉行の名字を記し天正十七年には平井十兵衛久治、慶長二年には蟹江五
 郎兵衛、田寺平太夫、庄屋玄蕃、元和四年には佐々備前と見えたり。

尙手永を設けられたる前後に於て合志郡には左の如き變動の傳説及び記録あり。

弓削、石原、吉原、小山御領の四ヶ村(高九百五十一石)は往古詫磨郡屬にせしを何れの比にや詫磨
 別當の女を合志藏人に嫁せし時化粧田として遣はしたるより合志郡に入れりといふ。然るに現今は
 再び之を本郡より割きて飽託郡に復歸せしめたり。

寛永年中に成立せし村々は現今原水村の内南方、中尾、馬場並に左の諸村なり。

鐵炮町、忠利侯の命により地鐵炮の者を仕立て土着せしめらる。

新町、里俗枯木町と云ふ忠利侯の命に依て寛永十一年、鐵始め同十六年成就す。府へ四里大津へ
 一里、西の方構口より東の方構口に至る四町二十五間なり。

黒石及花立、(別項へ詳記せり故に略す)

天正の比に變遷せるもの

苦竹村、里俗苦竹町と云ふ、町村の内なり。

天正の比迄此邊廣野なり一簇の苦竹のみ茂りしを加藤侯領國の時阿蘇郡内の牧より此に至り驛宿を仕立つ可しとして三年間の年貢免許ありしが、農民四方より來り集り慶長二年の比より町所立ちぬ。元祿二年今の所に直り寛永七年農家半は始めの所に歸住す。(コノ農家ハ大津町ノ内新村ナルベシ) (サレバ最初ノ町モ新村ナルベキカ) 塔迫村、吹田村、弓削村、

白川沿岸にありしを加藤侯領の時現地に移さる。

延寶の比には上津久禮村を白川沿岸より現地に移されたり。

瀬田村は往昔阿蘇郡南郷に屬せしものゝ如し。其の證として鎌倉より健軍大宮司津屋十郎惟經へ左の下文あり。

花 押 (北條時宗)

下 津屋十郎惟經所

早可領知肥後國阿蘇社領内南郷勢多村並久和波多田二町門田染段屋敷赤池陣事

右親父健軍大宮司惟盛知行所也而年來依官仕之忠惟經可令安堵領掌之狀如件

弘安元年六月十四日

明治初年に町村の分合を行ひ行政區を定めて大區小區の稱號を用ひたりしが大政官布告第十七號により之を廢し郡區となし明治十二年一月二十日布達第五號を以て菊池合志郡役所を隈府町に設けたり。是より先き熊本藩は明治四年七月十四日熊本縣と改め本郡も之に屬したりしが、明治五年六月十三日白川縣と改められ其管轄内に屬し明治九年二月廿四日再び熊本縣と稱するに至れり。明治十四年七月一日より更に行政郡區を更定せられ山鹿山本菊池合志郡役所を隈府町に設けられたり。廿二年町村制實施せられ菊池郡は一町十一村となり合志郡は一町十二村に分合せられたり。明治二十八年六月卅日山鹿山本菊池合志郡役所を廢し同年七月一日山鹿山本、菊池合志の二郡役所を置き明治二十九年三月卅一日菊池合志郡役所を廢し同年四月一日菊池郡役所を置き二町二十三村を管し以て今日に至れり。

左に舊藩時代各手永に屬する町村の一斑を掲ぐべし。

1 河原手永

(菊池風土記に據る)

| 現今の町村名 | 舊村名 | 高 | 土質 | 適地 | 作物 |
|--------|---------------|--------|-------|----|--------------------|
| 隈府 | 正觀寺 | 五〇二、石餘 | 黒壤 | | 米、粟に宜し農具材木を取出すもの多し |
| 同 | 隈府 | 七〇一、 | 同 | | |
| 同 | 輪足 (築地モ含ム) | 四〇八、 | 黒赤彌塩錯 | | 米、粟大に宜し |

| | | | | | | |
|---|---|------|------|---|------|------------|
| 城 | 北 | 木野本分 | 九八九、 | 疆 | 疆又灰土 | |
| 同 | 同 | 本分 | 七〇七、 | 同 | 同 | 楮宜し |
| 同 | 同 | 宮原 | 二九一、 | 疆 | 疆 | 米宜し |
| 同 | 同 | 阿佐古 | 二七七、 | 同 | 沼あり | 同 |
| 同 | 同 | 池田 | 二〇九、 | 砂 | 疆 | 同、楮蜜柑よろし |
| 同 | 同 | 龍徳 | 二六〇、 | 同 | 同 | 同、楮よろし |
| 同 | 同 | 道場 | 一九二、 | 同 | 同 | 同、楮よろし |
| 同 | 同 | 大林 | 二二三、 | 疆 | 疆 | 米宜し、楮よろし |
| 同 | 同 | 木山 | 四〇七、 | 同 | 同 | |
| 同 | 同 | 米原 | 三一九、 | 砂 | 疆 | 疆 |
| 同 | 同 | 稗方 | 三九七、 | 疆 | 疆灰土 | 楮よろし、石取場あり |
| 龍 | 門 | 白木 | 四七、 | 砂 | 疆 | 楮多 |
| 同 | 同 | 小楠野 | 三〇、 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 寺尾野 | 四五、 | 疆 | 疆 | 米禾宜し、楮名産なり |
| 同 | 同 | 染土 | 二六、 | 疆 | 疆 | 米宜し |

| | | | | | | | |
|---|---|-----|------|---|---|-------------|---------|
| 同 | 同 | 虎口 | 一二二、 | 砂 | 疆 | 疆 | 米禾麻苧楮宜し |
| 同 | 同 | 長野 | 六六、 | 疆 | 疆 | 米禾宜し、麻苧名産なり | |
| 同 | 同 | 斑蛇口 | 九五、 | 同 | 同 | 田少 | 楮、茶宜し |

以上四十五村

惣高一萬四千四百七石餘

疆監郡惣高二萬八千三十七石七升八合

軍役高二萬六千四百六十三石二斗六升

加藤氏の代惣高二萬六千五百八十四石八合六勺六才(續加藤記)

1 竹迫手永

(肥後國志に據る)

| | | | | | | |
|----|---|-------|-------|---------|---------|---|
| 町今 | 現 | 村名 | 舊付名 | 高 | 備 | 考 |
| 合 | 志 | 竹迫町 | 上莊村の内 | 一〇四九、石餘 | | |
| 同 | 同 | 油古閑 | | 二四八、 | | |
| 同 | 同 | 原口 | | 四六六、 | 大園の小村あり | |
| 同 | 同 | 原口村の内 | | 二四八、 | | |
| 同 | 同 | 群村 | | 四三七、 | | |
| 同 | 同 | 野付 | | | | |

| | | | |
|-----|----------------|-------|-------------------|
| 護川 | 中窪田 | 三四〇、四 | 原口、御願所、古閑、新界の小村あり |
| 同 | 中窪田村の内 下中窪田 | 六三三、七 | |
| 同 | 杉水 | 一六一七、 | 今の小林の小村あり |
| 同 | 片俣 | 九九、八 | |
| 同 | 尾足 | 五二五、四 | 片川瀬の小村あり |
| 同 | 川部 | 六二四、八 | 出分小河原の小村あり |
| 北合志 | 伊坂 | 五八八、二 | 三本木の村あり |
| 同 | 高永 | 九八七、五 | |
| 同 | 妻越 | 五三五、三 | 津留の小村あり |
| 同 | 小原 | 五〇二、八 | 西小原、東小原、向小原の小村あり |
| 同 | 高柳 | 二六三、一 | |
| 同 | 湯船 | 二二〇、三 | 出分あり |
| 同 | 平村 | 二五八、四 | |
| 以上 | | | |

總高二萬三千六十九石九斗七升八合八勺五才

◎細川侯藩政時代の調査

(官職制度考に據る)

元菊池郡 代一人 書記一人

一、人口二萬〇百五十三人 男一萬〇六百四十八人 女九千五百〇五人

1 河原懸 本村三五 小村六七
 高、一萬三千六百三十石七升八合一勺二才
 物成、七千四百一石一斗九升三合七才

2 深川懸 本村四四 小村四七
 高、一萬四千四百七石四合四勺四才
 物成、四千四百三十六石八斗九升四合八勺

總計 高、二萬八千三十七石八升二合五勺六才 物成、一萬四千八百三十八石八升四合四勺五才

元合志郡 代一人 書記一人

一、人口二萬四千七百四十三人 男一萬千六百二十二 女一萬三千百二十一

1 竹迫懸 本村五〇 小村四二
 高、二萬六千七百六十四石七升八合一勺二才
 物成、七千七百八十四石八斗八升二合六勺

2 大津懸 本村四七 小村四六
 高、二萬三千四十一石一斗八升八勺五才
 物成、七千九百二十六石六斗一升二合二勺六才

總計 高、四萬九千八百五十二石五斗五升九合五才 物成、一萬五千七百一十一石五斗六升八勺

年表

| 紀元 | 天皇 | 年 | 月 | 摘要 |
|------|------|------|-------|-------------------------|
| 一三五六 | 持統天皇 | 十年 | 四月 | 皮石郡石生諸石に恩賜あり |
| 一三五八 | 文武天皇 | 二年 | 五月 | 鞠智城繕治 |
| 一三七三 | 元明天皇 | 和銅六年 | 五月 | 郡郷名に佳字を用ふ |
| 一四六七 | 平城天皇 | 大同二年 | 九月 | 城野松尾神を祀る |
| 一五一一 | 文德天皇 | 仁壽二年 | 四月 | 久米壽勝寺を建つ |
| 一五一八 | 同 | 天安二年 | 二月 | 菊池城院兵庫鼓自鳴 |
| 同 | 同 | 同 | 五月 | 菊池城院兵庫鼓自鳴菊池不動倉十一字焼失 |
| 一五一九 | 清和天皇 | 貞觀元年 | 五月 | 合志郡を分つて山本郡を置く |
| 一五三五 | 同 | 同 | 十七年六月 | 群鳥數百菊池郡倉倉葺草を噬抜く |
| 一五三六 | 同 | 同 | 十八年七月 | 合志郡擬大領日下部辰吉奈我神社の河邊に白龜を得 |
| 一五三九 | 陽成天皇 | 元慶三年 | 三月 | 菊池城境兵戸庫自鳴 |
| 一六〇〇 | 朱雀天皇 | 天慶三年 | 年 | 久米八幡宮造建 |

| | | | | |
|------|-------|-------|-----|---|
| 一六七九 | 後一條天皇 | 寛仁三年 | 四月 | 刀伊賊來襲太宰權帥藤原隆家之を撃退す |
| 一七三〇 | 後三條天皇 | 延久二年 | 年 | 藤原隆家の孫則隆菊池郡に來り始めて菊池氏を稱す |
| 一八四三 | 安徳天皇 | 壽永三年 | 八月 | 菊池隆直太宰府行宮を護衛す |
| 同 | 同 | 同 | 九月 | 菊池胤益屋島に行宮を營む |
| 一八四五 | 後鳥羽天皇 | 文治元年 | 三月 | 菊池隆長同隆直壇浦に殉死す |
| 一八八一 | 仲恭天皇 | 承久三年 | 五月 | 菊池一族北條軍を宇治勢多に防ぐ |
| 一九三四 | 龜山天皇 | 文永十一年 | 十月 | 菊池武房元軍を破る此の役菊池軍殊勳第一たり |
| 一九四一 | 後宇多天皇 | 弘安四年 | 七月 | 菊池武房元軍を防ぐ |
| 一九六〇 | 後伏見天皇 | 正安二年 | 十月 | 詫磨顯秀合志郡村吉村の田地を賜はる |
| 一九七六 | 花園天皇 | 正和五年 | 七月 | 菊池武時日輪寺を修む |
| 一九九三 | 後醍醐天皇 | 元弘三年 | 三月 | 菊池武時入道寂阿賊將北條英時を博多に攻めて戦死す其子頼隆隆寂一族赤星有隆等之に死す |
| 一九九四 | 同 | 建武元年 | 年 | 菊池武重肥後守護に任ぜらる |
| 一九九五 | 同 | 建武二年 | 十二月 | 武重箱根先陣此の役槍を發明す |
| 一九九六 | 同 | 延元元年 | 正月 | 菊池武村淀大渡に戦死す |
| 同 | 同 | 同 | 三月 | 菊池武敏、足利尊氏と多多良濱に戦ふ |

第五編 沿革

| | | | |
|------|--------|---------|----------------|
| 二〇四一 | 同 | 弘和元年六月 | 菊池落城 |
| 二〇四四 | 同 | 元中元年七月 | 武朝申狀を奉呈す |
| 二〇五二 | 同 | 同 九年十月 | 南北朝合一 |
| 二〇六七 | 後小松天皇 | 應永十四年三月 | 武朝卒し兼朝嗣ぐ |
| 二〇九一 | 後花園天皇 | 永享 三年 | 兼朝罷め持朝嗣ぐ |
| 二一〇四 | 同 | 文安元年三月 | 兼朝卒す |
| 二一〇六 | 同 | 同 三年七月 | 持朝卒し爲邦嗣ぐ |
| 二一二五 | 後土御門天皇 | 寛正六年四月 | 菊池爲安高良山に死す |
| 二一二六 | 同 | 文正 元年 | 爲邦辭し重朝嗣ぐ |
| 二一三二 | 同 | 文明 四年 | 重朝孔子堂を建つ |
| 二一三六 | 同 | 同 八年五月 | 重朝藤崎宮に於て聯歌會を開く |
| 二一三七 | 同 | 同 九年二月 | 孔子堂に釋奠の禮を行ふ |
| 二一四一 | 同 | 同 十三年八月 | 隈府に於て聯歌會を行ふ |
| 二一四四 | 同 | 同 十六年四月 | 重朝宇土爲光を木原に破る |
| 二一四五 | 同 | 同 十七年 | 重朝阿蘇に敗る |

| | | | |
|------|-------|--------|--------------------------------|
| 二一四八 | 同 | 長享二年十月 | 爲邦卒す |
| 二一五三 | 同 | 明應二年十月 | 重朝卒し子武運(能運)嗣ぐ |
| 二一六一 | 後柏原天皇 | 文龜元年五月 | 能運宇土爲光に破られ島原に奔る長子重爲日向米良に匿る |
| 二一六三 | 同 | 同 三年九月 | 能運島原より歸りて爲光を破る |
| 二一六四 | 同 | 永正元年二月 | 能運卒し一族政朝(政隆)嗣ぐ |
| 二一六九 | 同 | 同 六年八月 | 政隆阿蘇惟長(武經)と戦ひ敗死す |
| 二一七一 | 同 | 同 八年 | 菊池武包肥後守護となる |
| 二一八〇 | 同 | 同 十七年 | 武包大友氏の爲に追はれて菊池を去る |
| 二一九二 | 後奈良天皇 | 天文元年二月 | 菊池武包島原に卒し肥後守護菊池家滅亡す |
| 二一九四 | 同 | 天文 三年 | 大友義宗(菊池に入りて菊池氏を稱し後に義武といふ)隈府を去る |
| 二二一一 | 同 | 同 二十年 | 赤星親家入道道雲隈府城主となる |
| 二二一九 | 正親町天皇 | 永祿二年五月 | 赤星親家、隈部親永大いに合瀬川に戦ふ |
| 二二三八 | 同 | 天正六年四月 | 龍造寺政家隈府城を陥る、隈部親永隈府城主となる |
| 二二四七 | 後陽成天皇 | 天正十五年 | 豊臣秀吉九州親征 |
| 同 | 同 | 同 七月 | 佐々成政隈部親永を隈府城に改め城遂に陥る |

| 商 | | 產 | | | | 水 | |
|----------|---------|-------|--------|-------------|-------|----|----------|
| 及行銀 | 商 | 養殖 | 水產 | 菊池 | 漁 | 生 | 漁業 |
| | | | | | | | |
| 菊池肥料合資會社 | 芳屋合名會社 | 私有水 | 公有水面 | 區別 | 其鰻鮒鯉鮎 | 種別 | 計他 |
| 株式限府銀行 | 會社 | 六四 | 三三、七九三 | 養殖場同面積收穫高價格 | 計他 | 數 | 三、六五〇 |
| 名 | 資本金同拂込金 | 三五六 | 三五六 | 五五〇 | 七五五 | 量 | 三八五、五〇〇 |
| 積立金 | 積立金 | 七二 | 七二 | 三三〇 | 一、五七三 | 價 | 一四六、二六〇 |
| 四、二〇〇 | 四、二〇〇 | 四、二〇〇 | 四、二〇〇 | 四、二〇〇 | 二、一七六 | 格 | 一六、一七九 |
| 四、二〇〇 | 四、二〇〇 | 四、二〇〇 | 四、二〇〇 | 四、二〇〇 | 五、六八六 | | 五、四二、七五五 |

| 畜 | | 業 | |
|-----------|----|--------|--------|
| 種別 | 種別 | 質屋貸金 | 郵便貯金 |
| 雞 | 牛馬 | 店流受貸區 | 店流受貸區 |
| 卵 | 雜種 | 數高金高 | 數高金高 |
| 七、七〇二 | 雜種 | 六六、三三三 | 六六、三三三 |
| 一、八五二、八二〇 | 馬 | 三二、七五九 | 三二、七五九 |
| 三、七〇五、六 | 馬 | 六、七〇一 | 六、七〇一 |
| | 馬 | 九、〇一一 | 九、〇一一 |
| | 馬 | 二二五 | 二二五 |
| | 馬 | 二〇、七七六 | 二〇、七七六 |
| | 馬 | 五、八〇〇 | 五、八〇〇 |
| | 馬 | 八、五、六七 | 八、五、六七 |

| 產 | | 林 | | | | 產 | |
|-----------|-------------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 雜 | 產 | 有野 | 私林 | 有寺 | 公社 | 野林有國 | 市 |
| | | | | | | | |
| 竹木 | 椎苗石竹下木挽丸及角材 | 伐採 | 殖栽 | 面積 | 面積 | 面積 | 面積 |
| 皮 | 茸木類材草炭材 | 用材薪炭用竹材價格 | 面積樹數殖栽費 | 面積 | 面積 | 面積 | 面積 |
| 七、一六〇 | 七、一六〇 | 一、七〇一 | 一、七〇一 | 一、七〇一 | 一、七〇一 | 一、七〇一 | 一、七〇一 |
| 七、九七四 | 七、九七四 | 九、三三六 | 九、三三六 | 九、三三六 | 九、三三六 | 九、三三六 | 九、三三六 |
| 五、五〇〇 | 五、五〇〇 | 一一、七三八 | 一一、七三八 | 一一、七三八 | 一一、七三八 | 一一、七三八 | 一一、七三八 |
| 二、五三三、〇〇〇 | 二、五三三、〇〇〇 | 三、九六八、一五 | 三、九六八、一五 | 三、九六八、一五 | 三、九六八、一五 | 三、九六八、一五 | 三、九六八、一五 |
| 二、一四六 | 二、一四六 | 五、四八二、九 | 五、四八二、九 | 五、四八二、九 | 五、四八二、九 | 五、四八二、九 | 五、四八二、九 |

| 生 | | 衛 | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 警 | 察 | 病 | 染 | 傳 | 藥 | 他 | 其 | 師 | 醫 | 名 | 其 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | 看 | 產 | 灸 | 鍼 | 蹄 |
| 署 | 同 | 赤 | 腸 | 病 | 藥 | 看 | 產 | 灸 | 鍼 | 蹄 | 獸 | 藥 | 齒 | 醫 | 名 | 其 |
| 署 | 分 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 | 熱 |
| 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 |
| 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 |
| 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 |
| 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 |
| 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 |
| 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 |
| 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 | 署 |

